

---

# 恋愛大量破綻兵器？ CDSキューピッド・デフォルト・スワップ！

境康隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛大量破綻兵器？ CDSキューピッド・デフォルト・スワップ！

### 【Nコード】

N1324U

### 【作者名】

境康隆

### 【あらすじ】

つきぬけまゆこ

突抜魔優子は恋のキューピッド——のアルバイト。高校生女子。

自分の恋は気になる同級生がいるが、あまり芳しくない。

ある日クラスメートの女子吉祥院蓮華きつしやういんれんげにアルバイトに誘われる。

仕事はCDS——キューピッド・デフォルト・スワップに関する、恋の手伝いすることだった。

折しもサブブライドルン問題に端を発した世界規模の相互不信で、キューピッドクライシスと呼ばれる連鎖恋愛破綻——信愛危機

が懸念されていた。そしてそれを阻止するのが魔優子の仕事だった。また、人の間に不穏な感情を蔓延させようとする『魔族』との戦いも、仕事に含まれていると教えられる。

CDSにSIV、CDOなど耳慣れぬ単語・略語が飛び交う世界で、魔優子は自分の恋はままならないまま、キューピッドの仕事に奔走する。

## プロローグ

「ななな！ 何で私が――」

女子高生突抜魔優子つきめけまゆこは、女子としては少々凛々しい眉を吊り上げた。

太い訳ではない。それなりに細いが、濃く力強いカーブを描いている。

やはり凛々しいという言葉が一番似合う眉だ。

「何で私が！ こんな格好しなきゃならないのよ！」

魔優子はやはりその凛々しい眉を跳ね上げた。

魔優子はあるもしない答えを虚空に求めようとしたのか、そんな凛々しい眉をその赤い顔とともにあちらこちらに向けた。茹で上げたように真っ赤な顔だ。

だがここはいたって普通の公園。

お昼の陽光が肌に温かい梅雨も終わりがけの公園だ。答えなど何処にも書いていない。

代わりに目に入ってくるのは公園の人々。

特に男女のペア。公園を散策したり、ベンチで休んだりしている仲睦まじい恋人同士達。

体を密着させる男女に時折目を奪われながら、魔優子は周囲を見回した。

魔優子は肩をすぼめていた。そしてかなり内股になっている。腰も引けている。

己の姿を隠そうとしてか、なるべく小さくなって目立たないようになっているようだ。

「『何で』って、世界がピンチだからだよ。魔優子ちゃん」

満面の笑みを浮かべた少女が、にこやかに答えた。

魔優子の先を歩き、しばらく後ろ歩きに切り替えてその笑顔を見た。

同性の魔優子ですら目を奪われる美少女だ。

円らかな瞳は万華鏡を覗き込んだかのように光を反射している。気品溢れる鼻柱は、神殿にでも使われる大理石の柱よろしくずっと立っている。可憐な唇はあたかも赤い宝石をはめ込んだかのように。儂げな両耳は職人によって加工を施されたメノウの装飾品のごとくだ。何よりその全てのパーツが左右対称——シンメトリーにできている。

「だから！ 何で『世界のピンチ』で私がこんな格好を！」

「可愛いじゃない」

「蓮華<sup>れんげ</sup>ってば！」

「ん？」

蓮華と呼ばれた少女は何処までも、にこやかに立ち止まった。どうやら名前と呼ばれたことがとても嬉しいようだ。

「だ、だから、ななな、何で。わわわ、私が！ 私が…… せ、世界のピンチで私が——」

魔優子も立ち止まる。そして目の前の少女の姿に釘づけになる。その容姿もさることながら、少女の装いは人々の目を引きつけていた。

魔優子と同じ姿をしている。それでいて赤面が収まらない魔優子とは違い、にこやかにその姿をさらしている。

デザイナーズ制服かと見間違えう程の可愛い服だ。少しでもスタイルに自信がなければ、とても恥ずかしくて着ていられない服だ。

自分が似合っているのか、魔優子には自信がないのだろう。

背中からは羽が生えている。矢はないが弓も持たされている。

更に頭上には原理不明の力で光の輪が浮いている。

どうにも魔優子には理解できない。己がこのような格好をさせられている理由が理解できない。そんな感じに魔優子は相手と己の全身を見回した。

魔優子は今一度眉を吊り上げる。

そう。この姿はどう見ても——

「何で私が、恋のキューピッドなのよ！」

恋のキューピッドだったからだ。

## CDS 1

キューピッドⅡ恋の開始（に際し）

デフォルトⅡ恋の破綻（があった場合）

スワップⅡ恋の補償（として貴方に――）

長大な光が天を貫いた。

矮小な何かがその光に慌てて宙で身を翻す。黒い陰のような矮小なものだ。それが空を逃げ惑うように飛んでいた。勿論逃げ惑う相手はその光だった。

その長大な光は次々と矮小なものに襲いかかる。

「当たってないわよ……」

眠たげに半目を開けた少女が、昼の明るい空を見上げて呆れたようにそう呟く。その眩しげな眼差しに相応しい寝起きのような小さな声だ。

少女は人気のない市民グラウンドで興味無さげに昼下がりの空を見上げていた。

少女の背中には天使の羽よろしく、白い翼が生えていた。頭上には光の輪が浮いている。その手には矢のない弓を持っていた。

そう、それはデザイナーズ制服顔負けの天使のコスチュームだ。

「分かってるツスよ！」

長い髪を両サイドでまとめた別の少女がその声に元気に応えた。

こちらと同じ姿をしている。

同時に少女の手元でギリリと何か竹をしならせるような音がした。やはり弓だ。

このツインテールの少女は天を目がけて弓を構えていた。少女は矢のない弓を天に向かって引き絞っていた。

「オリヤ！」

だが少女が気合いを入れると同時に、その弓に矢が現れる。

現れたのは光の矢。

放電をそのまま固めたかのような荒々しい光が、その手元に光の矢として突如現れていた。

少女の狙いは空を舞う黒い矮小なものだろう。光の矢が現れるや、その狙いを定めるために矮小なものをその矢の先で追いかけた。  
「食らうツスよ！」

ツインテールの少女がそう叫び上げると、光の矢は音を立てて放たれた。そして弦を放れるや否や、その矢は光の尾を引いて飛んでいく。

だがその長大な矢は、あっさりと矮小なものに避けられる。そのふらふらとした小さな陰の動きは、何処か人をバカにしているようにも見える。

「もつとよく狙いなさいよ……」

「自分でちゃんと射れるようになってから、言っただけツスね」

「ふん……」

矮小なものは空中で矢を避けながらも、逃げ出そうとはしなかった。

グラウンドにいる少女二人に今にも飛びかからんとしてか、空中でバランスをとり地面の様子をうかがっている。

顔はない。顔と言うか表情がない。黒い顔らしき部分に、目と口の穴が白く空いているだけだ。それも厭らしい笑みの形に。確かに記号として『笑っている』。だがそれが表情だとはとても思えない。その顔らしき部分の下に、おざなりな黒い体がついていた。手足があつて、尻尾があり、羽が生えている。そんな簡単な体だ。

「オリヤ！ オリヤ！ オリヤ！」

そんな黒い謎の存在に、ツインテールの少女は矢を乱射した。何もない弓に光の矢が現れるや、少女は次々と引き切った弦を解き放つ。

「外れ。外れ。外れ……」

そしてその度に矮小なものに避けられ、半目の少女に呆れられた。

「だあー！ 魔族の眷属風情が、ちょこまかとし過ぎッスよ！」

「そんなんじや、我が社のエースの座は、三組の新人さんに奪われるわね……」

「何を！ 魔族退治はアタシの仕事ッスよ！」

ツインテールの少女が目を剥いた。己が魔族の眷属と呼んだ矮小なものを、その瞳の光で先に射抜く。

「——ッ！」

次の瞬間、長大だけでなく鋭利な光の矢がその矮小なものを実際に貫いた。

「……」

矮小なものは己の体に空いた穴に一瞬目を落としたが、やはり『笑っているだけ』の顔をもう一度上げると力なく落ちていった。

「魔族の眷属を撃破。やればできるじゃない……」

散り散りになってグラウンドに落ちてきた矮小なものの残骸。それを見下ろして半目の少女が呟く。

「魔族退治も、恋のキューピッドも！ アタシがこの会社のエースッスよ！」

「恋のキューピッドの方は、あなたは別にエースでも何でもないわよ……」

「何を！ ひどいッスね！」

と抗議の声を上げるツインテールの少女の剣幕を余所に、半目の少女は地面でまだもがいている矮小なものを見下ろした。

「ふん…… 魔族——人の幸せを踏みにじるもの……」

半目の少女はそう呟くと、嫌悪感も露に矮小なものの残骸を踏みつけた。

「だから！ 何で私が恋のキューピッドなのよ！」

突抜魔優子は周囲の状況も、己の姿も忘れてそう叫び上げた。勿論、とたんに集まったのは、公園でのひと時を楽しんでいた人々の視線だ。

今は土曜の正午過ぎ。長い平日が終わり、そのご褒美のような穏やかな陽光がもたらされた休日を、多くの人々が満喫しているところだった。

「はっ！」

恥ずかしい格好をしている自分。その恥ずかしさ故に叫び上げてしまったが、返って注目を集めてしまっている。

そのことに気づいたのか魔優子とはつさに蓮華の後ろに隠れた。

「そんなに恥ずかしがらなくていいのに。素敵なコスチュームに、素敵な仕事でしょ？ 胸張ってよ。それにバイトはしたいんでしょ？」

蓮華が呆れた顔で振りかえる。

「だって…… 蓮華が私にだってできる、簡単な仕事だって言うから……」

魔優子の眉が下がった。女子としては少々凛々しい眉だ。それがしょんぼりと下がっていく。

「素敵だよ。だって、似合ってるもの。魔優子ちゃん」

「そ、そう？ そうかな……」

「五條くんにはもう見せたの？」

「——ッ！ なっ？ ななな、何でここで！ 何で、あいつの名前が出てくるのよ？」

「自分の胸に訊いたら？」

「ななな！ 何か勘違いしてない？ わ、私別に光助とは何にもないわよ！」

「光助って呼んでるんだ？」

「——ッ！ 呼んでないわよ！」

「今言ったじゃない？」

「ちょ、ちよつと勢い余って口に出ただけよ！ 昔の癖が出ただけよ！」

「ふーん」

「ごごご、五條は関係ないの！ 私が恋のキューピッドなのが問題なの！ あいつはただの幼なじみなの！ キャーッ！」

捲し立てながら歩いていた魔優子が悲鳴を上げて何かにぶつかった。

「ごめんなさい！」

魔優子がぶつかったのはふわふわでもこもこの猫の着ぐるみだ。アイスクリームの移動販売。その脇でチラシを配っていた猫の着ぐるみの背中に、魔優子は自分から思いつきりぶつかっていった。

猫の着ぐるみが何事かと慌てたようにキョロキョロと辺りを見回した。

「ごめんなさい！ 私うつかりしてて！ 大丈夫ですか？ あ、アイス屋さん、今日からなんですか？ これチラシですよ？ いただいていいですか？」

魔優子は慌てて猫の正面に回り込むや、その手からチラシを一枚受け取った。

猫の着ぐるみが困惑気味に何度も頷く。

「もう蓮華のせいで、要らない恥かいたじゃない！」

魔優子がやはり真っ赤な顔で蓮華を追いかけた。

分かりやすい顔だと言わんばかりに、蓮華がクスクスと笑って迎える。その背中を猫がいつまでも見送った。

「ま、五條くんのこと、今はいつか。それに今胸の内を訊くのは

——」

蓮華が不意に立ち止まるとずっと目を細めた。その視線の先には驚いた顔をした男女が公園のベンチに座っていた。

喧噪とともに現れた少女二人。その二人の少女の容姿。

背中の羽に、天使の輪。矢はないが弓も持っている。

どう見てもキューピッドだ。格好だけは。

「こちらの依頼者の彼氏さんだしね」

蓮華はそのシンメトリの顔に笑顔を浮かべる。だが先程魔優子に向けた笑みとは違い何処か作り物めいている。

そしてその左右対称さ故か、何故か見る者に左右どちらにも逃げ道のない印象を与えていた。

そう、正面にとらえられるとその視線から逃れられないような錯覚を見る者に覚えさせた。まるで公明正大に人々に接する女神様の前に立ったような錯覚だ。

「CDS——キューピッド・デフォルト・スワップの契約条項にある、抜き打ちのストレステストです。キューピッドスコアを確認させていただきますね。ご協力をお願いします」

蓮華はそう言つと矢のない弓を構えた。

ベンチの男女は驚いたように目を剥いた。

だが何もなかったはずのその弓に光の矢が突如現れ煌めくと、

「い  
い  
い  
ん」

蓮華は二人の驚く顔を無視し、実に何げなくその矢を放った。

「はい！ 何処にいるの？」

駅前の人ごみの中にハスキーで艶のある声が響き渡った。

軽くウェーブのかかった髪を振り乱し、背の高い少女が身を翻した。

同時に周囲に振りまかれたのは、甘ったるいまでのこの少女の香りだ。

市販のシャンプーや石けんの香りを振りまき、その中に一際鼻孔を魅了するバニラやシヨコラのいい匂いを漂わせている。

誰もが振り向いた。その姿が目に入り、その声が耳に届き、その香りが鼻孔をくすぐると、誰もがぼおっとその姿を追ってしまった。少女はキューピッドの姿をしていた。背中に羽を生やし、右手に弓を持っている。

しかし何故か天使の輪はその頭上にはなく、代わりにその左手に持っていたのは光り輝くムチ状の何かだ。

だがそのキューピッドのコスチューム以上に、少女はその本人の魅力で人々の視線を釘づけにする。

声に負けず劣らずの艶やかな髪。細い眉毛。大きな黒目に、くつきりとした二重。睫毛は凛々しく天を突き、唇は紅く、歯は白い。それでいてノーメイクだ。

アゴは鋭く尖り、鼻はすっと高く伸びている。耳は優美なシルエツトを見せているし、首はまるで装飾品を飾る台座のように儼かなカーブを描いている。

豪奢と言っていていい少女だ。

老若男女――

まさに全ての人々がまるで舞台女優に魅入るかのようになり、その少女を中心にとりまいた。

「あたしのキューピッドの力！ 食らいたって――魔族は！」

だがその女優のような少女は、嗜虐に目を細めると不穏当な台詞を口にする。

「歡喜。見つけた。歡喜」

その脇に立つ眼鏡の少女が無表情に何度も頷いた。その不自然なまでに真つ直ぐな視線が、駅前で異様な雰囲気放つ男をとらえていた。

男は――

「くくく……」

厭らしい笑みを浮かべると二人を無視するかのように背中を見せる。

「逃さないわよ！」

豪奢な少女が道路を蹴った。眼鏡の少女が無言で後を追う。

男の背中が不意にうごめいた。何かタールでできた沼が沸き立つように、その背中から小さな陰のようなものが生まれでてくる。

「眷属ね！」

豪奢な少女がムチをふるう。それは人ごみ激しいこの駅前で、放つていいような勢いには見えなかった。

しかし少女は意に介さないようだ。人々の込み合う中へためらいもなくムチを走らせた。風を切つてムチがしなる。

まるで持ち主の意思が乗り移ったかのように、ムチは自在にその身をくねらした。

「興奮。食らいなさい。興奮」

眼鏡の少女が立ち止まるや弓を構えた。

やはりその弓に矢はない。代わりに弓を構えると現れたのは光の矢だ。

それは目を凝らさないと見えない程の細い光の線だった。

少女は興奮と言う割には何処までも無表情に、触れれば折れてしまいそうな細い光の矢を放つ。

乱射だ。

ハープでも奏でるように、眼鏡の少女は次々と弓を引いた。その

度に間断なく光の矢が飛んでいく。

かなりの速度だ。放った瞬間にはもう見えなくなっている。そして何処までも真っ直ぐだ。

少女はその特性を知っているのか、人ごみ溢れ、また突然の騒ぎに混乱する人々の間を真っ直ぐ縫うようにその光の矢を放つ。

ムチはくねりながら。矢は何処までも真っ直ぐに。人々の隙間を間一髪で縫って飛んでいく。

矮小な黒い陰のようなものが、次々とそのムチと矢にその身を碎かれた。

この魔族の眷属は形だけは『笑っている』顔を破裂させると、笑ったままで地面に落ちていく。

「ふふ」

背中を見せていた男が軽く振りかえる。そしてその様子確かめると、笑い声だけを残してかき消すように消えてしまう。

ぞつとするような震えを伴い、その笑い声は耳に届いた人々の精神を不安にかき立てた。

「はい。お騒がせしてご免なさいね」

その人々の視線を一瞬でハスキーな少女の声が回収する。皆がその声にはっと胸を撫で下ろした。

駅前での突然の騒ぎ。不可解な現象。

何より心胆を寒からしめる男の嘲笑――

だがもう一方の当事者であるにもかかわらず、その少女の声は人々の心を魅了した。

それは内容でも理屈でもない。本能的な何かだ。

華というでも言うべきものを、少女はその色香とともに振りまいて人々の心を惹きつけた。

「残念。逃げられた。残念」

もう一人少女はやはり何処までも無表情だ。残念と言う割には何処からもその表情が読み解けない。

「まあ、いき先はわかるわよ。今、思念で連絡をとるから」

女優めいた少女が何やら内面を見つめるかのように額に手をやり目をつむった。やはり同時にバニラやシヨコラの香りが漂う。

それだけの仕草と振る舞いに、周囲の人間は釘づけになってしまっていた。

先程までの騒ぎを忘れたかのように、少女が話す一言一句に耳を側立てようとする。少女の仕草はそれだけ人目を引いた。まるで演出家でもいるかのようなのだ。

少女は誰もいない虚空に向かって語り出す。勿論携帯端末などを持っている様子もない。だがまるで誰かに話しかけているかのような口調だった。

「はい、あたしよ、あたし。何？ ちゃんと、名乗れって？ いいじゃない。あたしとあなたの仲でしょ？ いつそんな仲になったって？ あはは、相変わらず生真面目ね。そうそう、魔族に逃げられちゃった。そっちにいったと思うからよろしくね。何？ 暢気に話してないで、早く追いかけてこいって？ あはは、あなたたち二人なら余裕でしょ。ん？」

少女はそこで自分が思念で会話をする姿に人々が見入っていることに気がついた。

まるで次のワンシーンを期待する観衆だ。観劇に耽る聴衆のように、人々はこのキューピッドの一挙手一投足に注目していた。

少女はその様子に悪戯な笑みを浮かべると、

「よろしくね！ 皆さんも、今日のことは忘れて下さいね！」

思念の向こうの相手と、即席の観客に愛想と手を振りまいた。

おおお――

と通行人から喚声が上がリ、

「呆気。そんな暇ない。呆気」

もう一人の少女がやはり無表情にため息らしき息を吐き出した。

「ふふん」

驚く公園の人々の前で蓮華は楽しげに光の矢を放った。まるで挨拶替わりだ。

「——ッ！」

光の矢が男性の左胸に突き刺さった。男性はその場でぐんと首を垂れてしまう。

即死——

そんな言葉が脳裏に浮かんでしまう程の光景だ。遠目に見守る先程の猫の着ぐるみを含め、公園内の多くの人々がその光景に目を見張った。

「ちよつ、ちよつと！ 蓮華！」

「やった！ 命中！」

驚く魔優子を尻目に、蓮華が嬉しげにその場で飛び上がる。公園の地面に土煙を巻き上げて蓮華が跳ねとんだ。

胸に矢が刺さり死んだように黙り込んだ男性。それをやった少女の嬉しげにはしゃぐ姿。

「蓮華ってば！」

そのギャップに魔優子はオロオロと両者を見比べてしまう。

「キューピッドの皆さんですか？」

矢の刺さった男性をその場に残し、女性の方がベンチを立てそんな魔優子達に駆け寄ってくる。

「そうですね。キューピッドスコアのストレステストにやってきました」

「突然すいません。挨拶もなしに。ほら、蓮華も謝って！」

魔優子が一人で頭を下げた。突然現れて矢を放った失礼を詫びるが、当の本人の蓮華は知らん顔で笑っている。

「挨拶なんてしてたら、抜き打ちテストにならないよ。魔優子ちゃ

ん」

「それにしても……」

魔優子は未だに動かない男性に心配げに目をやった。

「あの、これからどうしたら？」

女性が魔優子達の脇に立ち、恐る恐る男性に振りかえった。

「それはですね。この光の矢に貫かれた人間は、恋の本命にまさに視線が釘づけになりますから——」

蓮華が嬉しそうに空の弓を振り回して説明した。

「まあ。後は静かに結果をごろうじろという訳です」

「はあ……」

「CDS——キューピッド・デフォルト・スワップは言わば恋の保険。恋の債務不履行が起こった場合に、その恋愛感情の補償が受けられる恋愛派生商品。いわゆるキューピッドデリバティブの一つです」

「はあ」

蓮華の説明に女性はまた気の抜けた返事をした。

「だからこうして、恋の破綻が起こっていないか——」

「……」

見れば魔優子も分からないという顔をしていた。

「魔優子ちゃんも、説明できるようになって欲しいんだけど？」

「だって、訳分かんないわよ。何で恋愛に保険なんて利くのよ？」

「恋愛なんて賭けじゃない。保険が利くならかけたいでしょ？」

「でも、そんなの何か相手を信じてないみたいじゃない？ キューピッドの矢まで射っちゃって。人の力とか借りずに相手の気持ちは確かめようよ」

「じゃあ、魔優子ちゃんも確かめたら？」

「う……」

「あはは。それに私達キューピッドがそれを言っちゃ、商売あがったりだよ、魔優子ちゃん。天使の力も持ち腐れだよ」

「でも……」

「で、話を戻しますね。CDSは恋の破綻に際して支払いが発生する契約内容ですので、こうして――」

蓮華はそう言うのと男性の方に向き直った。

男性はうつと唸りながら、顔を上げようとしているところだった。「保険がかけられた恋が破綻していないかどうか、確かめる必要があるという訳です。キューピッドスコアを確かめる、ストレステストをさせていただきました」

「本命の人に、目が釘づけになるんだよね？」

徐々に顔が上がっていく男性。魔優子はその様子を息を呑んで見守る。

「そうだよ。魔優子ちゃん」

蓮華は結果が待ち遠しいようだ。実に楽しい笑みを、そのシンメトリーな美貌に浮かべている。

「……」

その魔優子の隣で彼女の女性が手を組んで祈るように頭を垂れた。彼氏が顔を上げて彼女の方を見ないのなら、それはこの恋の破綻を意味する。蓮華の説明によるとそういうことだ。直視できなくても仕方がないだろう。

「……」

魔優子がギュッと蓮華の制服の裾を掴んだ。こちら結果が心配なのだろう。

「ふふん」

その様子に蓮華の笑みがそれこそ蓮華の花のように花開いた。

「う……」

男性が顔を上げた。

そして――

「そして！　そしてどうなったのよ！」

雑居ビルの一角に、けたたましい少女の声が響き渡った。その叫びでビルの鉄骨そのものが震えた。そんな錯覚すら中に居た者は覚える。

「それで、それで！　どうなったの？　どうだったの？　どうしちゃったのよ！」

「ちよつ、ちよつと！　そんなに揺らさないでよ！」

けたたましい少女とは別の声が応えた。それは魔優子の声だ。体ごと別の少女に揺すられて、その声が何処か悲鳴めいている。

「さあ、マユ！　この佐倉愛由美ちゃんさくらあゆみに、全て隠さず情報開示なさい！」

ビルが古いのか。少女の声が大きいのか。ビルは更に余韻を引いて震えた。

「話すわよ。話すから、ひとまず離してよ」

マユと呼ばれて、魔優子は凜々しい眉を困惑に歪める。どうにもいつもこの友人は、魔優子の眉を見てマユと言っているようなのだ。「離すと話すの交換条件ね？　分かったわ」

愛由美と名乗った少女は、スチールの長テーブル越しに掴んでいた魔優子の胸元を離れた。こちらも魔優子と同じ姿だ。背中から羽が生え、頭に光の輪が浮いたコスチュームに身を包んでいる。

愛由美は髪が長い。だがその長い髪を実に無造作に後ろで括っている。おしゃれで伸ばしているのではないようだ。単に切るのが面倒で、伸びるに任せているのかもしれない。多少括り損ねているその長髪が、愛由美のそんな性格を物語っていた。

「さあ。愛由美ちゃんに語ってもらわよ」

愛由美はコスチュームのスカートから、携帯端末を取り出した。メモモードで起動し、タッチペンを構えると敏腕記者よろしく身を

乗り出して来る。

座っていたパイプイスを後ろに蹴り倒す勢いだった。

「学校新聞に載せる気ね？ それは止めて欲しいんだけど？」

こちらはパイプイスに座り直し、魔優子は凜々しい眉間に皺を寄せる

「何を！ この愛由美ちゃんに、取材規制とは！ 権力の濫用ね！

開かれた情報は、民主主義の基本よ！ そんなんじゃ、ダメよ！  
むしろウキウキとリークしなさいよ！」

「何言ってるのよ？」

「違うの？ なら包み隠さず全て話しなさい。取材源の秘匿は、完全を期すから安心して」

愛由美がずいっと身を持ち出し、

「うわさ話ばかり流している愛由美に、そんなこと言われても信用できないんだけど？」

魔優子も負けじとぐいっと身を持ち出した。

魔優子の眉毛が疑問を表すかのように、横一文字に並んだ。

「それはプライベートの愛由美ちゃん！ 今はジャーナリストの愛由美ちゃん！ そして更に言えばキューピッドの愛由美ちゃん！  
大丈夫よ！」

「もう。違いなんて分からないわよ」

「ほら！ 修羅場？ ドロドロ？ 陰湿な空気？ やっぱり破綻したの？ で、その時の彼女さんの様子は？ 男の人はどんな言い訳を？」

「やっぱり日頃と変わらないじゃない？ てか、何で破局で話が進んでんのよ」

「違うの？」

「違うわよ」

「なあんだ」

愛由美は急に興味をなくしたのか、パイプイスに座り直そうとして、

「おわっ！ 事件よ！」

そこにイスがないことに気づかずひっくり返った。

「にやにやにや！ 大事件ツスよ！」

背中<sup>の</sup>羽で空気を切り裂きながら、一人の少女が宙を舞った。機敏な動きで空を切るその体軀。それは長いツインテールを従えて、虚空のあらゆる面を新体操の床よろしく激しく蹴った。

その度に少女の身をかすめる何かを鮮やかにかわしてみせる。

まるで背中<sup>の</sup>羽で本当に飛んでいるかのようにだった。

少女はキューピッドの姿をしていた。キューピッド姿でツインテールを可憐に従え、自由自在に空を舞っていた。

そう、先程魔族の眷属を光の矢で射抜いたツインテールの少女だ。空を舞踊るその少女の身をかすめたのは、何故か黒く輝く光の矢だ。光なのに黒い。

少女は空中で一回転した。鋭く身を翻して一際大きい黒い光の矢を避けるや、もう一人のキューピッドの横に着地する。

「やるツスね！」

宙を自在に舞った少女は地面に降り立つや否や弓を構えた。

その弓の構え方は随分と大げさだ。何処から誰が見ても必要以上に振り回している。

少女が降り立ったのは、夕闇近い街中の商店街。コンビニエンスストアの前。

そんな何処にでもある日常の舞台に、天使の羽、天使の輪、天使の弓を持ったキューピッドが舞い降りた。それもかなり天使らしくないガサツさで。

周囲の人々の視線が一斉にこの少女に集まった。

「どうやらこの南<sup>みなみゆきな</sup>柚希菜様の――」

柚希菜と名乗ったツインテールのキューピッドは、やはり大げさな身振り手振りとともに口を開く。商店街の街路に、そこだけはキューピッドらしからぬスニーカーを擦り込むようにして立ち、こち

らもやはり矢のない弓の弦を大仰に引いた。

「本氣が見たいようッスね！」

そして柚希菜がそう言い切るや、光の矢がこつ然とその弓に現れた。それは先に蓮華が見せたものと同じく光でできた矢だった。

しかしすつと優雅なフォルムを描いていた蓮華のそれとはやはり随分と違う。

まるで暴れ狂うプラズマのような光を放っている。奔放に放電する雷をそのまま光の矢にしたかのようだ。

周囲を取り囲んでいた人々が、溢れ出るその光に恐れをなして一歩後ろに退いた。

「最初から本氣を出しなさい……」

もう一人の少女が抑えた口調で言った。言葉に起伏がない。

先程柚希菜と一緒にグラウンドで魔族の眷属を倒した少女だ。

少女はいかにも低血圧と言わんばかりに、その言葉に力を込めなかった。

だが今回は呆れて声に力が入らなかったようではないようだ。その証拠にその目がやはり寝起きのように半目に開かれている。これが素なのだろう。

その二人のキューピッドの足下では、怯えた顔の女性が腰を抜かしたように道路にへたり込んでいた。

「千佳<sup>ちか</sup>ツチ！ 冷たいッスね」

「今度バイトに入った三組の突抜さん。かなりの魔力らしいわよ。やつぱり、エース交代かしら」

「何を！ あの魔族を倒して、実力の違いを見せつけてやるッスよ！」

「また油断して。ダメよ。柚希菜」

千佳と呼ばれた半目の少女は、その目で柚希菜と同じ方を見る。

二人の前に男が立ちはだかっていた。

外見は普通の会社勤めのサラリーマンと変わらない。

背広にネクタイ、革靴。どれも手入れが行き届いているようにす

ら見える。

地面に浮いている以外は人間だと疑いようがない。

そう、その男は何に支えられることもなく宙に浮いていた。

そんな異様な人物を町ゆく人々が驚いたように取り囲んでいた。

いや、直接その顔を覗き見た者から腰を抜かさんばかりの勢いで逃げ出していく。

この宙に浮く会社員は、黒い光の矢を素手から放ち――

「厭な笑み。流石魔族ね……」

そう、全身を直に撫で回すかのような視線で、おぞましい笑みを浮かべていたからだ。

「何が事件よ。自分でイスを蹴り倒したくせに」

愛由美が雑居ビルの一角でひっくり返ると、丁度ドアから入ってきた蓮華が呆れたように言った。

両手を腰にやり、シンメトリーな目を軽蔑に細めていた。

その目の細め方も偏りが無い。完全な左右対称だ。

「むっ？ 蓮華先生。見てもいないくせに。随分と嫌みね」

愛由美は腰を摩りながら立ち上がるうとする。

己の腰よりは携帯端末が大事だったのか、それを持った手をろくに着こうともせずに腰から床に落ちたのだ。

「見なくても、想像がつくわよ」

「ぐぬぬ。おのれ」

愛由美が痛々しげに立ち上がった。

「大丈夫？ 愛由美？」

「マユ。そんな眉間に皺を寄せて心配してくれなくとも……」

「うるさい！ 眉間とか言う時だけ、真面目な顔しないでよ！」

魔優子が眉尻をつり上げた。どうにも魔優子は感情が眉毛に出るようだ。

「事件なら、千佳と柚希菜が追ってるわ。手伝いにいけば？」

「むむ。蓮華先生。ついていこうとしたら、蓮華先生が止めたんじゃないか？」

「そうだった？」

蓮華が済ました顔で答える。覚えてはいるがとぼけているようだ。

「ま、いつか。こつちの話も面白いしね。で？ 結局恋の破綻はなかったの？」

愛由美は席に座り直し、再度ぐつと身を乗り出した。

「そうよ。彼氏は、ちゃんと彼女さんの方を見たわよ……」

「むむ。言い淀んだわね。愛由美ちゃんは、誤魔化せないわよ」

語尾を濁した魔優子に愛由美がぐつと近寄った。

「べ、別に。そんな訳じゃ……」

「ほら、やっぱり自信ないんだ？ 破綻はなくとも、何かはあったと愛由美ちゃんは見た」

「むっ……」

魔優子の眉間が曇った。女子としては少々凛々しい眉が、緊張の為からかぴくりと動く。

「そうだよな。ちょっと自信なげに、彼女の方を見たかなって感じだったよね」

蓮華はそう応えると、ぐるっと机を回り込んで魔優子の横に座った。

「自信なし？ でも見たのは彼女さん？ じゃあ。少なくとも修羅場はなし？」

「そうよ。破綻もなし。修羅場もなし。もう少し二人で話し合ってみますって。猫の着ぐるみさんにぶつかって、恥をかいただけよ」

魔優子が少々赤面しながら答える。その理想の恋人同士らしい結論に頬が赤くなったのかもしれない。

「何だ。つまらない。何もなしなんだ？」

愛由美がいかにもつまらないと言う風に、パイプイスに背中を預けた。こちらもいかにも安物なイスは、それだけでぎいっと音を立てて軋む。

「そつ。CDSの支払いもなしだよ」

蓮華が頭の上の光の輪を取り外し、指でくるくると回して遊びながら答える。こちらもつまらないと思っているようだ。

「そのCDSが、いまいちよく分からないんだけど？」

「あはは、魔優子ちゃん。ちゃんと勉強しないと。CDSってのはね——」

「きーっ！ 何の事件性もないなんて！」

蓮華が何か言いかけると、愛由美がわざとらしくそう叫んだ。愛由美は叫ぶや否や、手に持っていたのとは違う携帯端末を取り出し

た。

そのままニヤリと笑うとその端末を魔優子に向ける。

「——ッ！」

「マユが愛しの光助くんと——」

「なっ！　ちょ、ちよつと！　ななな、何でそこであいつの名前が——」

隠し撮りと思しき男子生徒の写真が、その携帯端末には大写しになっている。そのことを確かめた魔優子が、机に乗り上げ飛びつくように端末を掴もうとした。

「お話しするネタがないじゃない！」

愛由美が意地悪げ笑みを浮かべ、魔優子の襲撃をひょいっと避けた。

「てか、それ！　私の携帯じゃない！　何で愛由美が持つてるのよ？」

「ぬはは、このラクシユミ株式会社の情報収集担当——佐倉愛由美ちゃんに、集められない情報などないのだ！」

「関係ないわよ！　そんなの！」

「それにしても、マユ！　隠し撮りはよくないわ！　愛由美ちゃんが、ジャーナリストとして告発してあげるわ！　愛しの光助くんに——」

「何言ってるのよ！　返しなさいよ！」

魔優子が机越しに手を伸ばす。だが愛由美はのらりくらりとその手を避けてしまう。

「魔優子ちゃん！　可愛いわ！　男をとられて、必死になってるなんて——」

「ななな！　何を言って！　蓮華も笑ってないで、手伝ってよ！」

「魔優子ちゃん。恋は戦いよ。自分の男ぐらい、自分で奪い返しなさい」

「何の話よ！」

魔優子が必死で手を伸ばした。もはや完全に体をテーブルに預け

てしまっている。

「戦いつて言えばさ、蓮華先生。千佳ぴょん達は、魔族退治？」

「魔族？ 何の話よ？」

聞き慣れない単語を聞いたせいか、魔優子が一瞬全身から力を抜いてしまう。

「魔優子ちゃん。恋は戦いだよ。たとえ相手が――」

蓮華が魔優子を試すような視線で見る。

「？」

魔優子の体が前方に傾げた。

「魔族でもね」

「キヤーツ！」

蓮華の最後の台詞は、テーブルの向こうにひっくり返った魔優子自身の悲鳴に遮られた。

「可愛いキューピッドもだ。防ぐだけで精一杯と見える」

千佳に魔族と呼ばれた男は、厭な笑みを浮かべながら左右に左手を振った。

先程柚希菜を襲った黒い光。

そのあり得ない黒く輝く妖しい光が、次々と千佳と柚希菜に襲ってくる。

「大丈夫ツスカ？ 心配ないツスよ！」

柚希菜が左手を前に差し出しながら足下の女性に声をかける。

柚希菜の左手の先には、いつの間にもやら光の輪がはめられいた。先程まで頭上で輝いていたそれを、今は手首にはめている。

そしてやはり手首の何処にも引つかかっている。中空に浮くように、その手首の周りで光り輝いていた。

「あれは天使の輪です。防御能力がありますから。安心して下さい……」

千佳が同じく女性に声をかける。柚希菜の天使の輪が作り出す光の後ろに、まるで無防備で立っている。それでいながら少しでも相手の身を護ろうとしてか、女性の前に立ってその身をかばっていた。「安心できるかどうかは、使う人によるツスけどね！」

「む？ また油断して。柚希菜……」

「油断ではなく、自信ツスよ！」

柚希菜が一際声に力を込めた。その瞬間に光の輪が長大化する。輪の直径が倍程になるや、その光を増して黒い光の矢を更なる勢いで弾き返す。

「ほほう」

「見たツスカ？ 防ぐだけで精一杯とは、言わせないツスよ！」

魔族が感嘆の声を上げ、柚希菜が見るからに増長の声を上げる。「オリヤッ！」

柚希菜が裂帛の気合いとともにその左手を大きくふるった。

黒い光の矢がまとめて払われた。

「やるな」

その様子に魔族が満足げに呟く。

「まだやるツスか？」

「……」

柚希菜の挑発に魔族が薄く笑った。やはりおぞましい笑みだ。

「ひ……」

その笑みをまともに見て、腰を抜かせたままの女性が悲鳴を上げた。

「あれは魔族です。人の幸福に忍び寄り、その幸せを踏みにじることを生業にするもの達です……」

「……」

女性は千佳の声に応えない。応えられないのだろう。

「失礼な。その女が己の結婚に不安を感じていたようだからな。相談に乗ってやってただけだ」

「結婚を間近に控えれば、誰でも多少は不安に感じるもの。それを必要以上に煽り立てて、破談に向かわせるのがお前らの手だ」

千佳がキツと魔族を睨みつけた。日頃から半目な目。それは僅かにいつもより細くなっただけだが、この時ばかりは力強い光を放つ。「いい目だ。名前を聞いておこうか？」

魔族と呼ばれた人にあらざるものは、冷たい笑みで静かに口を開いた。

「須藤<sup>すどう</sup>千佳……」

「南柚希菜ツスよ！」

千佳が静かに答え、柚希菜がはしゃいで答えた。

「あたし達もいるわよ！」

その二人の背後から声がし、ムチ状のものが空を切る。

「ふん……」

魔族がそのムチを鼻先で難なくかわした。ムチは音を立てて後方

に戻っていく。同時に漂ってきたのは鼻孔をくすぐる甘ったるい匂いだ。

「むむ！ このバニラとショコラの匂いは！ きたッスね！」

「ムチの方に反応しなさいよ……」

柚希菜が油断の限りを尽くしたように無防備に振りかえり、千佳はこちらは油断することなく視線を魔族から離さずに突っ込んだ。

「はい。追いついたわよ」

「安堵。追いついた。安堵」

女優と見間違っような豪奢な雰囲気をもった少女と、無表情な眼鏡の少女が千佳と柚希菜の背後からずっと現れた。二人ともキューピッドの姿だ。

「きたの……」

千佳が新しく現れた二人にやっと興味無さげに振り向く。

「きたわよ。もつと嬉しそうな顔をしなさいよ。思念で早く追いかけるって言ったのは、千佳の方でしょ？ 相変わらず素直じゃないわね」

「ふん……」

「むむ。アタシは嬉しいッスよ。見学人が増えたッスからね！」

「あら。あたしは見学なんてまっぴらごめんよ。勿論戦うわ」

「興奮。戦う。興奮」

四人の天使が一行に並んだ。

「おっと、先程の天使どもか。そちらの二人も名前を訊いておこうかな？」

「あたし？ あたしは霧島きりしま加奈子よ。よ・ろ・し・くね」

「警戒。長岡唯。ながおかゆい警戒」

「あなたこそ名前は？ ストーカー魔族さん……」

千佳が誰よりも一歩前に出た。その様子にやれやれと言わんばかりに肩をすくめて、加奈子が手に持ったムチを構える。

「力ないのに、前に出るの好きッスね、千佳ッちは」

「感心。リーダー気質。感心」

「ホント。フォローする身になって欲しいわね」

「うるさい。今はあいつの名前を訊いているの……」

「ふふ。ストーカーとは失礼だな。だが名前などないよ。私はただの魔族さ」

千佳のやはり静かな問いに、魔族がこちらもやはり冷たく答える。

「何を！ ストーカー以外の何だって言うツスか？ 結婚間近の女の人を追いかけて！」

「はは。それは失礼！ では諦めておいとまするでしょう！」

そう叫ぶや否や、魔族が不意に宙を蹴った。

「逃さないツスよ！」

垂直に飛び上がったその魔族に、柚希菜が電撃のような光の矢を放つ。

だが――

「ははっ！」

魔族は柚希菜以上の機敏さでその光の矢を避け、あっという間に上空に見えなくなった。

「で、結局バイトって何だったんだ？ 今日一日潰して何やってたんだ？」

その男子はカフェで何げなく口を開いた。おしゃれな店内のシツクなテーブルの上に、これでもかとノート類が拡げられていた。

土曜の夕方。学校以外でわざわざ会ったカフェ。二人きりテーブル。

テーブルを囲んだ一方の女子――突抜魔優子はその状況に少々赤面しながら席に着いていた。

「何って…… ちよつと素敵な仕事かな……」

「素敵？」

「ま、ちよつとだけね……」

「ふーん」

男子が口を開く度に漂ってくるコーヒーの香り。それが魔優子の周囲を漂う。

「――ッ！」

魔優子の心臓が大きく一拍した。

一度相手の肺に入ったその香りが、今度は魔優子を包んでいるのだ。魔優子は鼻だけで大きく息を吸いながらも、それを悟られまいとするかのように視線をそらせた。

魔優子もその男子も鞆を脇に置き、向かい合うようにカフェのテーブルに着いていた。

「こ……」

「こ？」

言い淀んだ魔優子に男子は軽く身を乗り出す。

また香りが揺れた。勿論周囲の空気もだ。香りと軽い空気の流れが、確かにそこにその男子が居ることを魔優子に教える。

「こ、五條のバイトと変わらないわよ。上の言うこと聞いて、指示

通りに仕事するだけよ」

「いや、まあ。このバイトマスター五條光助に、今更バイトの基本を教えて貰わなくてもいいけど」

五條光助と名乗った男子は、いたずらっ子のような笑みを浮かべる。

「五條は今、何のバイトしてるんだっけ？」

「えっ？ 今？ 今はあれだ、その。人々に夢を与える仕事だ」

「何よ、それ？」

「何でもいいだろ？ 暑いけど、割のいいバイトだと言っておこう。いろんなバイトをしたけどな、今のバイトは一番気に入ってるよ」

「ふーん。ま、家庭教師のバイトは、絶対にできないでしょうけどね」

魔優子はノート類で散らかしたテーブルの上に、僅かに隙間を作って己のカップを置いた。光助から漂ってくる香りと、全く同じ香りがそこから立ち上ってくる。

一言も触れないの――

魔優子はそうとでも言いたげに、揺れるカップの水面を見つめた。カフェモカだ。しかもホット。七月も近いというのに、それは熱い湯気を立てている。

「そりゃそうだ。俺に家庭教師のバイトは無理だな」

「たく。いい加減、宿題ぐらい自分でしなさいよ」

魔優子はブツブツ言いながら、光助にノートを一つ差し出した。

「いいだろ？ 小学校の時から、恒例の行事じゃないか？」

「何で、恒例になってんのよ？ 蓮華とかいつもからかうんだからね。ただの幼なじみなのに」

「何をからかわれるんだ？」

「――ッ！ な、何でもないわよ！」

魔優子が一瞬で真っ赤になる。

「そうか？ そうそう。そう言えばバイトって、クラスの吉祥院きつしょういんの

紹介だよな？」

「そうよ…… 吉祥院蓮華さん……」

魔優子は赤くなった頬を誤魔化そうとしてか、小さくうつむいて光助に答えた。

「他のクラスの女子も誘って、何だか女子だけの怪しいバイトって男子の噂になってるぞ」

光助は魔優子のノートを写し出した。

まるで写経だ。ノートを参考に問題を解いているのではなく、内容をそのまま移し替えている。この様子では誤字や間違いがあっても、そのまま写してしまうだろう。

「何で怪しいのよ？ ラクシュミ株式会社っていう、蓮華の従姉さんの会社よ」

「内容は教えてくれないじゃないか？ クラスの佐倉の奴も、眉っ娘に訊けばって教えてくれないし」

「誰が眉っ娘よ」

「はは。この程度で不機嫌とは。眉間に皺を寄せてると、早く老けるぞ」

「うるさい」

「怒るなよ。眉目秀麗な顔が台無しだぞ」

「——ッ！ うるさい！」

「眉目秀麗は褒め言葉だ？」

「うるさい！ 眉がどうのって言いたいだけでしょ？」

「この程度の揺さぶりに動揺するとは。もっと眉一つ動かさない落ち着きを——」

「う・る・さ・い」

魔優子はプイッと横向く。その動きにやはり空気が揺れた。魔優子の鼻孔を、辺りを漂う芳香がくすぐる。

いつものなんだけど——

と魔優子は小さく呟いた。

「何だって？」

「何でもない！」

「何怒ってんだよ」

「知らないわよ！」

魔優子が更に体を捻って、光助の視線から逃れようとする。

再度揺れた空気にあわせて鼻孔をくすぐるカフェモカの香り。それは五條光助と突抜魔優子の両方のカップから同時に漂ってくる。

魔優子はチラリと視線を戻した。これ程あからさまに同じ香りが漂ってくるのだ。この選択の意味を理解して欲しいのだろう。

少し悲しくなってきたのか、魔優子の顔に影が差す。憂いを帯びた表情だ。

そんな魔優子が視線を戻すと、光助は窓の外を眺めていた。

そしてその頬はかなり赤い。

えっ――

と呟き魔優子はその表情の意味を探ろうとする。二人きりのテ―

ブル。自分から顔をそらす男子。その少々赤い横顔。

「――ッ！」

魔優子の心臓がもう一度大きく脈打った。

意識されているのかもしれない。やっと気づいたのかもしれない。

だが――

「どっち見てんのよ？」

そう、だが魔優子は光助の視線の先に、ある女子生徒を見つけてしまう。

「えっ？ どっちって、左側かな？」

光助は顔の向きを戻さずに答える。

「へえ？ じゃあ、誰を見てんのよ？」

「えっ？ 何の話だ？」

光助はまだ顔を正面に戻そうとしない。窓の向こうを眺めたまま、

魔優子に生返事めいた返答をする。

「とばけて。あれ、クラスのかりたえりな苅田英里奈さんよね？」

長い髪を左右に振りながら、見るからにスタイルのいい少女が背

中を見せて去っていく。

「えっ？ ああ、そうだな。苅田だな。どうしたんだろっな、こっちに家あんのかな。あいつもバイトか何かかな？ はは」

光助が慌てたように口を開いた。乾いた笑いすら漏らす。

その頬はまだ赤い――

「顔真っ赤じゃない？ 苅田さん、美人だものね」

魔優子はその赤い頬をムツとしながら睨みつけた。一度は自分の為に赤らめたと思っってしまった頬だ。

何のことはない。外をいくクラスメートに鼻の下を伸ばしていたのだ。その去りゆく背中からすら、スタイルのよさが分かる学校でも屈指の美人に見とれていたのだ。この幼なじみは。

「何言ってんだよ！」

「知らないの？ 苅田さん、美人だって他のクラスでも話題なんだからね」

「し、知らねえよ！ そんな赤い顔してるか、俺？」

「真っ赤よ」

「空調効いてないんじゃないのか？ それか照明のせいだろ？ 俺はいつも通りだって！」

「慌てちゃって。何かやましいこともあるの？」

「別に！ 何でもねえよ！」

「ホントに？」

「本当だって！ 強いて言えば、この宿題！ 急がないとな！ まさに眉を焦がさんばかりの急ぎの課題！ そう！ 人それを焦眉の急と呼――」

「うるさい！ 眉眉言っな！」

魔優子が怒りに任せて席を立ち、広げていたノート類を己のカバンに放り込んだ。

「おい！ まだ写してないって！ 眉っ娘！ どうしたんだよ！」  
「知らない！」

魔優子はくるりと背を向ける。

「まだ訊きたいことがあるんだけど！」

「うるさい！ 自分で考えなさいよ！ じゃあね！ また来週ね！」

「こら！ 来週じゃ、宿題が間に合わないだろ？ それに、訊きたいことがあるって——」

「自業自得よ！」

魔優子はそれこそ眉尻を吊り上げてカフェを一人後にした。

魔優子の背中がガラスのドアの向こうでどんどん小さくなっていく。怒りのあまりにか早足になっているのだろう。

「おいおい、何怒ってんだよ…… てか、聞き損ねたな……」

一人残された光助はイスに深く座り直した。やれやれと言わんばかりに、去っていく魔優子の背中をガラス越しに見送った。

「ま、いつか……」

光助は懷から一枚のチラシを取り出すと、そう呟いた。

「バカバカバカバカバカバカ！ キャーッ！ バカッ！」

翌日曜日の早朝。魔優子が怒りに任せて身を翻した。自身が空気を切り裂く音が魔優子の耳をつんざく。

「何処が素敵な仕事よ！ キャーッ！」

そう、魔優子は怒りに任せて悲鳴を上げていた。

「キャーッ！ てか、痛いって！」

魔優子は全身をアザだらけにしながら眉毛を吊り上げる。

全身全霊の抗議を示す為にか、両手を振り上げグルグルと振り回した。否が応でも、その両手のアザが魔優子の目についた。

「特訓なんて、聞いてないわよ！」

魔優子は全身を見回す。

アザだ。腕以外も全身アザだらけだ。そこら中が赤くなっている。

「魔優子ちゃん？ もう降参？」

蓮華の嬉しそうな声が、壁にかけられたモニター越しに聞こえた。

「うるさい！」

「あはは！ それっ！」

蓮華が左手の指を鳴らした。その指の音に応えるかのように、魔優子の周りに光の球が無数に現れる。

「ちよっと！ 蓮華！ こんなに相手できる訳ないでしょ！」

その様子を魔優子が悲鳴を上げた。その悲鳴は周囲にこもったようにこだましながら響き渡る。どうやら魔優子は地下空間にいるようだ。

「何の仕打ちよ、これは？ 何よこの光の球は？ この訓練、訳が分からないわよ！」

そう魔優子は地下施設で光球を相手に訓練をしていた。

ラクシュミ株式会社が入るビルの地下。日曜日の朝魔優子が出勤すると、蓮華が満面の笑みで魔優子をそこに連れていった。

それは地下に設けられたキューピッド業務遂行の為の施設だった。まるで警察署か消防署の司令室のようだ。

市内を監視するモニター類。指示を出す無線機——蓮華は思念機と呼んだ——や、警告用の赤ランプ、果てはレーダー装置。

蓮華がここは『オペレーションルーム』だと嬉しそうに魔優子に告げた。そう、そこには何かの作戦を発令するのに、十分な設備が整えられていた。

その施設では背の低い一人の少女が、

「はわわ。あわわ」

とうろたえながら機械類を一人で操作していた。

聞けば愛由美と同じく情報収集担当の少女とのことだ。一人忙しげにしているので、魔優子は挨拶も紹介もそこそこに済ませた。

そのまま魔優子は怪しい広々とした空間に訓練の為に連れてこられた。

「てか何でこんな危険な訓練する必要があるのよ？ これじゃ特訓じゃない！ アザだらけよ！ てか、何よこの地下施設は？」

そしてその訓練の結果、魔優子はアザだらけになったという訳だ。「世界の危機だからね。キューピッドスコアの確認とか。ストレステストとか。国が私達の仕事にお金を出してくれているのよ」

「それが何よ——痛いって！」

「ここもそうよ。そんな訳で、血税つき込んで作った地下施設なの。全部使わないと、市民オンブズマンに何言われるか分からないわ。

お役所も大変なのよ、魔優子ちゃん」

「私は特訓の中身を訊いているのよ！」

魔優子が訓練に連れてこられたのは、五十メートル四方程の広さに十メートル程の高さがある無機質なコンクリートの空間だ。

コスチュームに着替えた魔優子は、弓を片手に一人その巨大な空間に取り残された。

始まったのは光の球による襲撃だ。光球は蓮華が左手を鳴らす度に、虚空より何処からともなく現れると魔優子に向って飛んできた。

蓮華は魔優子に飛んで避けると言う。魔優子はその意味が分からないまま、十数発の光の球に激突された。

「痛いっ！ 痛いっ！」

「魔優子ちゃん！ 背中の羽はキューピッドの羽！ 意識を集中して！」

隣室からモニター越しに、蓮華が陽気にアドバイスを送る。その横ではやはり背の小さな少女が、頭上に作った小さなマゲを揺らして慌ただしく機械類を操作していた。

「羽？ 羽が何よ！」

魔優子は片足を上げ、身をよじり、首をのけぞらせながら、蓮華に聞き返した。

そのおかしな格好の魔優子の身をかすめて、光球が飛び去っていく。

「羽よ！ 羽！ 飛べるのよ！」

「飛べる訳ないでしょ！」

「スパッツはいているから大丈夫だよ、魔優子ちゃん！ 飛べるわ！ 下から覗かれても平気よ！」

蓮華が鼻息荒く力説する。

「そういう問題じゃなくって……」

「大丈夫だよ！ 魔優子ちゃん！ 自分を信じて！」

「エーッ？」

一際大きな光球が出現した。魔優子の頭程もある光の塊が、鳩尾めがけて飛んでくる。

「きゃーっ！」

魔優子は悲鳴を上げて、身を屈めようとする。

そこに――

「魔優子ちゃん！ 羽よ！」

蓮華の声が響き渡った。まるで頭の中で直接叫んだかのように、その言葉が羽のイメージとともに魔優子に叩きつけられる。

「――ッ」

魔優子は一気に体を伸び上がらせた。雷にでも打たれたかのように。そう、まるで蓮華の一言に、打たれたかのように伸び上がる。同時に背中の羽が力強く光った。

グンツという重力に逆らう感覚とともに、魔優子の体が宙に持ち上がった。

「何？」

「さすが魔優子ちゃん！」

魔優子が驚きに目を見開き、蓮華が喜びに声を上げる。

見れば魔優子の遙か下で、光球が床に激突して弾け散っていた。

魔優子は天井ギリギリで身を翻す。天井を蹴って、壁に向って降下し出した。今度は壁の手前で身を擦ると、余裕を持って旋回できた。

「何これ？」

魔優子は右に左にと体を揺らし、その滑空感を確かめる。二、三度旋回すると、思った通りに体が宙を滑り出す。

「空飛んでるの？ 私？」

「そうだよ。まあ、地下だけど」

蓮華が嬉しそうな声でモニターから答える。

「空もいける？」

「外で飛べばね」

「ウツヒャー！ 楽しみ！ 蓮華！ これ楽しい！」

魔優子は先程までの不満も不安も吹き飛んだかのように、興奮気味に宙を舞った。

二、三宙を舞うや、完全に羽の力を自分のものにし始めた。壁と天井をスレスレで飛んでみせたかと思うと、地面に急降下し、一気にまた上昇してみせる。

光球を避けるどころか、その後ろに回り込む。複数の光球の間をすり抜け、わざと錐揉みしながら自分から向っていったりもした。もはや光球は一つも当たらない。

「へへん」

魔優子は大げさに旋回すると、空中で嬉しそうに身を翻してやっ  
と止まった。

「では、次の特訓だよ！ 魔優子ちゃん」

蓮華のその楽しそうな言葉とやはり鳴らした指の音に反応し、魔  
優子の周りに無数の光の球が現れた。

「あら、蓮華。新人さん。もう飛べるの？」

「そうだよ。凄いでしょ？ 加奈子」

蓮華がモニターに向かってニヤニヤしていると、馥郁たる香りが辺りを包み込んだ。まるでその芳香が即席のステージを作り出したかのように、その中心に豪華な少女が主演女優のような堂とした態度で現れる。

霧島加奈子だ。

加奈子はすらりと高い背をスツと伸ばし、凛とした姿勢でモニターに向こうで自在に飛び回る魔優子を見つめる。

「確かに凄いわね。新人さんって、三組の突抜さんよね？」

「そうよ。私の古い友人の子供なの」

蓮華はろくにモニターから振りかえらずに加奈子に答える。

「『古い友人の子供』？ 何よ？ 何の話よ？」

「あつ！ 私のお母さんの話だよ。魔優子ちゃんと、私のお母さんがお友達なの。魔優子ちゃん知らないみたいだけど」

「ふーん」

加奈子が魔優子の特訓の様子に目を凝らす。

「私達キューピッドの力は、人間の正の感情を魔力で引き出すことで発動するのよね？」

「そうだよ、加奈子。あなたなら、自分に対する絶対的な自信がその正の感情だろうね。魔力は柚希菜には負けるけど、その揺るぎない自信が加奈子の力になっているわ」

「唯は科学を信じる心ね。柚希菜は素質としか言い様のない魔力な上に、あの単純明快な性格。キューピッドの力はぴか一つでことね。逆に千佳は魔力があまりない上に、あのオープンじゃない性格からろくにキューピッドの力を使えないって訳よね。じゃあ、あの新人さんは？ どんな感じ？」

「魔優子ちゃんも、魔力の資質はあるわ。柚希菜に負けないぐらいにね。何と言っても私の友人の娘。もとい私のお母さんの友人の娘だもの」

「正の感情は？」

「それは、今が一番いい時とも言えるし、今が一番不安定な時期とも言えるわ。まあ、その内分かるわよ」

「ふーん。ま、蓮華がスカウトしてきたんなら、問題ないと思うけど」

加奈子がもう一度モニターに目を凝らす。

その魔優子は光の球を矢で射っていた。

ゆらゆらと揺れる光球がその場で漂っている。

大きさはテニスボール程。二十メートル程の距離をおいて浮いているそれは、魔優子から見れば豆粒のように見えただろう。

「魔優子ちゃん！ 弓を構えて。射ち落とすのよ！」

「何よ？」

「私がやってみせたでしょ？ それは人の思いを光の矢に変える天使の弓なんだよ」

「人の思い？」

「そうよ、魔優子ちゃん。人の正しい感情を力に変えるの。それでね、その光の矢で恋人の心臓を打ち抜くと、相手の気持ちを確かめることもできるわ。私がやってみせたでしょ？ 魔優子ちゃんだって、練習すればできるから。これは揺れる光の球を心臓に見立てた訓練なんだよ」

「えっと。こうかな……」

魔優子が戸惑いながら弓を引いた。現れたのは光の矢。それは単純なものだった。先端が鋭く伸びきっている以外は、ただの細長い流線形の光の塊に見える。

「いい光だわ…… 流石魔優子ちゃん……」

蓮華がモニターの向こうの魔優子に呟く。その表情が光り輝いているのは、モニターの光のせいだけではないようだ。

「当たらないわよ…… こんなの……」

魔優子は自信が持てないのか、眉間に皺を寄せて弓を引く。見よう見まねで構えてみたが、狙いを定めようとして逆にふらふらと指先が揺れる。

「えいっ！」

魔優子が気合いとともに矢を放った。だが当たるところか、矢は真っ直ぐ飛ぶことすらない。

「魔優子ちゃん。技術で当てようと思っちゃダメよ。当たったイメージだけして」

「当たったイメージ……」

「そうよ。誰かを具体的にイメージしてもいいわ」

「誰かをつて……」

魔優子が一瞬眉間に皺を寄せて考え込んだ。

「ふふん」

その様子に蓮華が満足げに頬を緩める。

「——ッ！ 何であいつの顔が……」

魔優子は一瞬誰かの顔を思い浮かべたようだが、そのイメージを振り払うかのように首を激しく振った。

「魔優子ちゃん。可愛いわ……」

蓮華の笑みは更に気色を帯びていく。

「まだ怒ってるんだからね。でも、これで当たったら…… 少しは許してあげる……」

魔優子はその怒りに身を任せてか力一杯弓を引いた。

「やつ！」

気合いとともに放たれた光の矢は、ものの見事に光の球の真ん中を射ち抜いた。

「やったー！」

「その調子！ 魔優子ちゃん！」

「へえー。流石蓮華が見込んだ娘。やるわね」

「でしょ？」

「あはっ！ 結構簡単じゃない！ 任せて！ 蓮華！」

その言葉とともに、魔優子は面白いように光球を射ち抜いていく。光球は射ち抜かれる度に、その揺れる速度を上げた。漂っているというよりは、跳ね回るように空中を動き回り出した。

その光球の内いくつかが、魔優子めがけて飛んでくる。

「魔優子ちゃん！ じゃんじゃん射ち抜いて！」

「オッケーッ！」

魔優子は自分に向ってくる光球を、苦もなく射ち抜いていく。魔優子が弓を放つ度に、光球は光の矢に射られて弾けて消えた。

「レベルを上げるわよ！」

「任せて！」

モニターの向こうの魔優子はそう応えると、文字通り矢継ぎ早に矢を放っていく。そしてそのほとんどを正確に打ち抜いた。

「あら、本当に凄いわね。もう自分のものにしてるわ」

モニターを覗き込み加奈子が素直に感嘆の声を上げる。

「でしょ？ 加奈子もつかうかしてらんないわよ」

「あら、ご冗談？ あたしのムチさばきが、あの子にできるかしら？」

「何度も言っただと思うけどさ。天使の道具にムチなんてないから蓮華が苦笑いで応える。

「いいじゃない。あたしはこれが——」

そう言っただけ加奈子は、嗜虐的な笑みを浮かべて左手を頭上の天使の輪に添えた。

「性に合ってるもの！」

加奈子が触れた天使の輪が消え、代わりに鋭い一振りとともに光のムチが現れた。

加奈子が左手をふるうと虚空をつんざく風切り音とともに、そのムチが司令室の床を叩きつけた。

「ひゃっ！」

先に慌てふためいていた背の小さな少女が、その突然の衝撃音に驚いて肩をすくませる。

「あはは。ゴメンゴメン、那奈ちゃん」

「加奈子さん。ひどいです」

「あはは、ゴメンね。愛由美のやつは？ また一人で仕事押しつけられてんの？」

背の高い加奈子がウィンクを一つしながら、背の低い那奈と呼ばれた少女に尋ねる。

「はい。思念も送ってるんですが——」

那奈はそう言っただけ、頭の小さなマゲを指差した。まるでそれが思念のアンテナでもあるかのようだ。

「愛由美さん、全然応えてくれなくて」

「思念中継が仕事的那奈の思念を無視するとは。愛由美の奴、自分から思念を切ってるわね」

「そうなんですよ、加奈子さん。愛由美さんの分も一人で仕事してるから、さっきから大慌てです」

そう答えると那奈は、小さなマゲを揺らして慌ただしくも機械の操作に戻ってしまう。

「まったく。加奈子は今からSIV案件でしょ？ 早くいきなさいよ」

「あはは。急かさないでよ、蓮華。すぐにいくわよ。でも、そうね。その前に――」

加奈子の目が怪しく光った。同時に光のムチを部屋の片隅目がけて放つ。光のムチが持ち主の意思に応えるかのように、正確にその物陰に飛び込んだ。

「うお！」

同時に聞こえてきたのは、突然のムチの襲撃に驚いた少女の悲鳴だ。

「ぬおおおっ！」

愛由美が女子らしくない叫びとともに、ムチに縛られて加奈子たちの前に飛んでくる。呆れる三人の前に愛由美が尻餅を着いて着地した。

「あいたたた……」

「自分の仕事さぼって、あたしの後をつけるつもりだったんでしょ？」

「何をカナヤン！ SIV案件を前にして、愛由美ちゃんにこの地下に閉じこもってるって言うの？」

「大人しくしてなさい。あなたがいくと、話を引つ掻き回すだけでしょうから」

「むむ！ 蓮華先生！ 権力には屈しないわ！」

「はいはい」

蓮華がため息まじりに愛由美の首根っこを引つ掴んだ。

「離して！ 蓮華先生！ S I V案件なのよ！ 待ちに待った——  
ぐふっ！」

「大人しくしてなさい」

「ぐぬぬ…… 首を締めるのは、流石に反則っすよ。蓮華先生……」

「じゃ、あたしはいつてくるわね。唯も連れてくから」

その様子に優雅にくるりと背中を見せて、加奈子はファッションモデルよろしくすたすたと歩いて入り口に向かう。

「S I Vなのに！ 『それはそれこれはこれ』案件なのに！ 帳簿  
外案件——いえ、本命外案件！ 人、それを二股と呼——」

「うるさい」

尚も叫び上げる愛由美の首筋を蓮華が軽く捻った。

「きゅう……」

愛由美が悲鳴とも、ただ息が漏れただけともとれる音を漏らして  
動かなくなった。

「あわわ……」

その様子にな奈が真っ青になり、

「あはは！ キューピッド最高！」

魔優子はモニターの向こうで一人上機嫌に矢を放っていた。

## S I V 1

ストラクチャード Ⅱ 構造化された（つまり本能的なのでつい仕方がなく）

インディペンデンス Ⅱ 独立している（それはそれこれはこれ的に）  
ビークル Ⅱ 乗り物的事象（ついつい乗ってしまうお話）

「ふっ！ 二股！」

魔優子が目を白黒させた。眉がこれでもかと持ち上がっている。

「そっ！ 二股！」

「嬉しそうね。愛由美」

嬉しそつに手を叩いて魔優子に応える愛由美を、蓮華がこちらも嬉しそつに見た。

「もちよ、蓮華先生！ この案件に一番理解があるのは、この愛由美ちゃんのはず！ 何でこの愛由美ちゃんが、内勤なの？ 不条理よ！ 理不尽よ！ 不可解よ！」

「そんな反応だから、外勤は任せられないのよ」

「きーっ！」

「それに、これはれっきとしたキューピッドデリバティブに関する案件。S I V——ストラクチャード・インディペンデンス・ビークルって呼んで欲しいわね、愛由美」

「いいじゃない！ 二股——これ程股を射た。もとい、的を射た言葉はないわ！ キューピッドなら尚更よ！」

「もう、愛由美はふざけすぎよ」

魔優子が眉をひそめた。

「だって、スキャンダルの匂い！ ああ！ できれば愛由美ちゃんが担当したい！ 二股なんて、現場を見ずに何を語れと言っの？」

愛由美は自分の肩を抱きしめ恍惚の表情で言い放つ。

「それにしても、二股って……」

魔優子は周りを見回す。嬉しそうな顔の蓮華に愛由美。

そして背の低いマゲの少女が一人。こちらは話題に加わるまいとしてか懸命に視線を逃していた。

「えっと……」

「ささたけ笹竹です。笹竹那奈」

マゲの少女が魔優子に振りかえって微笑む。

「笹竹さんて、確かうちの学校の五組の人よね？ このバイトって、同じ学校の子で回してるの？」

「そうだよ、魔優子ちゃん。Aチーム——チームエンジェルが一组の霧島加奈子さんと、九組の長岡唯さん。Bチーム——チームブライドが七組の須藤千佳さんに、南柚希菜さん。そして三組の私と、魔優子ちゃんがCチーム——チームキューピッドって訳。それと、同じく三組の愛由美に、五組の那奈ね。二人は内勤で私達のバックアップ。この八人全員をうちの学校からとってるわ。我がラクシユミ株式会社は、バイトの採用に二股かけたりしないの」

「また二股って。もう。人がせつかく話をそらしたのに」

魔優子がプツと頬を膨らませる。

「そらしたのが、丸バレだからだよ」

「ぐ……」

「ああ！ 二股！ S I V案件！ ハチ！ どう思う？」

「那奈です。ハチとか、キュウとか呼ぶの止めて下さいよ」

「S I Vはキューピッドデリバティブ市場にとっても重要な問題だよ。見逃せないの。いわゆる簿外債務なんだよね。恋慕の慕で『慕外債務』とも言うけど、まさに恋愛慕情を裏切る行いなんだよ。本命以外でいい思いをしようとする行為だからね。本命への恋愛なら当然発生するであろう義務や責任が、S I Vだと表に出てこないしね。フェアじゃないんだよ。本来誰にでも見れば分かる義務や責任——債務が、隠されてしまうからね。上手くいつているうちは、本命以外でも美味しい思いができるしね。でもね本命とは別の恋愛だけど当然相手はいるから、それなりに恋愛債務と言うべきものが

発生するわ。そして下手をすると、他の人には分からないうちに債務が膨らんだりするの。そもそも皆表に出したがないしね。仮に損失があっても、表立っては分からないことが多いんだよね……」

蓮華が最後にわざとらしく表情を曇らせる。困った話よねと言外に言いたいようだ。それでいて本当に困っている顔には見えない。

「恋愛債務って何よ？」

「それはね、魔優子ちゃん。今度おごるねとか。君だけだよとか。君とは真剣なんだとか。恋愛に関して相手にする約束のことだよ。これを簿外債務は本命以外に約束するんだよ」

「ななな……」

「まあ確信的にしている人も多いかな。恋愛債務のとはしだよな」

蓮華がわざとらしい困りが顔をやめ、一転して楽しそうに言った。

「蓮花先生！ 愛由美ちゃんはどちらかと言うと、SPCの方が表記として好きです！」

愛由美が満面の笑みで、手を挙げて発言する。

「SPC？」

魔優子がまた新しい単語に首をひねる。

「SIVはSPCの一種なの。まあ、単語に厳密な定義はないんだけど……」

蓮華がニヤツと笑って愛由美を見る。もちろん愛由美はいい笑顔でそれに応える。

「……」

那奈が真っ赤になった。その赤い顔を見られないようにか力一杯うつむいた。かわりたくないのだろう。その姿は元の背丈と相まってかなり小さい。

「何よ那奈？ 真っ赤になっちゃって……」

魔優子は単語の意味も、那奈が真っ赤になる理由も分からない。

眉間に眉が寄る。

「SPCは『スペシャル・パーポーズ・カップル』の略よ。魔優子ちゃん」

「はい？」

中央に寄せられていた魔優子の眉が、嫌な予感を感じとったのが固まってしまう。

「はい先生！『特別目的カップル』の意味です！」

愛由美がまたもや手を挙げて元気よく補足した。

「なっ？ 何なのよ！」

「何って…… そりゃ…… 特別な目的の為だけに、文字通りくっ

ついちゃう——」

「なっ？ 何よそれ！」

「……」

那奈はもう完全に小さくなっていた。今だけは自分は小さくてよかったと思っているのかもしれない。

「何よマユ！ 興味ないの？ ドロドロだぞ！ 掴みあいだぞ！」

醜い争いだぞ！ S I V に、S P C！ そう『特別目的カップル』

！ 愛由美ちゃんなんか、どれ程待ち望んだことか！ ところで『特別な目的』って何だろうね？ ねえ、マユ？」

「し、知らないわよ！」

「だけどこれは世間話じゃないわ、魔優子ちゃん」

「何よ、蓮華？」

「仕事の話ってことよ。S I V——ストラクチャード・インディペンデンス・ビークルと、S P C——特別な目的の為のカップル。ちゃんと覚えていてね」

「で、でも……」

「それに債権者同士が鉢合わせになると…… 楽しいわよ……」

蓮華が愛由美に向かって笑みを向けた。

愛由美が笑顔を返す。こういう蓮華の下世話な話は、愛由美がいとも相手をしてくれる。

「債権者同士の鉢合わせ——人、それを修羅場と呼ぶ！」

愛由美が芝居がかった口調で、実に嬉しそうに叫び上げた。

「しゅ、修羅場！」

魔優子は顔を真っ赤にし、これでもかと眉を持ち上げてこちらを悲鳴めいた叫びを上げた。

## S I V 2

霧島加奈子はゾクゾクしていた。

「ねえ。唯。ゾクゾクしない？」

加奈子はチームエンジェルのパートナーである、長岡唯にハスキ―な声で同意を求めた。自分で自分の両肩を抱き、自慢の軽くウエ―ブのかかった長い髪をわざと振るわせる。

「困惑。その性癖。困惑」

唯が無表情に応える。

「ええ、何で？ 天使の矢より大好きな、天使のムチが使い放題なのよ。矢を射つよりも、羽で飛ぶよりも、私はこの天使のムチが大好き。縛りつける度にゾクゾクするわ」

「疑問。天使はムチなんて誰も使わない。疑問」

「いいじゃない。常識に縛られるのは大嫌いよ。非常識に縛るのは好きだけだね。ああ、やっぱりゾクゾクするわ」

加奈子がゾクゾクと言う度に身を震わせた。同時に辺りにいい香りが漂う。トリートメントやバニラの匂いだ。

加奈子は鼻孔をくすぐる香りを振りまきながら、恍惚の表情を浮かべ自分の感覚に酔いしれていた。

「軽蔑。ゾクゾクなんてしない。軽蔑」

唯が首を振って答える。

「えーっ！ がっかりー！」

「羞恥。人前。羞恥」

加奈子とは対照的に唯は表情が読めない。首を振ってずれてしまった眼鏡を直そうと、手を目の前にやった。ほんのわずかなズレだった。

「あの…… 天使さん達……」

その加奈子と唯の前で一人の男性が地面にお尻をついていた。光のムチで縛られている。

ここは駅近くの公園。男性は両腕と胸と一緒に縛られていた。加奈子の天使のムチだ。

唯がやつと眼鏡から手を離して無表情にその顔を見下ろした。

「感激。まるで時代劇。感激」

無表情だが感激しているらしい。

「はは……」

男性が愛想笑いを自分の隣りに立つ女性に向ける。

女性は怒りが押さえ切れないといった感じで、苛立たしげに足を踏み鳴らしていた。腕を胸の前で組み、足のリズムに合わせて指を叩いている。

「さてどうしますか？ 織田小百合さん？」  
おださゆり

唯がやつと眼鏡の位置を直し終わったので、加奈子が目の前の依頼主の女性に訊いた。

「……」

小百合と呼ばれた依頼主の女性は答えない。怒りのこもった目で目の前の男性を見下ろしている。

「あはは。お怒りごもつともです。何といってもS I Vですからね」  
加奈子は苦笑いを軽くして呟くと、小百合が口を開くのを待った。  
蓮華はS I V——ストラクチャード・インディペンデンス・ビークルと言ったが、どう言葉を変えても本質は変わらない。

した方とされた方の立場は、目の前の二人が明確に示していた。

裁く者と裁かれる者。S I V案件——浮気においての二人の立場は明白だ。

「興奮。お裁きお裁き。興奮」

唯が何度もうなずく。無表情だがどうやらこの状況を楽しんでいるようだ。

「ずっと縛っていても、あたしは楽しいですけど」

「あは、天使さん。気が合いますね。あなたになら、僕も縛られていた——」

「高次！」  
高次

「さ、小百合！ 話し合おう…… なっ！」

高次と呼ばれた男性は、弱々しく呟くと少しでも逃れようとしてか体をそらした。勿論無駄な抵抗だった。

「やつちゃって下さい……」

小百合の声が陰気に辺りに響く。怒りが抑えられないのだろう。聞けばもうつき合ってから、何回目の浮気騒ぎか分からないとのことだった。

「では、彼氏さん。井川<sup>いがわ</sup>高次さん」

「はい……」

「聞けば会社の新入社員さんに、ちょっかいを出しているらしいですね」

加奈子が妖しく微笑む。豪奢な美少女の嗜虐的な笑み。高次はその迫力にか、ごくりと息を呑んだ。

「あはは、人聞きが悪いですね。僕は単に新人さんに、優しく仕事を教え——」

「高次！ 聞いたわよ！ 必要以上に馴れ馴れしくしてるらしいじゃない？」

「そりゃ、小百合。あれだ。ほら、何だ」

「何よ？」

「何だろう？」

「キーツ！ やっぱり下心なんじゃない？ いい？ 私がこの仕事を依頼したの。場合によってはかけてあるCDSだって、清算する覚悟なんだからね！」

「お前の為に、万が一に備えてかけてやった保険なのに。ひどい仕打ちだ」

「異常な保険料の高さに、いつかこうなるんじゃないかと、私は薄々感じてたけどね」

「ひどい！ 助けて、天使さん！」

「失礼。これもお仕事なんです」

加奈子が弓を引いた。加奈子は左利きのようだ。魔優子や蓮華と

違い、右手で弓を持ち左手で弦を引いていく。

「この期に及んで！ また女の子に媚を売って！ 観念なさいよ！」

「てなわけで——やつ！」

加奈子が矢を放った。

天使の矢よりムチが好きな加奈子でも外すような距離ではない。

矢は真つすぐ高次の左胸に突き刺さる——

「——ッ！」

はずだった。

### S I V 3

「ところでCDSが、も一つ私にはよく分からないんだけど？」

一通り修羅場に関する意見を根掘り葉掘り訊かれ、魔優子はやつと話題をそらすことができた。

愛由美は世間一般の興味からか。蓮華はどうにも魔優子自身に対する興味からか。執拗なまでに浮気や三角関係に関して魔優子を質問攻めにした。

元より狭い事務所内。魔優子は真っ赤になって答え、ようやく次の話題を持ち出すことができたのだ。

「マユはこれだから」

愛由美がS I V案件の話題の興奮冷めやらぬ様子で呆れてみせる。

「愛由美も分かかって言ってるっての？」

魔優子の眉が疑問の為か中央に寄る。やはり魔優子の感情は眉がよく表すようだ。

「ギャンブルみたいなものでしょ？ 愛由美ちゃんの取材メモには、そう記されているわ」

「そうね。ただのギャンブルだって言う人もいるわね」

蓮華はそこまで言うと言つと魔優子と愛由美と那奈を交互に見た。

「ちゃんとした、恋愛工学に基づいて計算してるって前に聞いたけど。CDSは数学の確率論に基づいてるんでしょ？」

魔優子が眉間に皺を寄せて己の記憶と格闘するように口を開いた。  
「そうだよ——」

その様子に満足げに頷いて、蓮華は大きく息を吸って話を続ける。  
「それがCDSだよ。破綻リスクに備える為に、そのリスクを計算しておくんだよ。そしてこれを証券化して販売するの。生命保険とか損害保険とかを思い出してね。かけ金を払っておけば、万が一の場合損害が補償されるでしょ？ 損害が出て困る人は、その保険にかけ金を支払って万一に備えるじゃない？ あんな感じだよ。生

命保険なら怪我とか入院とかのリスクに対してかけ金を払う。損害保険なら事故とか火事などのリスクに備えてかけ金を払う。そして万が一の場合は保険会社が補償してくれる。安心を買うつていう感じだね」

蓮華はここまで一息に説明して魔優子達を見た。

魔優子は分らないといった感じで眉間に皺を寄せていた。愛由美は分らないけどそれが何といった感じで不敵な笑みを浮かべている。那奈は本気で困った顔をしていた。

「で、CDSの場合は破綻がリスク対象なんだよ。でね、破綻するかもしれないから一種の保証金。この場合はお金とはちよつと違うんだけど、まあ保証金——かけ金みたいなものだと思っていてね。その保証金を支払って万が一破綻した場合に、支払っていた分だけ補償が受けられるように備えるつて訳だよ」

「でも蓮華さん。保証金つて、感情だつて聞きましたけど？」

黙って聞いていた那奈が遠慮がちに口を開いた。

「そうだよ、那奈。人々の持ついい感情。即ちの正の心を少し分けてもらうんだよ。そして恋に破れた人の為に、いざという時にその優しい思いを分けて上げるの。保険つぽいでしょ？ でね。その保険が今、大変なことになっているの」

魔優子達三人の頭上にはなマークが浮かんでいる。そんな風に見える顔に満足げに笑みを向け蓮華は説明を続けた。

「本来恋愛している本人が、万が一の為にかけられる保険だったんだけど、実は証券化されているから、本人以外も買えるんだよね。この保険」

「本人以外？」

「そうだよ、魔優子ちゃん」

「証券化つて、株とかの話よね？ 失恋の保険でしょ？ 何で他人が買えるのよ？ てか、買ってどうするのよ？」

「いい質問だね、魔優子ちゃん。でも金融だつて証券化は、お金に換えることができる権利を書面化したものでしょ？ 言わば行為を

書面化したものじゃない。だから感情のやり取りも行為である以上、恋愛債券が証券化されていても何の不思議もないでしょ？ キューピッドデリバティブの場合はね、愛情とか思いやりとか、人の感情に換えることを権利にするの。書面化されているが故に、いくらでも刷ることが可能だから、保証金を支払う人と補償金目当てで保証を請け負う人がいれば契約が成り立つわ。それは本人でなくてもいいの。証券化は流動化とも言っぐらいだしね。こうやって権利が人の間を流動するのよ」

「他人の恋愛でしょ？ やっぱ何か変だよ」

魔優子の眉がこれでもかと中央に寄った。

「競馬もトトカルチョも、馬や選手がお金をやり取りする訳ではないでしょ？ 馬が一着になるかどうか、その試合にどちらが勝つか、そういう賭けは第三者でも成り立つ。そう考えれば第三者による保険契約の成立は、それほど不思議なことでもないよ」

「分かんないわ。てか、分かりたくないわ」

「そう、魔優子ちゃん？ でもこれだけは覚えていてね。破綻に備えた保険とはいえ、バタバタ一度に破綻されても困るんだよ。システムの一カ所に想定以上に一度に負荷がかかったら、どんなシステムでも耐えられないでしょ？ システムティックリスクってやつだよ。それに本来は、少なくとも一定数以上は破綻しないことを前提に、設計された保険だったしね。だけど、最近のサブプライドローン問題つてのを端に発した、全世界規模の『信愛収縮』——キューピッドクラッシュって問題が発生しているね。どんな小さな案件でも簡単に破綻してもらっては困るんだよね。だからキューピッドの仕事がとても重要なもの。分かった？ 魔優子ちゃん」

「はあ…… 分かる？ 愛由美」

「ぐう……」

「寝た振りしてんじゃないわよ！ 那奈は？」

「分かんないです……」

「だよ。でも、蓮華。これって対象は恋の破綻なんだよね？ そ

んな不確実なものを保険の対象にしているの？」

「いいことに気づいたわね、魔優子ちゃん。そうなんだよ。最初は上手くいっていたんだよ。そして他人がかかることもできたら、実体恋愛の何倍にも虚業とでも言うべきこの恋愛工学上の市場が形成されてしまったの」

「むむ。他人の恋愛に保険をかけるとは、寝起きの愛由美ちゃんでもびっくりよ」

「寝た振りしてただけでしょ？」

「あはは。でも、計算高い人達には大人気だったわ。それでね、キユーピッドデリバティブ市場はバブルとでも言うべき状況になったの。特にサブブライドルーン——」

蓮華はそこまで説明すると近くにあったホワイトボードに何やら書き込んだ。

サブ    ＝ 一層下の（つまりできなさそうな）

ブライド＝結婚願望（がそれでもある人向けの）

ローン   ＝感情融資  
          のシステム

「こんな感じの意味ね。これは誰でもお気軽に感情を借りられるシステムだね。これが立ちゆかなくなった時、世界を巻き込む程の大問題になったわ」

「感情を借りるって、何よ？」

「文字通り勢いや、気持ちの高ぶりのような、正の感情を借りて自分の力にするんだよ、魔優子ちゃん」

「はあ？」

魔優子の眉がこれでもかと疑問に曲げられた。

「CDSが破綻時の補償なら、サブブライドルーンは高嶺の花を落とす為の借り入れ資金」

「ええっ！」

「憧れのあの娘を落としたい。この気持ちは本物なのに、だけど僕

には勇氣や自信がない。誰か僕に力を——つてのは昔からあるですよ？」

「そうだけど」

「だから、貸してあげるのよ。勇氣を！ 自信を！ 勢いを！」

「何嬉しそうに話してるのよ？」

「だって、人間って可愛いわ。『何処までも幸せになれる』なんて夢見ちゃって。それが人間のいいところでもあるんだけどね。でも今回は分不相応な幸せを求める人間にも、考えなしに貸しちゃったの。たいして調べもせずね。それでね、結局問題化。サブプライドローン問題って言われる程、世界が右往左往したわ。この先々ローンが返せない人が増えちゃってね。バカよね。ホント、バカ。ああ、やっぱり人間って可愛いわ。バカな子程可愛いって本当ね。いつの時代も人間からは目が離せないわ」

「どうしたのよ？ 蓮華、何だか変よ？」

「へっ？」

「人間人間って、蓮華だって人間じゃない？ バカな子程可愛いって、何、神様みたいな目線で語ってるのよ？」

「えっ？ ああ、そうね。私も人間ね。ちよっと調子に乗って、忘れてしまふところだったわ」

「何で忘れるのよ？」

「いいじゃない。それでね、一時は恋愛工学が世界を回しているような勢いだったわ。実体恋愛よりも、CDSの様な実体を何倍も膨らませた虚像とでも言うべき市場だけが膨らんでいたわ。で、サブプライドローン問題——サブプラ問題の爆発に端を発して、ついに恋愛工学のバブルは崩壊したの」

「何とかショックとか、世界同時不信とかニュースでやっていたやつですか？ 確か恋愛工学の会社が潰れて、債券の連鎖的不良債権化が心配されたんですよね？」

那奈が遠慮がちに手を挙げた。

「そうよ、那奈」

「ハチ！ この愛由美ちゃんより、ニユースに詳しいとは！」

「えっ？ それ程でも…… てか、那奈です」

「愛由美は、ゴシックばかり追ってるからでしょ？」

「何を！ 反論できないじゃない！」

「あはは、それでね。安易な借り入れは、安直な将来予想によって成り立っていたの。これはバブルではない。幸せは右肩上がりが増えるはずだ。だから将来返すべきローンがどんなに大きくても、何とか返せるはずだ。そんな風に誰もが考えてね。結局恋愛愛工学のバブルは弾け、世界はその緊急対策に走り回っているわ」

「ふうーん。でも、やっぱりよく分からない。愛由美は？」

「ぐう……」

「また？」

「あはは。——ッ！」

笑っていた蓮華が不意に顔を曇らせた。

「さて、おしゃべりはそのぐらいにして。出かけるよ、魔優子ちゃん」

蓮華がにこやかに立ち上がる。

「えっ、何処に？」

「決まっているわ——修羅場よ」

蓮華はとてもいい笑顔で魔優子に答えた。

## S I V 4

「はい！」

「えっ？ 何！」

陽気な女性の声に、加奈子の驚く声。それが公園内に響き渡る。

加奈子の矢が高次の胸の直前で止まっていた。声はその高次の頭の上から聞こえた。

見るとビジネススーツに身をまとった女性が、光の矢を受け止めている。

「えいっ！」

女性はふざけた口調で矢を握りつぶして消滅させると、これまた明るく両手を振る。矢を握り潰した右手が小さく煙を上げていた。

「熱っち！ 熱っち！」

女性はこれまたふざけたような声を出しながら、両手を叩いて煙を消した。

「小百合さん！ こっちへ！」

「驚愕。あなたは魔族。驚愕」

天使の矢を空中で受け止めるなど、人間技ではない。

加奈子と唯は心底驚いているが、唯の驚きはやはり外部に伝わらない。

「君は新入社員の？」

高次が驚いて女性を見た。

「高次さん、違います。魔族です」

加奈子が弓からムチに武器を持ち替えた。

「えっ、天使さん？ でもこの娘。この間うちの会社に入ってきた新入社員ちゃんですよ。目も鼻も口も耳も、髪もスタイルも話し方も僕の好みのど真ん中。見間違っはうが——」

「高次！ 何を言ってるの！」

「ウヒヤ！」

「そうよ。お・ま・た・せ」

魔族が高次の背中に回った。甘えるように肩から胸の前へ手を回す。

「なっ！ 離れなさいよ！」

小百合が顔を真つ赤にして叫んだ。思わず前に出ようとするとこゝろを唯に腕を掴まれた。

「何で？ どうして？ 私の方がこの人のこと、あなたより分かってあげられるんだから」

魔族は挑発的な笑みを小百合に向ける。

「何ですって！」

小百合が叫ぶ。怒りのあまり血管が額に浮き出た。

血管が皮膚を盛り上げる音まで、聞こえてきそうな形相だった。

「それとこれ苦手なの。私の彼を束縛しないで」

魔族が天使のムチを指で弾いた。加奈子が縛りつけた天使のムチが砕けて消えた。

「——ッ！ あたしの自慢のムチが！」

加奈子が驚きに目を見開く。

「彼ですって！」

「ほら。すぐそうやって怒る。彼、愚痴ってたわよ。僕の彼女は嫉妬が激しいって」

魔族は高次のアゴに手をやった。優しくなでる。高次は思わず頬が緩んだ。

「高次！ 何ニヤついてるの！」

「ハイッ！」

「ねえ、あのヒステリーさんが——」

「何ですって！ 誰がヒス——」

「例の梓さん？」

「なっ？ アズサさんって誰よ！ 高次！」

小百合が一際目を剥いて高次を睨みつける。

「ち、ちが…… 違うよ……」

高次の顔の筋肉が凍りつく。そして視線を無意識に小百合からそらした。

「じゃあ。キャサリンさん？ 志保子さん？ 多佳子さん？」

「えっ？ ちょ、ちよっと…… 新人社員ちゃん……」

「奈緒美さんだったかしら？」

高次の言葉を見無視し、魔族が小首を傾げながら訊く。

「なっ！ 高次！ どういうことよ？」

「ち、違う…… よ……」

「えっ？ 違うの？ 瞳さん？ 恵美さん？ 友紀さん？ 里歌子

さん？ 和香さん？」

「何人、名前が出てくるのよ！」

小百合が力一杯前に踏み出す。自分以外の名前がゾロゾロと出てくるのに、肝心の小百合の名前が出てこない。一発引っ叩いてやるべくか、肩をいからせて前に出ようとした。

「懇願。落ち着いて。懇願」

小百合を抑えていた唯は足を思いつき踏ん張った。だが、ずるずると前に引きずられそうになる。公園の砂地に唯の力カトがズブズブとめり込んでいった。

「お、落ち着け！ さわ…… あっ！」

「『さわ』？ 『さわ』ですって？」

その高次の言い間違いに小百合が固まる。言葉の語尾が苛立にうわずっていた。

「さささ、さわ、さわ、爽やか小百合……」

「——ッ！ 咲和子さんね！ まだあの娘とも切れてないんだ！」

「落ち着け小百合！ ここ最近は何ってない！ ホントだ！ 信じろ！」

「最近？ 最近ですって？ へー…… 一年以上前に、手を切ったとか言っておいて…… 『最近は何ってない』ですって？ へー……」

「いや…… その……」

「あはは。いいわね。楽しいわ」

魔族が嬉しそうに高次に頬を寄せる。

それだけで高次は、今の立場を忘れて顔が緩んでしまう。

「この……」

小百合が怒りに震えた。

「……」

加奈子は油断なく魔族を見つめた。魔族は加奈子の天使のムチを難なく消滅させた。油断できる相手ではない。

「嘆願。落ち着く。嘆願」

唯は無表情なりに力を込めて怒りに震える小百合を押さえていた。

「何事？」

その三人の背後から、不意に蓮華の声が聞こえた。

「安堵。蓮華きた。安堵」

唯が蓮華に振り返る。

「きたわよ。何か嫌な予感がしたのよ。それに、元よりS I V案件。魔優子ちゃんの反応が見たい。もとい意見が聞きたいもの」

「何で私の意見が必要なのよ！」

「歓喜。やっと会えた。私は長岡唯。よろしく。歓喜」

唯が魔優子の剣幕をまるで気にせず話しかける。

「えっ？ そうね。よ、よろしくね」

魔優子は唯の口調に戸惑ったのか、慌てた様子で何度もうなずいた。

「あたしは霧島加奈子ね。よろしくね、新人さん」

「どうも」

「あら、大人数ね。私、大ピンチ」

魔族が嬉しそうに笑う。不敵な笑みで、四人に増えたキューピッド見回した。だが言葉程は危機とは思っていないようだ。

「ふーん。やっぱり魔族が絡んできてたんだ。嫌な予感が当たったわ」

「魔族って何よ？ 前も言ってたよね？」

「人の幸せを踏みにじるものだよ。知っておいてもらいたいけど、魔優子ちゃんが相手するにはまだ早いわ。ここは加奈子達に任せて」「任せて蓮華。あの魔族縛っていいよね？」

加奈子が舌なめずりをしながら訊いた。左手を高々と上げるや、手首に光の輪が現れた。

「天使の輪？　これって、自由自在なの？」

「そうだよ魔優子ちゃん。天使の輪は天使の矢と同じく、人の思いが光となし形をなすもの。それが加奈子の手にかかると――」

「ふふん」

加奈子が蓮華に応えるように不敵に笑う。

「やつ！」

そして一気に加奈子は左手をふるった。天使の輪が一際輝いて一瞬加奈子の姿が見えなくなる。次の瞬間まるで突然舞台に現れたアイドルよろしく、光のムチを持った加奈子とそのムチを大地に叩きつけていた。

「へ？　ムチ？　天使のムチ？　何それ？」

「ふふん。今に分かるわ、魔優子ちゃん」

「はい、覚悟なさい！　魔族さん！」

「加奈子、慎重にね。あの魔族。彼氏さんに甘えている振りをして――」

蓮華が魔族の手元をスツと目を細めて注視する。魔族は体を預けるように、高次の背中にしな垂れかかっている。そのままアゴを優しく撫で摩っていた。

「あのアゴにやった手を、下手をすればノドにやりかねないわ」

「えっ、蓮華？　あの人、人質ってこと？　どうしたら？」

「でも、本人は自覚なさそうね」

そう、魔優子が驚き加奈子が呆れたように当の本人は頬をこれでもかと緩めていた。

「高次！　何暢気にニヤニヤしてんの！」

「ハイッ！」

「まずはこの状況をなんとかしないとね」

蓮華がチラッと加奈子を見た。

加奈子は蓮華に応えるように、嗜虐的な笑みを浮かべた。

「お仕置きね」

加奈子は光のムチを地面に打ちつけた。乾いた打撃音とともに土煙が舞い上がる。

「歓喜。加奈子。カッコいいわ。歓喜」

「モチよ。お・ま・か・せ」

唯の言葉に加奈子が嬉しそうに応える。ハスキーなその声が全員の耳をくすぐった。

「どっちが魔族か分からないわね……」

加奈子の嗜虐の笑みを見て蓮華が呟いた。

「イヤンツ！ 褒めないで！」

「呆気。褒めてない。呆気」

「えっと、大丈夫なんだよね？ 皆真面目にやってるんだよね？」

魔優子は自分より経験豊かな三人三様の様子に、一抹の不安を感じたのか遠慮がちに呟いた。

「あら……ゾクゾクするわね……」

そして魔族は挑発的な笑みを浮かべてキューピッド達を見回した。

## S I V 5

「ユツキー！ 聞いてよ！」

ラクシュミ株式会社が入るビルの地下施設。そのオペレーションルームにチームブライドの二人——須藤千佳と南柚希菜が帰ってきた。

その柚希菜に帰ってくるなり愛由美が泣きついた。

「ちよつと…… 邪魔なんだけど……」

入り口で柚希菜をつかまえた愛由美。そのままその場所に居座り、後ろから入ってこようとした千佳の道を塞ぐ。

「何ツスカ？ 愛由美ツチ？」

「待ちに待ったS I V案件なのに、やっぱり置いてけ堀にされたのよ！」

「おつ？ 残念ツスね」

「S I V案件発生！ 情痴か？ 修羅場か？ ドロドロか？ ああ、新聞部魂がうずくのに！」

「あはは」

柚希菜が愛由美を引きずるように、入り口を離れてオペレーションルームに入っていく。

「たく……」

やっと前が空いた千佳が呆れて後に続いた。

「ひどいのよ。素知らぬ振りして一緒に出かけようとしたら、蓮華先生にまたもや襟足掴まれたのよ」

柚希菜に抱きつき、愛由美はわざとらしく訴えるように訴える。

「ダメツスよ。蓮華ツチの後ろを歩かないと」

「そういう問題じゃないわ……」

千佳が空いている席に腰をかけた。

「ハチまで、私の邪魔をするし……」

「だって、私一人じゃバックアップできないです……」

「ハチ！ そんなんだから、いつまでたってもロクにもゴにも、なれないのよ！」

「那奈ですって」

「少なくともこの愛由美ちゃんと二人つきりになりたいのなら、センセーショナルな恋話のこいばな一つでも、持ちネタで持っておきなさい！」  
「そんな…… 愛由美さんだって、自分の恋話は持ってきたことないです——」

「コラッ！ キュウ！」

「那奈です！」

「愛由美ツチ。テンション上がりっぱなしッスね」

「そうなのよ、ユツキー！ 聞いてよ！ 今まさに修羅場が展開されているのかと思うと、じっとしてなんかいられないの！ ああ、それにしてもこの愛由美ちゃんがS I V担当じゃないなんて……

チームエンジェルに——カナさんとゆんゆんに担当できて、愛由美ちゃんにできない訳ないじゃないの！ この不当性をペンに訴えるべき？ 何処に投書すればいいの？ キューピッドの業界新聞とかないの？ 投書欄の充実したやつよ！ ハチ！ 知らない？」

「聞いたことないです」

「知ってるわよ！ 聞いてみただけよ！ ああ、愛由美ちゃんに何が足りないと言っの？」

「当たり前だわ……」

「何だと？ 千佳びょん？」

「千佳びょんとか呼ばないで…… たく。下世話な下心丸出しで、どんなキューピッドの仕事をするつもりなのよ？ 足りないんじゃないかって、余計なものだらけだよ…… 蓮華じゃなくっても、誰だって担当からはずわ……」

「何を！ どんなに楽しみにしてたか！ 千佳びょんには分からないんだ！」

「分かりたくないわ…… てか、その呼び方やめてって言うてるでしょ……」

千佳が半目で愛由美を睨みつける。もとより半目だが、殊更その半目から軽蔑の視線が見て取れた。

「S I Vだぞ！ 二股だぞ！ 修羅場だぞ！ 首を突っ込みたくなるのが、人情つてもんじゃない！ 興味あるでしょ？ 千佳ぴよん！」

愛由美が柚希菜から離れて千佳を指差した。

「ないわよ……てか、わざとぴよんぴよん言ってるわね……」

「愛由美さん…… 熱弁ふるい過ぎです」

真剣に熱弁を振るう愛由美に、那奈が顔を赤らめた。

「笹竹さん。蓮華と新人さんは？ すれ違っただけで、挨拶もろくにできてないの……」

「私もさつき初めて会いましたよ。今は蓮華さんが、その…… S I V案件に連れ出しました」

「ふーん……」

「ああ！ ぽつと出の新人のマユですら、修羅場に飛び込んでいるというのに！ 何故この愛由美ちゃんか！」

「分かるツス！ 分かるツスよ！ 愛由美ツチ！」

余り分かってはいないのだろう。だがここは同調した方が面白い。そうと見たのか柚希菜が話に乗ってくる。

「柚希菜……」

調子に乗り出しそうな柚希菜。千佳は思わず拳を握ってしまう。  
「分かってくれる？ ユツキー！」

愛由美が柚希菜の両手をとった。そしていつの間にか用意したデジカメをそつとその手に握らせる。

「何ツスカ？」

「頼みがあるの……」

愛由美が千佳と那奈に背を向けて、柚希菜に小声でささやきかける。

「実働チームには、応援要請があるかもしれないじゃない……」  
「そうツスね……」

愛由美に合わせて柚希菜が小声で応じる。何やら楽しそうな予感に柚希菜の頬が緩む。

「せっかくのS.I.V…… ストラチャード・インディペンデンス・ビーグル案件。ぶっちゃけ二股事件。新聞部の愛由美ちゃんとしては、写真の一つでも欲しい訳ですよ……」

「なるほどッス……」

「……」

かがみ込み小声で話し出す二人は、千佳がスツと立ち上がったことに気がつかなかった。

「ユッキー…… これはミッションよ……」

「ミッ？」

「シッ…… 声が大きい……」

「…… ミッション…… ツスカ？」

柚希菜の心の琴線に、その言葉が触れたようだ。柚希菜は思わず身を乗り出す。『ミッション』などと言われては、柚希菜のテンションは上がらざるを得ないのだろう。

「……」

「あわわ……」

千佳が二人の背後に無言で近づき、その後の惨事を想像してか那奈が真っ青になった。

「そのミッションは、インポッシブルっぽいッスカ？」

「そうね…… ちよいインポッシボーね……」

真剣そのものの口調で愛由美が答える。

「インポッシボー…… 燃えるッス…… 燃えるッスね……」

不可能な作戦と告げられ、柚希菜のハートに火がついたようだ。  
「ぐふふ……」

思惑通りに進む話に、愛由美が思わず笑みをこぼす。

「……」

そして話し込む二人は、千佳が背後に立ったことにやはり気がつかない。

「ユッキー…… 何でもいいわ…… 二股っぽい構図の写真が撮れたら、私が適当にキャプション入れるし……」

「適当？ いいんツスカ？」

「いいのよ…… 多少の演出は、ノンフィクションを構成する為の必要悪よ」

「面白くなってきたツス……」

「成功報酬は、二パフェでどう？」

「ウツヒヤーツ！ 二パフェツ！ パフェ二つ分ツスカ！」

柚希菜の瞳が、チョコレートパフェとフルーツパフェに変わる。

「しいー…… 声がでか——」

「——くなくても、聞こえてるわよ！」

「グハツ！」

千佳の肘打が柚希菜の頭にめり込んだ。

「——ツ！」

千佳はそのまま愛由美を睨みつける。

「チツ……」

愛由美は思わず顔をそらし、ミッションはインポッシブルに終わった。

「——ツ！」

その背後で何かの異変を告げるかのように、警告の赤ランプが警報とともに光り出した。

## S I V 6

「ハイッ！」

加奈子が左手をふるう。眩い閃光とともに、再度公園の地面にムチを打ちつけた。

「やっぱり天使のムチなの？ 何それ？」

「そうだよ。でも正確に言うとは違うかな」

素っ頓狂な声を上げる魔優子に、蓮華が笑いながら答える。

加奈子が下から上にムチをふるった。魔優子の目の前でムチがしなる。

「ひゃっ！」

魔優子が悲鳴を上げる。

自分の顔を叩かんばかりの近さ——文字通り目の前でムチはしなった。ムチは魔優子の眼前でピンと伸び切り、慣性と重力の釣り合った状態で空中に止まっている。

魔優子は目の前のムチを見た。小さな輪が数珠つなぎになっていた。その輪は一つ一つが光っている。小さな天使の輪のチェーンだ。  
「て、天使の輪？」

「そう、天使の輪のチェーン。あたしのムチ。気持ちいいわよ。味わってみる？」

加奈子がムチを、魔優子の足下の地面に打ちつける。衝撃とともに地面がえぐれた。

「え、遠慮します……」

「……」

唯が黙って弓を構えた。魔優子のそれとは違う、細く長い矢がその手元に現れた。

「あら残念…… じゃあ！ こっちで！」

加奈子がムチをしならせた。高速の一撃が魔族の右手の甲を直撃する。

「くっ！ 痛いわね！」

魔族が思わず右手を高次のアゴから外した。だがまだその懷に高次を抱え込んだままだ。

「興奮。くらいなさい。興奮」

そう言つと唯は弦から手を離す。その瞬間――

「――ッ！」

一条の光が魔族の頬をかすめて消えた。

「なっ？」

声も出せなかった魔族が愕然と目を見開く。

「何、今の？ 光の矢？ 速すぎない？」

驚いたのは魔優子もだ。あれでは光の矢ではなく、光そのものだ。

「疑問。驚いた。疑問」

「驚いたわよ…… そりゃ」

「自慢。これは光の力。そう、これは光の量子としての特性を生かした力。光はもとより波のようにも振舞い、粒のようにも振舞う量子というもの。魔力で光子を集めたものが天使の矢だとすると、その力は光子の粒をぶつけることでできていると私は仮説を立てた。

この場合は光子と電子の関係、つまり光電効果が参考になる。つまり光の粒を力任せにぶつけている感じ。でも光は粒のようにも振舞い、波のようにも振舞うもの。光は量子井戸と呼ばれるものを利用して波長を揃えることで、何処までもまっすぐに発射することができる。これは光の波としての特性。普通の光の矢をうまく使いこなせない私は、粒としてではなく、波として光の矢を扱うことに――

――

「はは、唯。今取り込み中だよ。物理講釈はまた今度お願いね」

長々とそれでいて淡々と話し出した唯に、蓮華が呆れて口を挟む。「つまり波長の揃った光――レーザー。天使のレーザー。これが私の武器。自慢」

唯が最後は魔族に向かって言う。心の中では不敵に笑っているのだから周りには伝わらなかった。

「く……これじゃ、矢じゃなくって、光そのものね。私、大ピンチかしら？」

魔族は身じろぎもできずに呟いた。

「唯！ カッコいい！ やっちゃえー！」

「興奮。モチよ。興奮」

加奈子がムチを踊らせて叫ぶと、弓を構え直した唯が応えて次々と弦を弾く。

レーザ光線としか呼びようのない光が、瞬く間に連射されていく。  
「発奮。連射も効く。発奮」

光を魔力で無理に集める必要がないせいか、唯の光の矢は集まった端から射ち出されていく。

「高次！」

「痛い！ 痛い！」

実際高次の体を貫いて幾条もの天使のレーザが、後の魔族ごと串刺しにする。天使の矢は人間には痛みも害もない。だが思わず高次は悲鳴を上げてしまう。

「この……」

魔族が毒づく。

光の矢はやはり目にも止まらない。そして人質は盾の役割すら果たさない。

何本かのレーザが魔族の脇に外れる。実のところ狙いはうまくいかないようだ。

「真っ直ぐ飛びすぎるからかしら。手元の微妙な狂いが、実際に届くまでに大きな誤差となっているのね……狙いが甘いわ。それに一本一本の威力も弱い……」

「拒否。答えない。拒否」

「なるほど。全ての長所短所をひつくるめての、この連射なのね」

魔族は不敵に笑うと右手を振り上げた。魔力を放つ左手を空ける為、右手に人質を持ちかえる。

「させないわよ！」

その隙を狙って加奈子が左手を一閃した。人質を持ちかえようとした魔族の虚を突き、高次の足下にそのムチを叩きつける。派手な土煙が周囲に舞った。

休みなく撃ち込まれるレーザー。舞い上がる土煙。

「ちい！」

魔族は堪らず舌打ちし、思わず片目をつむってしまう。

加奈子はその魔族の死角にムチを放つ。そして高次の足をからめ捕ると、一気に引き寄せた。

「痛て！」

高次は地面に背中を叩きつけながらひっくり返る。背中を打つと同時に体ごと足を引き寄せられた。

先程まで高次を掴んでいた魔族の左手が、宙にぶら下がっていた。

「この！ 痛いわね！」

魔族は毒づき後ろに飛ぶ。体中に焦げ跡を作りながら、魔族が背後に着地した。

「痛て！ 痛て！ 痛いって！」

高次が悲鳴を上げる。背中が見るからに痛そうに地面をすっぴいた。

そして突き刺さったレーザーの矢は、幾本かは貫通せず体に刺さっている。

顔や肩、腹に刺さったそれは、まるで剣山のようだ。光の矢による痛みはないが、その姿は見るからに痛々しい。

「高次！」

小百合が腰を抜かしたように座り込んだ。その目の前に高次が滑り込んでくる。

小百合は高次の上半身を慌てて抱え起こした。天使の矢のうち一本が高次の左胸に深々と突き刺さっていた。

「高次…… 大丈夫？」

「小百合……」

高次が小百合に見入っていた。

「えっ……」

小百合の胸がキュンと締めつけられる。

浮気ばかりするダメ彼氏。しかしいつも最後は許してしまう。そう、本当は自分だけを見ていてくれている。最後はやっぱり自分のところに帰ってきてくれる。

今も天使の矢に射たれて自分を見つめてくれている。

その事実が小百合の胸を締めつけた。

「あら。残念」

魔族の声がした。傷ついた箇所を手で押さえている。ダメージの回復に努めているようだ。

「新入社員ちゃん！」

そして高次はその声に、あっさり魔族の方を見た。光の矢は胸に刺さったままだ。

「なっ！ ちよつと！ 高次！」

「あら。お姉さんも大変ですね」

「天使さん！」

高次が今度は加奈子の声に振り返りそちらに見入った。胸の光の矢はやはりまだ健在だ。

「この……」

小百合の手が怒りに震える。

「えっと…… 何本も刺さっているせいよね？」

「違っよ。魔優子ちゃん」

蓮華が口を押さえ肩を震わせて答える。さすがに笑ってはいけな  
いと思っているらしい。

「そつよ…… こいつはこういう奴よ……」

小百合が低い声で言った。前髪が垂れて目が隠れていた。表情が  
見えない。

高次の体から天使の矢が消え始めた。

「あっ、逃げた！」

加奈子が叫んだ。

天使の矢が全て体から消えると、小百合の手を振り払って高次は一目散に走り出した。

「唯、魔族見てて。しばらく動けないかもしれないけど…… 魔優子ちゃんはどうだいから、あの人に天使の輪を使ってみて」

蓮華が逃げる高次を指差した。

「ええ！」

「実際やってみるのが一番よ。円盤投げみたいに放り投げたらいいから」

「そうかな……」

魔優子は戸惑いながらも天使の輪を、頭の上から右手に移し替えた。天使の輪が不可視の力で勢いよく回転し出す。

「あら。いい回転」

加奈子が魔優子の天使の輪の勢いに感心する。慣れていないとは思えない程の回転速度だった。輪をムチにしてまう加奈子ですら目を見張ってしまうようだ。

「えいっ！」

魔優子が見よう見まねで、天使の輪を右手で放り投げた。

高次はもう、公園の出口を出てすぐの歩道にまできていた。歩道を越え、ピザの配達員のバイクにぶつかりそうになりながら、大通りを渡って逃げようとしている。幸い道路に車は通りかかっていなかった。高次はその分ためらいもなく公園を飛び出そうとした。

天使の輪が高次の体めがけて飛んでいく。天使の輪が光ったかと思つと、高次は両手と体をその輪で捕らえられていた。上半身を一瞬间にして縛られた高次は、その場でつんのめる。

「やった！ できたよ、蓮華！」  
「痛っ！」

高次は顔からアスファルトの上に倒れてしまう。右の頬を強打した。

「縛られるなんて、まっぴらごめんだ！」  
だが高次がそう叫んで力を入れると、天使の輪は難なく打ち砕か

れてその場で霧散した。

「何で？」

魔優子が立ち上がるうとする高次を見て叫んだ。

「もつと相手を『ちゃんとつかまえていたい』って、思わないとダメだよ。魔優子ちゃん」

そう言うつと蓮華は、嬉しそうに天使の輪を放った。

走り出していた高次が、またもや天使の輪で捕らえられてつんのめる。今度は左の頬で地面に激突する。ピザの配達員も道いく人も皆、この不思議な天使の輪に見入っていた。

「加奈子」

「はい！ 任せて、蓮華！」

加奈子が天使の輪のムチをふるった。ムチは見る間に長さを増す。距離がある分だけ輪が次々と追加されていく。もはやムチと言うよりは、水面に尾を引いて泳ぐ蛇のようだ。生き物さながらに自らの身を左右に振りながら、ムチは高次に向かって伸びていった。

高次は道路の上で、天使の輪から逃れようと暴れている。その胸元にムチが襲いかかる。

「あれ？」

高次が間拔けな声を出した。ムチが絡めとるや高次の体が宙に浮いていた。高次は気がつけばお尻から着地している。お尻を打った痛みが高次を襲った。その高次を影が覆う。

「高次」

小百合が座り込んでいる高次の顔を覗き込んだ。につこりと形だけは微笑んでいた。

「小百合……」

高次が卑屈に笑う。小百合が体を起こし高次の襟首を掴んだ。

「あつ……」

魔優子が制止する間もなく、小百合は高次を引きずって魔族の方に近づいていった。

小百合は臆することなく魔族に近づくや、引きずってきた高次を

その前に転がした。

「痛い！」

「あげるわ」

「小百合……」

高次が情けない声を上げる。

「いらないわ」

魔族がヒールのつま先で高次に遠慮なく蹴りを入れた。冷たく薄い笑みを浮かべている。

「イテツ！ 新人社員ちゃん……」

「そう。気が合うわね…… お友達になれそうだわ……」

魔族と同じ笑みを浮かべてそう言つと、小百合もヒールで高次に蹴りを入れる。

「痛いって！」

「ふん！」

そして小百合は何のためらいも見せず、後ろに振り返つた。その背中で魔族が空に飛び上がる。

「逃げるわ！」

「いいわ、魔優子ちゃん。放っておきましょう。もう興味を失つたみたいだし」

蓮華が瞬く間に小さくなる魔族を見て言った。

小百合が力強い足取りで魔優子達の下に帰ってくる。

「いいんですか？」

魔優子が訊いた。

「お騒がせしました。CDSの補償を受けて、新しい恋に生きたいと思います」

「小百合…… おーい」

「いきましよう。皆さん」

弱々しい声を上げる高次に振り返らず、小百合は公園の外へ——新しい恋に向かって力強く歩き出した。

## S I V 7

「天使の輪の使い方は分かった？ 魔優子ちゃん？」

事務所への帰り道に蓮華が魔優子に訊いた。

人通りもそれなりにある街路を、四人のキューピッドが連なつて歩く。

小百合とは公園を出てすぐ別れた。高次が公園に一人取り残された。

小百合は何の未練もないかのように、後ろを振り向きもせずに戻つていつてしまった。仕方がないので魔優子達も会社に戻ることにしたのだ。

「だいたいかな？ この輪で魔族を縛るんでしょ？」

魔優子が自分の頭の上に浮く天使の輪を触りながら言った。

「宙に浮いてるのも、何の仕かけもなさそうなのに光っているのも、不思議で仕方がないけど」

「天使の矢も、輪も、羽も、人の正の感情でできているわ。これが魔族にとつては嫌なの」

「ふーん」

「矢は人の感情の真つ直ぐさを象徴しているの。永遠性の象徴が輪ね。羽は可能性ね。矢に込められた力は、その特性からして瞬間的な力として現れるわ。力の強い分、一瞬の力としてね。輪に込められた力は永続的な力として現れるの。力の弱い分、持続する力としてね」

「弱いつて…… それで魔族が縛れるの？」

「矢に比べれば弱いつてただだよ。それに輪は囲んじゃうからね。弱くても持久力のある方がいいの。まあ、絶対的な力の差があつたら負けちゃうけど、それは仕方がないよ」

「あら蓮華。私は絶対的に縛りつけてみせるわ」

加奈子が上機嫌で割って入る。ハスキーな声と甘い香りが、皆の

耳と鼻孔をくすぐった。

「期待してるわ加奈子。魔優子ちゃんも相手を縛りつける強い意志を持ってね。『ちゃんとつかまえていたい』って思わないと、逃げられちゃうからね。例えば――」

蓮華は天使の輪を外して右手の人差し指でぐるぐると回してみせた。一匹の鳩に目が止まる。電線に止まっていた。

「えいつ!」

蓮華が軽く氣勢を上げると鳩めがけて輪を放った。

驚いて飛び上がる鳩の後を追うように弧を描いて光の輪が飛ぶ。輪が鳩に当たる瞬間、輪は光り輝いて輪郭がぼやけ、鳩を取り囲んだ。

輪は鳩をその内側に捉えると一気に縮まる。鳩は空中で羽ごと胴体を捕らえられた。

天使の輪で締めつけられ、鳩は身動きも取れずに落ちてくる。

「きやつ!」

魔優子が悲鳴を上げ、蓮華が左手の指を鳴らした。

その瞬間光の輪はその場で消えて、蓮華の右手に現れた。

「もう! いたずらしちゃだめでしょ……」

魔優子が地面すれすれで自由を取り戻し、羽ばたき始めた鳩を見て安堵のため息をついた。

「いいのよ『いつでも好きな時に飛べる』――なんてことないって、知っておくべきだよ」

「あのね……」

「あと、輪は継続して力を保持しているから、これを頭の上に乗せておくことで、魔族はうかつにキューピッドに手を出せなくなるんだよ。頭の上につけたまま、全身をまんべんなく守るもよし。腕につけ替えて、ピンポイントで守るもよし。状況次第ね。そして輪の力で身を守りつつ、羽で敵の攻撃を避けるの。それから矢で敵の力を削いで身の危険を減らし、最後に輪で縛りつけるって感じだね」

「ふーん。できればそんな大活劇はしなくて済みたいわ」

「自信。魔優子なら大丈夫。自信」

「え？ そう？ あ、ありがとう……でも根拠は？」

「確信。ない。確信」

「はは。適当なのね」

「私も期待しているわ」

蓮華がクスクス笑いながら魔優子と唯の会話に割って入る。

「てか、そもそも魔族ってのは何がしたいのよ？ 名前からして、もっとおどろおどろしい存在じゃないの？ 何か想像していたのと違うんだけど。何で人の恋愛に口出してくるのよ？」

キューピッドの姿で四人が街を歩く。道行く人が時折——特にいき違ってから振り返った。

その恥ずかしさをごまかす為にか、魔優子は疑問に思ったことを次々と口に出しているようだ。話し続けていないと自分の姿を必要以上に意識してしまうのだろう。

「魔族の目的は人の感情を害することだよ。いい感情が人の世を覆うのを嫌うんだよね。そうだね。まずはデビレを狙ってすることが多いかな」

蓮華が軽くスキップを踏みながら答える。

「こういうステップでスキップを踏むと、背中が一番可愛く揺れるのよね」

「羨望。私もやる。羨望」

後ろからついて歩いていた唯が、その蓮華に対抗心を燃やしたのかスキップを踏んだ。

だが本人はスキップのつもりのようなだが、一定時間ごとに飛び上がっているようにしか見えない。

「あはは！ 可愛い！ 唯！」

唯の様子を見て、加奈子がおかしそうに笑った。

「デビレ？ 何かこのバイトにかかわってから、知らない単語ばかり聞かされるんだけど？ 何か違う世界に迷い込んだみたいよ」

「デビレは、デビレーションのことだよ。人の間にいい感情が交わ

されなくなる状態だよ」

蓮華が一度クルリと振り返った。

「？」

「予想通りだね。分からないって顔しているわ、魔優子ちゃん。眉間にシワが寄りまくりだよ」

「眉は放つときなさいよ。今はデビレの話」

「そうね、こう考えて。どんなものでも、出回っている量が少なくなれば、人間は自分の手持ちを使いたくなくなる。一度出ていって次に手に入らないと思えば、なかなか手放したくなる。お小遣いが少なくなれば節約するし、期間限定のお菓子が最後の一袋なら大事に食べるでしょ？ あの状態。人間の悲しい習性だよ。でね、これが感情面で起こった状態が『デビレ』。愛情でも何でもそうだよ。ね？ 皆がいい感情を心の奥底に閉まってしまい、人の間をいききしなくなる状態であるよね。いわゆる空気が悪いっての？ あれが近いかな？ 愛情の出し惜しみ。少しの感情で物事を済ませようとする冷えきった関係って嫌でしょ？ 私達はその状態をデビレーション——デビレって呼んでるんだよ」

「ふーん。蓮華って、何でも知ってるね」

「あはは、そう？ それ程でもないよ。それでね、デビレの話。少しの愛情でより多くの見返りがもらえるようになったら、次はもっと元手をかけずにいい思いができるかもしれない——人間って、そう思うようになるでしょ？ 少し待てばそれだけ、少ない愛情で同じ見返りが手に入るからね。そうなれば見返りの価値を下げてでも、愛情を手に入れたくなる。少なくなる一方の出回る愛情。下がる一方の見返りの価値。こうなるとお互いがお互いを、スパイラル状に下げあうようになる。これがデビレが更に進んだ状態。デビレスパイラルよ」

「分かんないわ」

魔優子の眉間のシワは、ますます深くなる。

「デビレスパイラルは一度なると厄介なんだよ。一度始まるとなか

なか抜け出せないの。魔族が狙っているのはこれなんだよね。そう、愛情の出し惜しみによる信愛収縮に、デビレーション——魔族はあなた達人間。もとい私達人間に仇なすことを願い、実現しようとしているんだよ」

蓮華はチラツと振り返って魔優子を見た。魔優子は眉間にシワを寄せてうつむき、何やら考えているようだ。

「で、その魔族から皆を守るのが、私達キューピッドの仕事って訳ね、蓮華——キヤーツ！ 可愛い！」

不意に顔を上げた魔優子が自身の言葉の途中で喚声を上げる。

「何？ 魔優子ちゃん？」

「蓮華！ 見て見て！ このアクセ！ 可愛い！」

蓮華が振りかえると、魔優子は通りがかったお店のショーウィンドウにかぶりついてしまう。

「同感。可愛い。同感」

「あら、確かに。可愛いわね」

唯と加奈子が魔優子に続いた。そこはアクセサリーを扱う小物のお店だった。キラリと光るアクセサリー類が魔優子達の瞳を輝かせた。

「キヤーツ！ 何これ！ 可愛さも、値段も、反則級よ！ 誰か買って！」

喚声とも悲鳴ともつかない嬌声をあげて、魔優子はお店ショーウィンドウを覗きながら横に移動する。

「誰かって？ 何言ってるの、魔優子ちゃん？ 買って欲しい人がいるくせに！」

「——ッ！ ななな、何を言って！ 蓮華はいつもいつも、何の根拠があつて！ それにあいつがこんなおしゃれなお店に入れる訳ないじゃない！ 似合わないし、気後れして、店に近づくだけで至難の業よ！ あのヘタレには！」

「私は誰とは言っていないのに、随分と具体的だね、魔優子ちゃん」  
「ななな！ わ、私だって、誰とは言って——キヤーツ！」

魔優子が何かにぶつかり更なる悲鳴を上げた。

「忙しいわね、魔優子ちゃん」

「ごめんなさい！ あっ、この間の猫の着ぐるみさん」

そう、ぶつかったのはいつぞやの猫の着ぐるみだった。猫の着ぐるみはやはりチラシを手に通行人に愛想を振りまいていた。

「……」

その猫の着ぐるみが驚いたように身を退いた。愛想のいい巨大な顔をのけぞらし、我が身を隠すように肩肘を前に出して半歩後ろにしりぞいた。

「？」

魔優子はそんな反応をされる理由がよく分からないのだろう。小首を傾げてその着ぐるみに視線を送った。

着ぐるみは宣伝が仕事のようだ。アイスクリームからアクセサリ  
のチラシに持ち替え、今日も猫の着ぐるみは愛想を振りまいていたようだ。

「ごめんなさい。痛かったですか？ この間の方ですよ？ 今日  
はこのお店の宣伝なんですか？」

「……」

猫の着ぐるみが慌てたように何度も頷いた。何かを誤魔化すかの  
ように、猫の着ぐるみは魔優子の手チラシを押しつけた。

「へえ。少しはお安くなってるんですね。でも、私じゃバイト代が  
出ても、なかなか手が出ないです。でも見てるだけで楽しいんで、  
見えていいですか？」

魔優子はそう告げると、加奈子と唯の隣に戻りショーウィンドウ  
に釘づけになる仕事に戻ってしまう。

「あはは、皆で占拠してたら、お店の迷惑だよ、魔優子ちゃん」

そんな三人に参加せず、蓮華がその後ろで笑った。

そして蓮華の笑みは無邪気なものから、ずっと深刻なものへと変  
わっていく。

その様はショーウィンドウを覗く少女三人には気づかれなかった。

「……デビレに信愛収縮。それにそれが更に進んだ信愛危機——キューピッドクライシス……いろいろな心配事はあるけど、難しく考える必要なんてないよね」

蓮華がシューウィンドウのアクセサリーに魅入る魔優子達の横顔を眺めた。その声は何処か大人びている。

「そうよ、何て言うか——」

キューピッドの格好をした少女達を見守る蓮華。それは同級生の視線というよりは、その保護者のような温かい視線だった。

「恋せよ乙女！ ってことかな！」

蓮華が嬉しそうに一人でそう頷くと、

「……」

猫の着ぐるみが魔優子の横顔だけをジッと見つめた。

## S I V 8

「もう、早く会社に帰るわよ」

いつまでもショールウィンドウに釘づけになっている少女三人に、蓮華が呆れたように声をかけた。

「……」

猫の着ぐるみがその中でも魔優子の背中に近寄ろうとしてか、意を決したように一歩前に出た。

「ん？」

その様子に蓮華が振り向く。

だが――

「――ッ！」

その脳裏に何かが煌めき、蓮華の興味を一気にそちらに引つ張った。

思念だ。

見ればキューピッド全員がはっと顔を上げている。皆が一斉に思念を受信したのだろう。

「蓮華さん！ チームブライドから応援要請です！」

皆の脳裏に那奈の悲鳴めいた思念が届けられた。

「どうしたの、那奈？」

「先に追いかけていた魔族をセンサーで発見！ これを追跡にチームブライドの二人が出ました！ でも、柚希菜さんがやられちゃったらしくって！」

「えっ？」

魔優子が驚きに眉を跳ね上げた。

「分かったわ、那奈！ 愛由美、場所は！」

「場所は近所の河川敷だよ、蓮華先生！ 愛由美ちゃんがナビるから、とりあえずそこから北東に飛んで！」

那奈の思念に続いて愛由美の思念が皆に届けられる。

「魔優子ちゃん！ 飛ぶわよ！」

そう言うや否や蓮華が空に舞い上がった。

「待って、蓮華！」

魔優子がその後を間髪入れずに飛び上がる。背中の羽が光を放ちながら羽ばたいた。

猫の着ぐるみが驚いたようにその姿を見上げた。

「飛ばすわよ、魔優子ちゃん！」

「分かったわ！ あれ？ あの二人は？」

魔優子は地上に振りかえり、アクセサリー屋の前を慌てて走り出した加奈子と唯の姿を確かめる。

「誰でも魔優子ちゃんみたいに、自在に力が使える訳じゃないの。

あの二人は飛ぶより、近くで車を拾った方が早いわ」

「えっ？ そうなの？」

「そうよ。魔優子ちゃんは特別なの」

「そうかな？」

魔優子はもう一度地上を振りかえった。

地上にはタクシーに駆け込む二人の他に、一人取り残された猫の着ぐるみの姿が見えた。

「……」

猫の着ぐるみはアクセサリーのチラシを片手に、いつまでも魔優子の姿を目で追っていた。

「腹立つツスよ！」

ずぶ濡れになりながら柚希菜が水中から現れた。水しぶきを盛大に立ち上げて柚希菜は落ちたと思いき川の中から空中に飛び出した。自慢のツインテールがべったりとコスチュームに張りついていて、髪は臉にもかかり柚希菜の視界を塞いでいた。柚希菜は首を振りながら己が元いた場所へと飛んで帰る。

飛沫をまき散らすそんな柚希菜の目に入ってきたのは、魔族に弾き跳ばされる千佳だ。

「——ッ！ 千佳ッチ！」

柚希菜同様川の中に落ちそうになった千佳を、柚希菜がとっさに受け止める。

「大丈夫ツスか？」

柚希菜がぐんと急上昇した。人一人抱えているというのにまるでそれを苦に感じていないようだ。柚希菜は安全な位置まで上昇すると急降下し出した。

「大丈夫じゃないわ。ずぶ濡れじゃない。私まで風邪引くわ……」

「何を！ 助けてあげたツスよ！」

柚希菜が河川敷に着地した。市民の憩いの公園を兼ねた広い河川敷だ。ベンチや木陰で休んでいた人々が突然の騒ぎに目を見張っていた。

「私は大丈夫。天使の輪に守られたし。それと思念で応援も呼んでおいたわ……」

柚希菜に降ろしてもらいながら千佳が口を開く。

「応援なんていらないうツスよ！」

「盛大に川に突き落とされておいて、説得力なんてないわよ……」

「ぐぬぬ……」

「ほう、天使の輪に守られたか？ 力の弱そうな方のキューピッドよ」

男の魔族が嫌みな笑みを向けていた。少しばかり胸を張り、何処までも人を下に見ようとしている笑みをしていた。

先に千佳達四人が退けた魔族だ。あの時と同じく一見の見た目だけは普通のサラリーマンに見える。

だが魔族が放つ気は違う。その異様な雰囲気周囲の人々がとっさに逃げ出した。本能で寒気を感じさせる何か。それがゆきずりの人間を訳も分からず逃げ惑わせた。

「黙れ……」

「黙れとはつれない。それに、俺が何をしたと言っ？」

「恋路を語る河川敷の恋人達の邪魔だ……」

「見ていたか？ 確かに。恋人達の耳元に囁きかけてやった。本当にその相手でいいのか？ とな」

「余計なお世話よ。自分の恋人ぐらい、皆自分で見極めるわ……」

「だが心の奥底で疑問を抱えている人間の実に多いこと。人の負の感情を扱う我ら魔族には丸分かりだ。誰かがそれを教えてやるべきではないのか？」

「何を！ お前ら魔族が——」

「柚希菜、黙ってなさい……」

何か言いかけた柚希菜を千佳が手で制する。

「妥協や、猜疑、欺瞞の思念が漏れ出ている言っているのだ。本命が他にいるのに、とりあえず今はこの相手でいいという考え。本当は遊ばれているだけではないかと、相手を信じていない気持ち。相手の悪い点は何かの勘違いに違いないと思いつくとする自己暗示にも似た現実逃避の心——」

「……」

「それらに向き合えるように、少々魔力的な力を乗せて耳元で囁いてやってただだよ」

「それが余計なお世話だと言っている…… お前らが望んでいるのは、破局という人間の負の感情の爆発する瞬間だけだ……」

「それはそれで恋の一面はず。何故打算や虚偽をうちに抱えたままで、その破局を避けようとする？ 問題を先伸ばしているだけな上に、己と相手を騙しているのはいいのか？ 今だけ楽しむのは、人間の本当に正の感情の発露か？」

魔族が口元をにっと開いた。勿論人を見下した笑みで歪んでいる。

「黙れ」

「『黙れ』とは、やはりつれない言葉だな。もう少し口数を多くしたらどうかね？」

「黙れ。お前ら魔族は口が上手い。人を惑わせる為の口数ならいくらでも増えるお前らと一緒にするな……」

「ほほう……」

「それに元より人間に完璧などない。それなのにお前らは人の話を引き出し掻き回すことで、人々から罪悪感を引き出し混乱させる……」

「何が悪い？ 正義だ愛だとほざきながら、一皮むけば自分の為だけに言葉を選び、物事を決めるお前ら人間が悪いんだろ？」

「黙れ」

「都合が悪くなれば、それか？ 見ればリーダー気取りのよう？」

「さぞかし、一言で人を動かすのは気分がいいものだろうな」

「何を……」

「お前は自分に酔っているだけだよ。魔族という分かりやすい悪に対峙し、恋のキューピッドになり切り他人の幸福を手助けしている自分にな。そして同年代の人間を一言二言で動かす自分にな」

「な——」

「何を！ 千佳ツチはシャイだから、あまり他人に心を開かないだけッスよ！」

「柚希菜…… 黙ってなさい……」

「くくく。そちらのキューピッドの方が、余程人間らしい。君はもしかすると、我々魔族寄りの人間かもな」

「な……」

千佳がギリリと奥歯を噛んだ。

「そうだ。そんな風に感情を表に出せばいいのだ。そうすれば自由が待っている。誰が誰を傷つけようとも、何とも思わない自由がな。他人を気にしないという自由がな。そして君が信じる正しいことを思う存分口にするのできる自由がな」

「黙れ！」

「おやおや。恋愛は口数多く、口が上手い方が有利だよ。何故黙る必要がある？」

「何が恋愛だ！ お前ら——グワッ！」

「黙れ！」

柚希菜が一際声を張上げようとしたところを、千佳が肘打ちを脇腹に入れて制した。

「魔族と同じ扱い…… あんまりツスよ……」

柚希菜が膝をつきながら脇腹の痛みに耐えた。

「お仲間に肘打ちとはひどいな」

「黙れ、魔族。柚希菜の心の隙はつかせない……」

千佳が弓をぐっと握り締めた。

「千佳ツチの心の隙もツスよ……」

柚希菜も心底痛そうに脇腹を擦りながら、見せつけるように右手で弓を前に突き出した。

「ふん。最後は力による制裁か？ それの何処が正の感情の為なのだ？」

男の魔族はそう言って笑うと、おもむろに左手を二人のキューピッドに向けた。

その手の平から妖しい黒い光が放電するように輝き出す。

「まあ、望むところだがな！」

その言葉とともに魔族は黒い光の矢を放った。

## S I V 9

「おりゃ！」

柚希菜が突き出していた右手を引っ込めるや、まるで何かの変身のポーズかのように天に左手を突き上げた。

突き出した左手は天使の輪の中に入るや、触れてもいないのにそれを持ち上げた。

一瞬で柚希菜の光の輪が巨大化する。

「ほほう」

瞬きするような時間で何倍もの大きさになった天使の輪。その輪が作り出した目に見えない力場のようなものに阻まれ、魔族が放った黒い光の矢が全て弾き跳ばされた。

「見たツスか？ 魔族の力なんて、アタシには効かないツスよ！」

「そのような。だがそちらの力の弱い方のキューピッドはどうか  
な？」

「……」

柚希菜の天使の輪の中に入り込み、完全に守られる形となっている千佳が魔族を睨みつけた。

「おやおや、態度だけは一人前だな。仲間を守ってもらわなくては、  
リーダー風一つ吹かせられない半端な天使のくせにな」

「だ——」

「黙るツスよ！」

千佳が口を開く前に柚希菜が吠えた。その一瞬で掲げていた天使の輪が更に巨大化する。

もはや輪は二人を守る防具ではなく、まるでそのような武器でもあるかのように巨大化して魔族に襲いかかった。

「はは！ 凄まじいまでの魔力だ！ だが——」

魔族は満足げに叫ぶと宙に飛び上がった。その跳躍で巨大化した天使の輪を避けると、上空から千佳と柚希菜を見下ろす。

「そんなに巨大では、むしろ中心の防御が疎かではないのかな？」

魔族が上空から左手を振り下ろした。その振り下ろした腕から放たれたのはやはり黒い光の矢だ。

「やらせないツスよ！」

柚希菜が左腕を更に天に突き出すと、その巨大な天使の輪が空気を押し上げて持ち上がる。

魔族の黒い光の攻撃が天使の輪の作り出す力場にやられて次々と消滅する。

「柚希菜！」

「任せるツスよ！」

「何をかね？」

魔族が降下してきていた。先の攻撃が霧散する衝撃と閃光を目くらましに、魔族が足裏を向けて降下してくる。

「物理的な攻撃にも強いかね？」

「当たり前ツス！ 直接攻撃でも、アタシには効かないツスよ！」

その言葉通り魔族の蹴りは柚希菜と千佳の直前で止まる。光の輪の力が魔族を押し退ける。

「はは、何処までも単純なキューピッドだ！」

だが魔族は余裕を見せるかのように笑う。

「柚希菜！ 下よ！」

「何と！」

そう、魔族本人に気をとられていた二人は、下から回り込んでいたその眷属達に気づくのが遅れた。いつの間にか魔族によって放たれていたらしきそれは、コウモリが巢に群がるかのような数と勢いで二人に襲いかかる。

「最初から、こっちが本命だったのね……」

地を這うように二人に近づく矮小な黒いもの達。それはやはり『笑っている』穴を見せつけて、天使の輪の下をくぐり抜けるように二人に迫る。

「く……」

柚希菜が天使の輪をもとの大きさに戻した。

「この！ 舐めるなッス！」

そのまま左手を振り払い上空の魔族を振り払うや、柚希菜は勢いよく体を翻した。河川敷の砂砂利を巻き上げて柚希菜の体が一回転する。

「……」

魔族の眷属——矮小な黒いものが『笑った』まま次々と弾き跳ばされた。

「この数を一瞬で！ やるな！」

弾き跳ばされた眷属。その合間を縫って、一度は振り払われた魔族が地面を蹴った。

「しまったッス！」

眷属を弾き跳ばす為に一回転していた柚希菜は、その魔族の攻撃に背中を曝していた。

「キヤーツ！」

だが悲鳴を上げて弾き跳ばされたのは千佳の方だった。自分でも天使の輪で身を守ろうとしたようだが、千佳はなす術もなく宙を飛んでいった。

「千佳ツチ！」

柚希菜がその千佳を助けるべく、砂砂利を蹴り飛ばして地面を蹴る。

「土台、足手まといを守りながら戦うは、無理なのだよ。こんな風にな！」

「——ッ！」

「柚希菜！」

千佳を空中で抱えた柚希菜。その柚希菜の背中を魔族の蹴りが襲った。柚希菜が声にならない悲鳴を上げ、千佳がその名を思わず呼ぶ。

柚希菜が千佳を抱えながら、めり込むように地面にうつぶせに突っ込んだ。だがあくまで柚希菜は千佳を守ったようだ。千佳が地面

に激突しないようにか、柚希菜だけが地面を滑るように着地していた。

「……大丈夫ツスカ？」

「自分の心配をしなさいよ……」

千佳が柚希菜の腕を振りほどき、とつさにその場で立て膝で座り込んだ。

「指示役がいないと、アタシは戦えないツスカからね……」

柚希菜が半身を砂利塗れにしながら立ち上がるうとした。

「ぐ……」

だが柚希菜はそのままもう一度突っ伏してしまふ。

「柚希菜！」

「大丈夫ツス！ 千佳はアタシが守るツスよ……」

「まだ、そんなこと言って！」

「終わりだな……」

魔族が余裕からかその場を動かず左腕だけをふるった。一条の黒い光の矢が千佳と柚希菜を目がけて放たれる。

「この…… させないわ！」

千佳がとつさに天使の輪を左手につけ替えた。そのまま防御に前に突き出そうとする。

だが千佳の天使の輪は――

「キヤーッ！」

構える間もなく黒い光に弾き跳ばされた。

「ふん、防がれたか。一撃だと思ったんがな…… 腹が立つ」

ざつという音を立てて魔族が二人に一步近づいた。

「天使の力は人間の正の力を魔力で放つもの。言わば電力のワット。電流と電圧の関係だ。魔力と正の感情の強いものが力を持つ」

「何よ……」

千佳が両手を開いて未だ立てない柚希菜をかばおうとした。

「そちらのキューピッドは己の単純明快さを——そう、明るさを正の力にしているようだな。それを有り余る魔力の素質が余すことなく引き出している」

魔族はゆっくりと千佳達に近づいてくる。

「……」

「単純だが、我ら魔族にとっては鬱陶しい敵だ」

「ぬおお…… ファイトツス、アタシ！」

柚希菜がぐぐと力を入れて何とか立ち上がった。それに合わせ千佳も立ち上がる。

「だがもつと腹が立つのは、今のお前だ。力の弱いキューピッドよ」

「何よ……」

「魔力もろくにないくせに、仲間を守りたいという正の感情だけで俺の攻撃を防いだ」

「それが何ツスか？ 千佳はやればできる娘ツスよ！」

柚希菜がふらつきながら弓を構えた。

「鬱陶しいので、消えてもらいたい。そういうことだ」

魔族が左手を天高く振り上げた。黒い光がその左手にまとわりつくように輝き出した。

「柚希菜…… 大きいのがくるわよ……」

「分かってるツスよ……」

柚希菜が天使の輪を左手首で輝かせた。だがそれは先程のように

巨大化する訳でもなければ、力強い光も放っていない。

「そんな力で防ごうとは。舐められたものだ！」

魔族が力一杯左手を振り下ろした。一際鋭い黒い光の矢が柚希菜の天使の輪を襲う。

「ぐわ……」

柚希菜がそれでも左手一本でその攻撃を防ぐ。黒い光が閃光を発して霧散し、天使の輪の光が犠牲を払ったかのように急速にその光を失っていく。

「そう何度ももつかな？」

魔族が間髪を入れずに黒い光を放った。

「千佳ツチ！」

「柚希菜！」

二人が名前を呼び合って身を寄せ合う。少しでも力を出さんとしてか互いの体を力強く掴んだ。

その二人の前に――

「させないわ！」

そう叫びながら突如空から現れた蓮華が降り立った。同時に左手首につけていた天使の輪で黒い光の矢を弾き跳ばす。

「貴様！」

魔族が怒りに顔を歪める。

「観念なさい！」

蓮華が地面を蹴った。一気に魔族との距離を詰める。

「やつ！」

蓮華が左手をふるった。天使の輪が魔族の身をとらえようとする。その左手を魔族が右手で押さえた。

代わりに黒い光を放とうとした魔族の左手を、こちらは蓮華がとつさに押さえた。

「おのれ……」

「この……」

二人は息も触れそうな程間近で睨み合った。

「まるで直接天使の力に触れているかのよう…… 貴様…… 人間ではないな……」

魔族が蓮華と触れている左右の己の腕を見て呟いた。魔族の両の手から煙が上がっていた。まるで蓮華に触れることで、魔族の身が焼かれているかのようだ。

「人間よ。少なくとも、人間並みに力は落としているわ」

「酔狂な…… 何の為に……」

「人間の力を信じているからよ！ 魔優子ちゃん！」

蓮華がその名を呼んで僅かに身を屈めた。

「——ッ！」

魔族が驚き目を剥いた。蓮華の背中の方こう。追い詰めた二人の前に、新しいキューピッドが弓を構えて立っていた。

魔優子だ。

魔優子は力強いまでの光の矢をその弓に出現させていた。

「食らいなさい！」

魔優子が矢を放った。

「——ッ！」

蓮華の肩をかすめるように、その魔優子の矢は魔族の右肩に突き刺さる。

「ぐおお……」

矢を肩に食らった魔族が、蓮華を突き放してふらつきながら身を翻した。矢が突き刺さった肩から猛烈な勢いで煙が上がった。

「正の感情の力が…… 何だ？ ここまでの力の源は何だ……」

魔族が苦しげに身を振る。震える体を無理に押さえつけながら、魔族は光の矢に手をかけた。その矢を掴んだ腕からも煙が上がる。

「年頃の女の子なら、当たり前前に持っている感情よ」

「おのれ……」

蓮華の言葉に魔族が吐き捨てるように呟くと、一気に肩から矢を引き抜いた。

「覚えておくぞ、そのキューピッド！」

魔族が天使の矢を投げ捨て、魔優子だけを睨みつけて吠える。

「貴様だけは、俺の手で殺す。生まれてきたことなど、後悔する程の負の感情に苛んで死んでいくいい！」

「何よ……」

魔優子がごくりと息を呑んだ。

「突抜さん？ 耳を貸しちゃダメよ……」

千佳が魔優子の前に出た。

「千佳ツチ。前に出ても役に立たないツスよ」

柚希菜が二人の更に前に出た。この短い時間で魔力と希望を取り戻したのか、その左手の天使の輪は最初の輝きを取り戻していた。

「蓮華！ 皆！ 無事なの？」

「焦燥。間に合った。焦燥」

タクシーがタイヤを軋ませて河川敷の向こうに急停車した。同時に飛び出してきたのは二人のキューピッドだ。加奈子と唯がそれぞれムチと弓を手に駆けてくる。

「おのれ…… 数が揃ってきたか……」

魔族が病的な眼差しで周囲を見回した。だがやはり最後に目を向けたのは魔優子だ。

「何よ……」

「俺は魔族だ。感謝などという言葉は使わない。だが覚えておけ。お前のお陰で俺は復讐という負の感情で、この胸を満たすことができる。これは魔族にとって限りないまでの喜び。そして力となる」

「な……」

「この人数を相手にする気はない。それに次の仕事が待っているからな。ここでおいとまさせてもらおう。だが、この復讐はいつか遂げさせてもらうぞ」

魔族の姿がぐにやりと歪んだ。

「逃さないわ！」

蓮華は叫ぶや否や後ろに跳んだ。その跳躍で距離をとるや天使の弓を構える。

「ははは！」

魔族が高らかに笑った。その笑い声とともに、魔族の姿が無数の眷属を組み上げたものに変わる。『笑っている』だけの顔をした眷属だ。

数え切れない程の『笑っている』だけの顔が魔族の体を構成していた。

「やつ！」

そして蓮華の光の矢が魔族の体に襲いかかると、眷属が一気に分散した。巣から立ち去るコウモリの群れよろしく、眷属が四方に散っていく。

「ななな……」

その眷属は駆け寄ってきた加奈子や唯にも、死闘を繰り広げた千佳や柚希菜にも目もくれず、ただ魔優子にだけ『笑っている』だけの顔を何処までも向けながら去っていく。

「不快だわ……」

やはり眷属に無視される形となっていた蓮華が呟くと、眷属の姿はもう見えなくなった。

「蓮華……」

千佳が蓮華に近づいた。加奈子が同じくその蓮華に走り寄り、唯が魔優子と柚希菜の下に駆け寄った。

「千佳。大丈夫だった？」

「ええ、蓮華。でも、あの魔族。『次の仕事』がどうか……」

「そうね。すでに次の悪事を企んで——」

蓮華が語尾を呑み込んだ。己の頭の中に集中するかのように黙り込んでしまう。

「ええ。分かったわ、那奈」

那奈からの思念だったようだ。蓮華が真剣な顔で独り言のように呟くと、心配げに見つめるキューピッド達に振り向いた。

「急いで会社に戻るわよ」

蓮華がいつになく真剣な顔で皆を見回す。

「CDOが——CDSとは比べ物にならない案件が、火を噴きそうよ……」

蓮華は聞き慣れない略語を口にし、くると背を向けると率先して歩き出した。

## CDO1

コラテライズド    担保（は）  
デット                    債務（で）  
オブリゲーション   証券（化）

「CDO？」

魔優子が地下施設で眉をひそめた。また知らない単語だ。

「そう、CDO——債務担保証券。債務そのものを担保に証券化した、ある意味究極のキューピッドデリバティブの一種だよ」

蓮華が地下司令室で皆の前に立っていた。心なしかその表情にはいつもの余裕が感じられない。

「はあ？」

魔優子以下、全てのキューピッドがオペレーションルームに集められていた。眉間をこれでもかと疑問に寄せた魔優子同様、蓮華の説明に皆が分からないという顔をした。

「CDOはそうね。誰かが借りている債務があるとするわね。その債務を回収する権利——つまり債権の持つ資産価値を裏づけに、もう一度証券化するの。最初に債権を持っていた人は、その時点で最初の債権にあつたりリスクを他の人に移し替えることができるわ。こうして作られた証券は、高い利回りがついているものが多いから、買った人も喜ぶんだよね。こうすることで、最初の債務に対するリスクが分散されるの。そしてより多くリスクをとっても安心だから次の債務への需要と供給が生まれるの。勿論新たに供給されたそれも証券化して、他の人にリスクを移転するわ。利回りが高いから引き受け手も引きも切らないしね。で、最終的にリスクを広く薄く多くの人が持つことになるって訳。それとこのCDOには幾つかの種類があるわ。何て言うか人の欲望の数だけね」

「ええつと……」

「そして今回はその中のシンセティックCDOってやつ。シンセティックは『合成された』って意味なんだけど。幾つか種類のあるCDOの中でシンセティックCDOはCDSのようなキューピッドデリバティブを、参照して作られているの」

「債務？ 担保？ 合成？ 参照？」

魔優子の眉間のシワはますます深くなる。

「そうだよ。沢山の――それこそ百以上のCDSを参照対象に選んで、シンセティックCDOとして契約するの。その参照するCDSの内、何パーセントかがデフォルトになったら、そのシンセティックCDOもデフォルト――という契約を作るの。証券であるいくつかのCDSをひとまとめにして、もう一回証券化して取引を成立させるのね」

「はあ……」

魔優子は気の抜けた返事しかできない。

「愛由美、分かる？」

「ぐう……」

「やっぱりね」

「まあ、大事なところは組み込まれているCDSのいくつかが破綻したら、それを条件に発動ってところね。数件のCDSの破綻で、残りのCDSも破綻と同じ扱いになるんだよ。残りが実際に破綻していなくても、そのシンセティックCDOの契約を結んだ者同士の補償としてはね。だから、実際に破綻したその数件のCDSとは、比較にならない規模の補償が発生するわ」

「分からないわ」

「だろうね、魔優子ちゃん。まあ、今問題なのは、一つ一つのCDSはそれを契約した本人の、基本的には単独の問題だったんだけど、シンセティックCDOに組み込まれたCDSは、そうはいかないところだよ。多数のCDSを、一つにまとめているから規模が違うの。シンセティックCDOに組み込まれたCDSは簡単に破綻してもらっては困るんだよね」

「ただのギャンブルのようにも、聞こえるけど……」

千佳が尋ねる。

「それに、もはや補償でも証券でも、何でもないような気がする……」

……

「そうだね、千佳。そう言う人もいるのは、確かかな」

「でも何で最初から、そんな危ない保険をかけるんだろ？」。

「それはね、魔優子ちゃん。CDSを考え出したり、保険を組んだ時は危ないとは思わなかったんだよ。こういうのはその債権が安全かどうか確かめる格付けをする会社があるんだけど、その格付けも完璧じゃなくってね。元より劣後構造や再証券化とか。工学技術を使ってリスクを分散しているつもりだったからね。その格付け会社の高い格付けが得られているシンセティックCDOは特にね。格付けが甘かったのではないかということ、サブプライドローン問題で信愛収縮が始まったことが、今になって二重に重しになっているかな。何と言うか互いの背中を押し合っている感じでね。恋の破綻が信愛収縮を呼び、信愛収縮が恋の破綻をまた発生させる。負の連鎖だね」

「不可抗力ってこと？」

魔優子が何とかそうとだけ質問する。

「確かに。中にはCDSのプロテクションの買い手——つまり破綻時に補償を受けられる方になって、そのCDSをデフォルトさせようとする人もいなくはないわ。そうすれば払ったプレミアム——つまり保証金以上の感情を、回収することができるからね」

蓮華はここで一息置いた。

「自分自身のデフォルトに対して、大きなCDSをかける。このことで自分自身は『大き過ぎて潰せない』状態にする。結果周りに助けてもらう。公的な正の感情を使ってでもね。最初から意図したものかは分らないけど、結果そうなっていることもあるかな。強欲だとか、恥をしれとか、禿鷹だとか言われる人もいることはいるわね。ホント人間って欲深いわ」

蓮華が皆を見回した。

真面目な顔。不真面目な顔。それぞれだが皆が蓮華の話に聞き入っている。

「でもね、CDSを組んだことも、格付け会社が格づけすることもサブプライド層に貸しつけたのも、どれも絶対的に悪いことではなかったんだよ。保険をかけたくなる気持ちは誰にでもあるし、誰かがそのための基準を決めなきゃなんないし。そして何より、誰だって夢を見たい……それにできることなら、少しでも多くいい思いがしたい。そこに目をつけて、後のことを考えずに、自分だけいい思いをしようとした人とかもいて、皆少しずつ間違っただね」

魔優子が真剣な顔で頷いた。蓮華はその様子に満足げに頷いた。

「だからといって、哀しい結末は誰だって嫌なんだよ。信愛収縮——キューピッドクランチや、世界同時不信。ましてや信愛危機——キューピッドクライシスなんていう外的要因で、実る恋も実らないなんて、あつてはいけないことだよ」

「どうしたらいいの、蓮華？」

魔優子が誰もよりも先に口を開いた。

「そうね。世界同時不信も信愛危機も、人を信じない世の中が不幸を加速させるわ」

「……」

「だから世界の為に、キューピッドの力で皆の心の絆を確かめるんだよ」

蓮華の最後の一言に、皆が一斉に頷いた。

「で、那奈がもらった情報。あるシンセティックCDOに組み込まれた格付けのいいCDSが一件、魔族に狙われているらしいんだよ。このシンセティックCDOはいくつかの参照CDSが既に破綻していて、契約上後一つでも破綻すると、支払い義務が発生するんだよね」

「結局、どうなるんですか？」

那奈がオロオロと訊いた。

「保険の引き受け手は大損。シンセティックCDOはその性質上、破綻するCDSそのものに比べて被害規模が大きくなるからね」

「自業自得では？ 保険の引き受け手は何事もなければ、保険料がもらえる。何かあれば、保険を支払わなくてはならない。リスクは充分承知のはず……」

千佳が半目を冷たく光らせて口を開いた。

「そうとも言えるけど、保険を引き受けてくれる側があるから、安心してリスクをとることができるんだよ。一概に引き受け手だけを責めるべきじゃないよ」

「払う側がいるってことは、受け取る側もいるってことでしょ？」

その…… 全体としてはバランスが合うんじゃないのかな？」

魔優子は難しいことは分らないが、思ったことを率直に口にする。

「想定されている以上の確率で簡単に破綻されては困るんだよね。格付けのいい——つまりそうそう破綻しないと見なされていたレベルまでがあっさり破綻したら、引き受け手は割に合わないよ。それにCDSの市場はお互いのCDSを持ち合っているからね。一度に想定以上の破綻があつて、一つでもデフォルトに感じきれないところがあつたら、他にも一気に波及するんだよね。システムティックリスクって呼んでいるわ。信愛のドミノ倒しが起こるのだと思って

ね。『恋愛大量破綻兵器』と呼ばれる所以ね。そして何より――」

蓮華が一同を見回した。特に魔優子の顔を長く見つめる。

「何より今回は魔族が絡んでるんだよ。破綻する必要のない恋が、歪められて破綻する。そんなの許せる？ 魔優子ちゃん？」

「それは――」

魔優子は少し考えようとてしか眉をひそめた。

だが考えるまでもなかったようだ。魔優子は即答する。

「許せないわ」

「そうだよ。キューピッドでなくても許せないよね。では出勤よ。那奈、状況を説明して」

「はい。えっと、今回のCDSは女子高生がかけました」

那奈が慌てて資料をめくり出し、その内容を読み上げ始める。

「女子高生…… 同年代なの？ すごい」

「内容は恋の成就です。告白して万が一成功しなかった場合に、補償を受けられるようにCDSをかけたとのことです。本人は性格もいいし、ルックスもいい。男女問わず人気があることから、告白されて断る男子はまずいないと判断されて、CDSに高い格付けがついています。これに魔族がからでいるらしいです」

「……」

魔優子が弓を持つ手にぐっと力を込めた。

「魔優子ちゃん、力入ってるね」

「当たり前じゃない、蓮華。自分から告白しようなんて、凄い勇氣だよ。私なら無理。応援してあげないと」

「そうツスよ！ 悪い魔族はアタシが倒すツスよ！」

「あなたは、暴れただけよ……」

「あはは！ 千佳つてば、柚希菜のことは何でもお見通しなのね。柚希菜だつて、正義感から動いているかもしれないじゃない？」

「うるさい、黙れ…… 加奈子も似たようなもんでしょ……」

「同感。加奈子もムチをふるいたただけ。同感」

「ええーっ！ 評価散々！ がっかり！」

「盛り上がってきた！ 愛由美ちゃんも、突撃取材にいかねければ！」

「愛由美さんは、私とお留守番です。バックアップどうするんですか？」

「ハチ！ 今こそ兄弟のイチと二とサンを呼ぶ時よ！ 手伝わせない！」

「そんな兄弟いません！ てか、那奈です！」

「ほら、那奈。愛由美は縛ってでも、置いていくから続きをお願い」  
蓮華が好き勝手に話し出した話題の流れを切るべくか、那奈に続きをうながした。

「はい。余談になりますが、この女子生徒は私達の学校の生徒です」  
「うちの？」

「ええ、魔優子さん。それどころか、魔優子さん達のクラスメートの娘です」

「えっ！ 知ってる娘？」

魔優子は驚いて目を見開き、これ以上はないぐらいに大きく眉を吊り上げた。

「知ってらっしゃると思いますよ。美人で有名ですし、私のクラスでも話題になったことがあります」

「美人で有名……」

まさか――

という言葉を小さく魔優子は呑み込んだ。

「名前は苅田英里奈さん。告白対象は――」

「――ッ」

苅田英里奈――その名前に魔優子の心臓は大きく一拍鼓動を打った。魔優子の動きが一瞬で固まる。

「五條光助くん。同じくクラスメートの男子です。知ってらっしゃいますか――」

その後の那奈の言葉はもう耳に入らなかったのか、蓮華がその顔を盗み見ても魔優子は全く反応しなかった。

「あっちゃー……」

愛由美が小さく呟いた。

「……」

魔優子はまだ動かない。

「やっぱり、知り合いなの？」

愛由美と魔優子の反応を見た加奈子が蓮華に尋ねる。

「どっちともね。特に男の子の方は……」

蓮華が言葉を濁す。

「……」

その場に流れた雰囲気には皆が一瞬でその空気を理解したようだ。

誰もが魔優子の顔を盗み見た。

その気まずい空気を切り裂いて、

「蓮華！」

千佳が皆に活を入れる為にか、珍しく大きな声でその名を呼んだ。  
同時に手まで打ち鳴らす。皆の注目が千佳に集まった。

「何を皆でばつとしてるの？ 蓮華まで。らしくない……」

「そうね、千佳。ごめんなさい。これは仕事ね。大事なキューピッド案件ね。誰にとっても大事な恋のお話よ。誰かの為に誰かが大事な気持ち踏みにじられていい訳がないわ」

蓮華が目力を入れ直した。そして魔優子に氣をとられまいとしてか、殊更真っ直ぐ愛由美に向き直った。

「愛由美、索敵して。五條光助くんがいるところに、魔族がいるはずよ。魔族の反応があるところに、光助くんがいる可能性が高いわ」  
「了解！ 任せて蓮華先生！ 素敵索敵オペレータ愛由美ちゃんの出番よ！」

愛由美もわざとげにオペレーション用の席に着く。やはり殊更大きな声を出すことで、今の仕事に集中しようとしているようだ。

「おっ！ さつそく魔族反応あり！ さすが愛由美ちゃん！ 鼻が効く！」

「何よ、愛由美。それ機械の力でしょ？ 鼻関係あるの？」

加奈子が呆れたように肩をすくめた。

「何を！ カナちゃん！ くさいものを嗅ぎつける、この愛由美ちゃんの鼻！ スクープだろうが、魔族だろうが、何だって逃しはしない！」

「そうツスよ！ さつきはシュークリームの匂いも、嗅ぎつけてもらったツスよ！」

「そう！ 愛由美ちゃんに隠し事など不可能！」

ぬはは、ぐははと、柚希菜と愛由美は声を揃えて笑い出す。

「シュークリーム？ それって？ あたしの差し入れ？ 隠し事って——冷蔵庫じゃない！」

「カナやんの家の自慢の商品——シュークリーム！ おいしくいただきました！」

「大丈夫ツスすよ！ 加奈子ツチ！ ちゃんと残してあるツスよ」

「そうとも！ ちゃんと一人一個ずつ残してあるわよ！ 愛由美ちゃんに抜かりはないわ！」

「一人三個は回るように…… 沢山持つてきたんだけど……」

加奈子の目が妖しく光る。その右手に光のムチが現れた。

「激怒。お仕置きね。激怒」

「駅前商店街。感度が低いわ…… 際立った活動はしてないのかな

……」

蓮華がモニターを覗き込む。

「同じ場所を動かないよ、蓮華先生。何か狙ってるんじゃないかな」

愛由美がモニターから、蓮華に顔を向けて言った。そのお陰か愛由美の鼻先をかすめて光のムチが外れる。

ムチの向こうでは、千佳がお仕置きの回し蹴りを柚希菜に食らわせていた。

モニターには駅前の地図が映し出されている。

「あそこは……」

魔優子の目がモニターに釘づけになった。

駅前の商店街。記憶に間違いがなければ、あれはS.I.V.の帰りに見つけたアクセサリー屋だ。思わず引き寄せられた店だ。

誰かに買って欲しいと思ったアクセサリー類。その店に光助がいる。その事実が更に魔優子の胸を締めつける。

「てか、ここ知ってる！ 女子ウケするアクセ屋さんだね？ えっ？ やっぱり、何か話が進んでいるの？」

愛由美が自分の発見の意味に驚いて思わず魔優子の方を向いてしまふ。

「——ッ！」

その魔優子が心臓が痛んだかのように、とっさに胸元を押さえた。

「苺田さん宛のプレゼントかもね」

「ちょ、ちよつと、蓮華先生。そんなはつきりと……」

「自分の恋に向かい合ってる娘が、きちんとその思いに報いてもらえるかもしれないのよ。いいことじゃない？ 何を遠慮するの？」

「いや、確かにそうだけどさ……」

「逃げ回ってる娘より、よっぽど応援してあげたいわ」

「ちょ、蓮華先生。そこまで言う必要は……」

「……」

魔優子が視線をそらした。

「……」

千佳が苛立たしげにその姿を横目で見る。

そんな千佳を柚希菜がニヤニヤしながら見守った。

「いや！ でもいいな！ アクセ！ 愛由美ちゃんも、誰かにプレゼントされたいな！」

愛由美が再度悪くなり始めた雰囲気を感じ取ったのか、殊更はしやぐように口を開いた。

「あら、アクセなんか興味あるの？ 愛由美」

「おっ、カナちゃん。バカにしているな？ 愛由美ちゃんだって女の子。

プレゼントは欲しい！ 年がら年中欲しい！ そしてどうせなら、キラキラ輝くかわいい小物の方が――」

「換金性が高いから、大好きだって言っていました」

「コラッ！ キュウ！」

「那奈です！」

「愛由美。モニターにもう一個反応があるわよ」

蓮華が身を乗り出してモニターを指差した。

「あ、ホントだ。もう一つ魔族反応あり――と！ こっちは苺田さんの家の近くだよ。苺田さんは家にいるのかな？」

「やっぱり二人は同時に狙われていると…… 同じ案件なのね」

「そ、そうかな…… 偶然かもよ……」

愛由美がチラチラと魔優子の様子を窺いながら言葉を濁して蓮華に応えた。

蓮華がモニターから顔を上げる。そのまま見つめたのは魔優子の顔だ。

「……」

魔優子はまだ視線をそらしていた。

「いずれにせよ出勤よ。加奈子と唯は苺田さんをお願い」

「オッケー！」

「快諾。まかせて。快諾」

「チームブライドとチームキューピッドで五條くんのところに行くわよ」

「了解ッス」

「分かったわ……」

「……」

魔優子だけが応えない。

「愛由美、おふざけなしで留守はまかせたからね。那奈は思念の中心を継ぐのお願い」

「任せて、蓮華先生！」

「分かりました」

蓮華の言葉に皆がそれぞれにうなづき返事をした。

蓮華が率先して出口に向かった。皆が続く。だが魔優子だけが立ち止まったままだった。

その魔優子を――

「ほら、いくわよ……」

千佳が腕を掴んで連れ出した。

「あっちゃー……」

愛由美が小さく呟いた。

「……」

魔優子はまだ動かない。

「やっぱり、知り合いなの？」

愛由美と魔優子の反応を見た加奈子が蓮華に尋ねる。

「どっちともね。特に男の子の方は……」

蓮華が言葉を濁す。

「……」

その場に流れた雰囲気の皆が一瞬でその空気を理解したようだ。

誰もが魔優子の顔を盗み見た。

その気まずい空気を切り裂いて、

「蓮華！」

千佳が皆に活を入れる為にか、珍しく大きな声でその名を呼んだ。  
同時に手まで打ち鳴らす。皆の注目が千佳に集まった。

「何を皆でばつとしてるの？ 蓮華まで。らしくない……」

「そうね、千佳。ごめんなさい。これは仕事ね。大事なキューピッド案件ね。誰にとっても大事な恋のお話よ。誰かの為に誰かが大事な気持ち踏みにじられていい訳がないわ」

蓮華が目力を入れ直した。そして魔優子に氣をとられまいとしてか、殊更真っ直ぐ愛由美に向き直った。

「愛由美、索敵して。五條光助くんがいるところに、魔族がいるはずよ。魔族の反応があるところに、光助くんがいる可能性が高いわ」  
「了解！ 任せて蓮華先生！ 素敵索敵オペレータ愛由美ちゃんの出番よ！」

愛由美もわざとげにオペレーション用の席に着く。やはり殊更大きな声を出すことで、今の仕事に集中しようとしているようだ。

「おっ！ さつそく魔族反応あり！ さすが愛由美ちゃん！ 鼻が効く！」

「何よ、愛由美。それ機械の力でしょ？ 鼻関係あるの？」

加奈子が呆れたように肩をすくめた。

「何を！ カナちゃん！ くさいものを嗅ぎつける、この愛由美ちゃんの鼻！ スクープだろうが、魔族だろうが、何だって逃しはしない！」

「そうツスよ！ さつきはシュークリームの匂いも、嗅ぎつけてもらったツスよ！」

「そう！ 愛由美ちゃんに隠し事など不可能！」

ぬはは、ぐははと、柚希菜と愛由美は声を揃えて笑い出す。

「シュークリーム？ それって？ あたしの差し入れ？ 隠し事って——冷蔵庫じゃない！」

「カナやんの家の自慢の商品——シュークリーム！ おいしくいただきました！」

「大丈夫ツスすよ！ 加奈子ツチ！ ちゃんと残してあるツスよ」

「そうとも！ ちゃんと一人一個ずつ残してあるわよ！ 愛由美ちゃんに抜かりはないわ！」

「一人三個は回るように…… 沢山持つてきたんだけど……」

加奈子の目が妖しく光る。その右手に光のムチが現れた。

「激怒。お仕置きね。激怒」

「駅前商店街。感度が低いわ…… 際立った活動はしてないのかな

……」

蓮華がモニターを覗き込む。

「同じ場所を動かないよ、蓮華先生。何か狙ってるんじゃないかな」

愛由美がモニターから、蓮華に顔を向けて言った。そのお陰か愛由美の鼻先をかすめて光のムチが外れる。

ムチの向こうでは、千佳がお仕置きの回し蹴りを柚希菜に食らわせていた。

モニターには駅前の地図が映し出されている。

「あそこは……」

魔優子の目がモニターに釘づけになった。

駅前の商店街。記憶に間違いがなければ、あれはS.I.V.の帰りに見つけたアクセサリー屋だ。思わず引き寄せられた店だ。

誰かに買って欲しいと思ったアクセサリー類。その店に光助がいる。その事実が更に魔優子の胸を締めつける。

「てか、ここ知ってる！ 女子ウケするアクセ屋さんだね？ えっ？ やっぱり、何か話が進んでいるの？」

愛由美が自分の発見の意味に驚いて思わず魔優子の方を向いてしまふ。

「——ッ！」

その魔優子が心臓が痛んだかのように、とっさに胸元を押さえた。

「苺田さん宛のプレゼントかもね」

「ちょ、ちよつと、蓮華先生。そんなはつきりと……」

「自分の恋に向かい合ってる娘が、きちんとその思いに報いてもらえるかもしれないのよ。いいことじゃない？ 何を遠慮するの？」

「いや、確かにそうだけどさ……」

「逃げ回ってる娘より、よっぽど応援してあげたいわ」

「ちょ、蓮華先生。そこまで言う必要は……」

「……」

魔優子が視線をそらした。

「……」

千佳が苛立たしげにその姿を横目で見る。

そんな千佳を柚希菜がニヤニヤしながら見守った。

「いや！ でもいいな！ アクセ！ 愛由美ちゃんも、誰かにプレゼントされたいな！」

愛由美が再度悪くなり始めた雰囲気を感じ取ったのか、殊更はしやぐように口を開いた。

「あら、アクセなんか興味あるの？ 愛由美」

「おっ、カナちゃん。バカにしてるな？ 愛由美ちゃんだって女の子。

プレゼントは欲しい！ 年がら年中欲しい！ そしてどうせなら、キラキラ輝くかわいい小物の方が――」

「換金性が高いから、大好きだって言っていました」

「コラッ！ キュウ！」

「那奈です！」

「愛由美。モニターにもう一個反応があるわよ」

蓮華が身を乗り出してモニターを指差した。

「あ、ホントだ。もう一つ魔族反応あり――と！ こっちは苺田さんの家の近くだよね？ 苺田さんは家にいるのかな？」

「やっぱり二人は同時に狙われていると…… 同じ案件なのね」

「そ、そうかな…… 偶然かもよ……」

愛由美がチラチラと魔優子の様子を窺いながら言葉を濁して蓮華に応えた。

蓮華がモニターから顔を上げる。そのまま見つめたのは魔優子の顔だ。

「……」

魔優子はまだ視線をそらしていた。

「いずれにせよ出勤よ。加奈子と唯は苺田さんをお願い」

「オッケー！」

「快諾。まかせて。快諾」

「チームブライドとチームキューピッドで五條くんのところに行くわよ」

「了解ッス」

「分かったわ……」

「……」

魔優子だけが応えない。

「愛由美、おふざけなしで留守はまかせたからね。那奈は思念の中继をお願い」

「任せて、蓮華先生！」

「分かりました」

蓮華の言葉に皆がそれぞれにうなづき返事をした。

蓮華が率先して出口に向かった。皆が続く。だが魔優子だけが立ち止まったままだった。

その魔優子を――

「ほら、いくわよ……」

千佳が腕を掴んで連れ出した。

駅前の商店街。ビルの谷間の陰から四人のキューピッドが半身を乗り出していた。

いや、正確には三人だ。蓮華と千佳と柚希菜がビルの向こうの様子を窺っている。蓮華と千佳は真剣に、柚希菜は楽しげに。

だが魔優子だけはビル陰に隠れたままそちらを見ようとしていなかった。

「お？ 出てきたツスよ」

「えっ？」

柚希菜の言葉に思わず魔優子は振り向いた。先程までとは打って変わりぐつと身を乗り出す。

「むむ？ やっぱり何かプレゼントみたいツスね」

ちょうどアクセサリー店から出てきた光助は、店のロゴの入った小さな紙袋を手持っている。心なしか顔が上気しているように見える。そしてかなり嬉しそうにも見えた。

「何よ…… 嬉しそうな顔して…… 何買ったのよ…… 誰によ……」

その様子に魔優子が小さく呟く。

「あれは、魔族ね……」

光助が外に出たところで、女性の店員が見送りに出た。その店員を見て蓮華が呟く。

「魔族？ どうして？」

千佳が疑問に口を開く。

「そうだね。魔族が店員になりましたすましていたのなら、プレゼントの購入に手を貸したことになるわね。どちらかと言うと恋の破綻を企んでいるというよりは、仲を取り持つているようにも見えるわね」

「それじゃ、魔族の目的に合わない……」

「多分、魔族の罠ツスよ。プレゼントを開けたら蛙か何かが飛び出

して、二人の仲は結局は破局——グワッ！」

「黙れ」

千佳の正拳が、柚希菜の脇腹にえぐり込まれた。

「——ッ！」

柚希菜の悲鳴か。千佳の正拳か。どちらかに気がついたのか、女魔族が魔優子達の方に振り向いた。

「気づかれたわ！ 魔優子ちゃん、千佳、柚希菜！ 気をつけて！」  
「こそこそしてないで出てきたら。キューピッドの皆さん」

女魔族が不敵な笑みを浮かべた。よく見ると先程のS I V騒動の時の魔族だ。

「キューピッド？」

女魔族の言葉に、その場を去りかけた光助が振り返った。蓮華がまず姿を表す。千佳と柚希菜が続いた。魔優子は物陰で躊躇する。

「ほら。しっかりする……」

千佳が魔優子の手を引いて、ビルの物陰から引っぱり出した。

「眉っ娘……」

光助が呟く。

「……」

魔優子は目を合わせられない。

「光助くん！ ダメよ！ 下がって！」

事情が呑み込めないのか、光助は無警戒に女魔族の下に戻ろうと近づいてきた。その様子に気がついた蓮華が叫ぶ。

だが遅かった。光助は女魔族の横に既に並んでいた。

「はい。あらためて自己紹介させてもらっわ。気前のいい値引きで、あなたのお買い物をお手伝いした、気のいい店員さんは仮の姿……」

女魔族が気さくな感じで光助の肩に右手を回す。

「なっ！」

女魔族のそのあまりに馴れ馴れしい態度に、魔優子は声と眉を上げた。

「な……」

光助も一瞬で浮かんだ鳥肌とともに声を上げる。

女魔族の手の感触はあまりに冷たい。人の温もりが、生命の燃焼が感じられない。

先程まで気軽に買い物の相談に応じてくれた店員。それが何か急に別の存在に感じられたのだろ。どっと光助の体中に冷や汗が湧き上がった。

「何だ？ 何だこの力？」

光助は逃れようと反射的に身を振ったが、肩に回った女魔族の腕はビクともしなかった。

「魔族……」

蓮華が苦々しげに呟く。光助が人質にとられたのだ。

「そう！ 私は魔族！ 清く、悪く、美しく！ あなたの心の隙のパートナー！ 魔族よ！」

女魔族が声だけは陽気に言った。

「さっき会ったキューピッドの皆さんね？ まだ名乗ってなかったわね。そうね…… 私の名前は……」  
マドカ  
円！ 円・キャリー・トレー

ド！ マドカって呼んで！」

マドカと名乗った女の魔族は、飛び跳ねんばかりに喜んでいる。自分で名づけた名前が気に入っているようだ。

「あからさまに偽名じゃない」

「いいじゃない！ 人の勝手でしょ！ まあ、私は魔族だけどね！」  
「何だ？ ま？ 魔族？」

光助がキューピッド姿の一団と、ただの店員のはずの女性を交互に見やる。嬉しげにはしゃぐ魔族の顔はあまりに近い。思わず顔が赤くなる。

「何赤くなってるのよ！」

「知るか！ 俺は顔が赤くなりやすいんだよ！」

「どうだか？ 鼻の下まで伸ばしちゃって！」

「お前には関係ないだろ？ 眉っ娘！」

「何ですって！」

魔優子の非難の叫びに光助が叫び返し、これまた魔優子が叫び返す。

蓮華がその様子にクスクスと声を殺して笑った。

「魔族…… 恋の破綻をもたらすもの……」

「えっ？ でも……」

千佳の呟きに光助が戸惑う。

「『恋の破綻』？ 後押しじゃなくって？ いい感じの商品選んでくれたんだけど、この店員さん」

光助が手に持っていた手提げ袋を思わず持ち上げた。

「あ、後押しって、何よ？ いい感じの商品って、何のことよ？」

魔優子が眉をつり上げる。

「だ、だから！ ま、眉っ娘には、関係ないだろ！」

「何ですって！」

往来のど真ん中で、怒鳴り合う二人。片やキューピッドの少女。片や年上の美女に肩を抱かれている少年。道行く人は興味深気に、そして遠巻きに通り過ぎていった。

「『恋の破綻』？ 失礼ね。意を決して足を運んだおしゃれなお店。そこで己の場違い感に、罪悪感すら感じている様子の高校生男子」

「なっ？ 俺のことか？」

「そう！ そんな初々しい男子に声をかけ、目的から予算からすべての相談に乗った親切な美人過ぎるカリスマ女性店員さんがこの私よ」

「自分で美人過ぎるとか、カリスマ店員とか言ってるじゃないわよ」  
蓮華が苦々しく突っ込んだ。

「五條光助くんは、ほくほく顔で店を出たわ。可愛いわよね。恋愛に不慣れな、ウブな高校生男子は！」

「こ、こら！ 必要以上にそんなとこ強調すんな！」

「それに、いいプレゼント買ってもらう為に、どんなけ値引きしてあげたと思ってるのよ。思い出して欲しいわね、五條光助くん」

「どんなけツスか？」

柚希菜が至極真面目に質問をした。かつてない深刻な顔をしていた。

「グ……」

そんなところに食いつくとは思わなかったのか、千佳は柚希菜的な外れな質問に突っ込みが遅れた。

「ゼロを一個削ったわ…… 大赤字ね……」

女魔族は眉をひそめて、いかにもさすがに苦しい、痛恨という顔をしてのけた。

「ま、勝手に入り込んだお店が、どんなに赤字でも私には関係がないけどね！」

「羨ましいツス！ グワツ！」

素直な感想を口走る柚希菜に、千佳が二言分の威力を込めたような強烈な回し蹴りを放った。背中を蹴られた柚希菜がその場でのけぞる。

「魔族…… あなた達の目的は、人間の間に負の感情を蔓延させること…… 読めないわね。何が目的なの？」

蓮華が一瞬の隙も見逃すまいとしてか、一際目を細めてマド力を睨みつけた。

「あら私はこの子の恋の成就にきたのよ。勘違いしないで」

マド力が不敵な笑みを浮かべながら答える。

「—— ツ！ まさか！」

蓮華が何かに気づいたのか魔族の言葉に反応した。

「何を言っている。お前達魔族が、そんな…… 殊勝なことをする訳がない……」

千佳が抑揚を押し殺した声で言った。だがいつもと違い抑揚を押しさえることに失敗している。千佳も何かに気がついたようだ。

「そう思う？ いいわ。人の期待を裏切るのって最高！」

マド力は嬉しげに身震いした。そして懷から何やら、チケット大の大きさの紙片を取り出した。

「ジャーン。これ何だ？」

マドカが得意げに紙片を見せびらかした。もちろん光助からは手を離さない。

「それは…… 手形？ やっぱり…… 約束手形ね？」

蓮華が悔しそうに魔族を見つめる。千佳も一つ息を呑んだ。

魔優子は状況が分からず蓮華と魔族を見比べる。

「手——グッ！」

柚希菜が一言話し出そうとした瞬間に、千佳に拳を叩き込まれた。右肺に入った一撃は柚希菜から言葉の自由を奪う。無言の一撃だった。

「容赦ない…… 容赦ないツスね…… 千佳ツチ…… 確かにつまんないこと、言おうと思ってたツスけど……」

柚希菜が痛みにこらえながら身を振った。

「そうよ。私達頼まれたのよ。この手形を割り引いて欲しいって。

苅田英里奈からね」

「何てこと…… 手形割引を利用するだなんて……」

蓮華が齒がみをした。

「手形？ 割引？ 何のこと？」

魔優子が眉をひそめる。

「魔族による手形の割引よ」

蓮華は魔族から目を離さずに言った。

「何か得になるの？ 何で割引の話がでてくるの？」

「自分が損をする方の割引なのよ」

蓮華が真顔で答えた。笑顔を作る余裕もなくしているようだ。

「損をする方？ 話が見えないんだけど？」

「成就前の恋愛をいち早く叶えてもらうのよ、魔優子ちゃん。本当は何日とか何ヶ月とかかかる成就までの——人によっては何年もの

——期間をすっ飛ばして先に、幸せだけ成就させるのよ。その際早めに実現する見返りとして、本来発生するであろういい思いを、少し割り引いて報酬としていただくから『割引』と言われているわ」「えっと……何か聞きたくない話のような……」

魔優子が戸惑いがちに応える。

「成就までの苦労は後回しになるわ。成就後の喜びや達成感を先に現実化するの」

「へえ……」

「本来の期日までに待ち切れない人の為の制度ね。受け取る喜びを間引かれるから、本当は損なのよ。でも待ち切れない切羽詰まった人は、利用せざるを得ないわ。普通は正当な機関に割引を依頼するものなのに……いきなり魔族に持ち込むなんて……」

蓮華は女魔族を見た。魔族は嬉しくって仕方がないという笑みを浮かべている。蓮華とは正反対の、この世の悪意を喜ぶ笑みだ。

「なるほど……魔族から話を持ち込んだのね……何も知らない高校生に……」

「どうなるの？」

魔優子は蓮華のらしからぬ深刻な口調に、思わず眉をひそめて訊いてしまう。

「問題なのは、払えない場合の取り立てね……魔族による取り立ては苛烈よ。それにその恋愛がもとより成就しないものだったなら——不良債権だったなら……依頼した本人から取り立てるわ……」

合法的なところに割引を依頼したのなら、取り立ても常識の範囲内なんだけど……魔族の割引は違うわ。下手をすれば命までとられかねない……『デスカウント』と言われているわ……」

蓮華の説明に、マドカが舌なめずりをする。

蓮華の言わんとするところを想像し、思わず顔に気持ちが見れたのだろう。

「そつよ私達は違うわ。払ってもらふものは払ってもらふ。たとえ地獄の果てまで追いかけてもね」

「——ッ！」

マド力の視線にさらされ光助の全身を寒気が襲う。

「何だこれ…… 凄い寒気が……」

「本能が危機を悟っているのよ、五條光助くん」

「な……」

「まあ、いいじゃない。それに『地獄の果てまで』って言っても、むしろそこが私達のホームだし。歓迎するわよ」

マド力は殺気を一瞬で引っ込めた。その瞬間だけ見れば邪気のない笑みを浮かべる。

「さて、この手形分かる？ 五條光助くん」

「何だよ。知らないぞ」

光助は震える声を何とか絞り出し、マド力がヒラヒラと振る目の前の見慣れぬ紙片を凝視した。

「手形ってのはね証文みたいなものね！ そしてこの手形はね『確かにあなたに気があります。いついつまでにちゃんと気持ちに応えます』っていう、約束を交わした際に発行するものよ！」

マド力は殊更嬉しそうにはしゃいだ。

「なっ！」

魔優子が声を上げる。もちろん一緒に眉も上がる。

「えっ！」

光助も大声を出す。

「身に覚えがないぞ！ そんなもの！」

「何を言ってるのよ？ しっかり手形に光助くんの名前が書いてあるじゃない」

「なっ！」

「氣があります！ 気持ちに応えます！ って、誰によ！」

「違う違う！ 俺は知らないって！」

「男らしくないわね、五條光助くん。この手形の振出人はね——義務を履行する人はね。もちろん五條光助くん。そして受取人は——」

マド力は嬉しくて仕方がないと言わんばかりに、はしゃいで手形

を振り回した。

目の前のキューピッドの一人が必要以上に動揺しているからだろう。マド力は意地悪な顔をして続ける。

「受取人は苅田英里奈さん。私達の依頼主！」

「そんな……」

魔優子は膝から崩れ落ちそうになる。だがかるうじて耐えた。

「五條が苅田さんに『気があります』…… 『気持ちに応えます』

…… ってこと？」

突きつけられた現実には、魔優子の頭の中が真っ白になる。

「これは正当な業務よ。人の恋路の邪魔しないで下さる？ 恋のキューピッドの皆さん！ 特にその——眉毛な女の子ちゃん！」

マド力は高らかに笑い出す。

「あはは！」

そして光助を掴む手に力を入れると宙に浮き始めた。

「魔優子ちゃん。とにかく魔族が絡んだら、まともな恋愛とは言えないわ。まずは魔族を追い払うことよ。その後はどんな結果が待っているとも…… 受け入れないと」

蓮華が力なくうつむいた魔優子に話しかける。

「この」

光助は空中で暴れた。マドカに手を離されたら離されたでそれは危険だ。だがそうだと分かっているても、何処まで連れて行かれるのか分からない恐怖が先に立ったのだろう。

しかしマドカはいくら暴れようとも光助を離さない。

「何だ、これ？ まるで万力じゃないか？」

「ふふん。私が魔族だって、信じてくれたかしら？」

二人は十メートル程浮いたところでやっと止まる。通行人がざわめいた。

蓮華は女魔族を見上げた。

「魔族は逃げる気ではないようね。でもこちらも、いつまでも地面にいる訳にはいかないわ。その為には魔優子ちゃん——」

「……」

「しっかりして。そんな様でどうするの？」

「だって……」

「よく考えて魔優子ちゃん。まだ光助くんの気持ち聞いてないでしょ？ 確かめてないでしょ？ ちゃんと気持ちは伝えあわないと、ね」

「気持ち……」

魔優子は光助に向かって顔を上げた。だが真っ直ぐに顔を見られない。光助も同じようだ。

「気持ち？ 何言ってるの今更。手形は——証拠の文書は、ここにあるじゃない。カフェでのあの日。そう、五條光助くんが真っ赤な

顔で苅田英奈を見たあの日！ 家に返ったら鞆の中に入っていたそうよ。苅田英里奈はそれだけでもう、運命感じまくり！ 二人は運命の赤い糸で結ばれているのよ。他人の幸せの邪魔しないでくれる！」

マド力はとても嬉しそうだ。光助の首に手をかけたまま空中で飛び跳ねている。

「『赤い糸』とか、『他人の幸せ』とか…… 魔族が言うか……」

「何？ 悪い？ 半目ちゃん？」

こちらを睨みつける千佳にマド力は軽薄な笑いを浮かべて応える。何を言われても平気。気にしない。正義感が空回りしている目の前のキューピッドが哀れで仕方がない。顔がそう物語っていた。

「そ、そいつが、そんなに…… ももも、もてる訳がない——じゃない！」

魔優子が気丈にも声を上げた。そして言い切ることに失敗した。

「……」

蓮華が魔優子を見た。呆れている。千佳も柚希奈もマド力も、呆れて魔優子を見ている。

キューピッドと魔族の気持ちが奇跡的に一致した。

「あなたがそれを言うの？ 眉毛ちゃん？」

「なっ？」

驚く魔優子の横で、蓮華が笑いを押し殺していた。

「何ならそのキューピッドの矢で射つたらどう？ 苅田英里奈を連れてくれば五條光助くんの目は、彼女に釘づけになるはずよ」

「何だ？ 釘づけ？」

「あら知らないの、五條光助くん？ あのキューピッドの矢で胸を射られると、意中の人から目が離せなくなるのよ。卑怯な力よね！ で、あなたなら苅田英里奈に釘づけ！ 見てられない程見つめ合って結構よ！ 私が許すわ！」

マド力が高らかに笑い出した。

「俺は別に…… 苅田のことは……」

マドカの笑い声にかき消されそうになりながら光助が呟く。

「へっ？」

魔優子が信じられないといった顔で光助を見た。光助は顔を真っ赤にしている。光助は魔優子と目を合わさないようにか顔をそらせていた。

「何？ 五條光助くん？」

「だから…… 俺は別に苅田に気なんてない……」

光助は魔優子の顔が真っすぐ見られない。自分で地雷原に踏み込んだようなものだ。『じゃあ誰に気があるのよ？』とでも聞かれたら、どう答えていいのか分からない。

「じゃあ誰に気があるのよ？」

マドカが訊いた。恐れていた台詞そのままだ。まるで見透かされているかのようだ。

「そ、それは……」

「あなた昨日のカフェで苅田英里奈を見て、顔を真っ赤にしてたそうじゃない。本人から聞いたわよ。苅田英里奈はあの日、家に帰って鞆を開けてみたらこの手形が入っていたんだって」

「——ッ！」

魔優子の心臓が強く一拍する。

「あの時だ……」

魔優子は胸が締めつけられたのか、その胸元をとっさに両手で押さえた。そのまま苦しい表情でうつむいてしまった。脳裏に浮かんでいるのは、昨日英里奈を見かけて真っ赤になっていた光助だろ  
う。

「あれが恋する顔じゃなくてなんなの？ あんな思わせぶりなことしたら、約束手形が振り出されて当然よ。男なら責任取りなさいよ」  
マドカが鼻で笑った。

そしてちらつと、手形の受取人——義務を受ける人の名前を盗む  
見する。その欄は無記入だった。

「ま、いつか。無記入でも手形は通用するしね…… 教えてあげる

義理はないわ……」

マドカが一人でほくそ笑む。

「あれは…… 苅田を見て赤くなっただんじゃなくって…… その、眉っ娘が……」

「へっ？」

光助の口から自分の名前が出て魔優子が顔を上げる。

「何？ 聞こえないわよ、五條光助くん！」

「何でもねえよ！」

「あつ！ ひょっとして、あの娘なの？」

マドカが不意に地面を指差す。真っ直ぐ伸ばされたその指に魔優子の心臓は破裂しそうになる。

だが――

「あたしッスか？」

「えっ？」

マドカに指を差された柚希菜が、暢気に自身も指を差しながら聞き返す。

そんな柚希菜を魔優子は驚きに眉を上げて見た。柚希菜が指差される意味が分からないのだろう。

「黙っていれば美人とは、よく言われるッスよ。でも黙ってるなんて、できないッスね。あと、デートはいつも必ず甘いものコースでお願いするッス。映画よりパフェ。夜景よりチョコ。甘い口づけよりも、甘い口溶けッス！ ぶっっちゃけ色気より食い気ッス！ それでもよければ、おつき合いも――」

「ち、ちが……」

「違うの？」

マドカがおかしいわねと言わんばかりに、小首を傾げた。

「傷つくッスよ！」

特に傷ついた様子も見せず柚希菜は嬉しそうに笑う。

「じゃあ、あっちの半目ちゃん？」

「今日が初対面よ……」

次に指を差された千佳がすこみを利かせてマド力を睨み返す。突然の話の展開に調子に乗る柚希菜を黙らせるのを忘れた。その分の怒りもマド力にぶつけているようだ。

「ちょ、ちよっと……」

魔優子は千佳とマド力を何度も交互に見比べてしまう。自分が柚希菜や千佳より、後回しにされる理由が分からないのだろう。

「何よ。あの娘も違うの？ 分かった。面食いね光助くん。あのシンメトリーな美人ちゃんね」

「……」

指を差された蓮華は、黙ってマド力を睨みつける。殺意すらこもっているかのようだ。

「おお、こわ…… 怖いわあなた。まるで人の間に入れられるのが、不都合みたいね……」

マド力が身震いをする。蓮華の気迫に怯えたようにわざとらしく大きく身震いし、それでいて顔に恍惚の笑みを浮かべる。

「いいわ…… 人間を超えたものの敵意。強烈な負の感情ね。歓喜に溺れそうよ……」

「何よ！ 適当に指なんか差しちゃって！」

「適当？ 何言ってるのよ、眉毛ちゃん。ちゃんと可能性の高い順に指差したわよ」

「なっ？」

「でももうネタ切れね。この中には、恋人候補なし」

「ちょ…… 一人残ってるじゃない！」

「え、何？ 自分だつての？ 眉毛ちゃん？」

「えっ？ そ、それは……」

「どうなの五條光助くん？ 眉毛ちゃんなの？ 光助くんの好きな娘って？」

「えっ？ ちが…… 違う違う！ 眉っ娘は、ただの友達……」

光助はその指摘に、思わず激しく首を振ってしまう。

「ほら！ やっぱりそうじゃない！」

「……」

胸が痛んだのか、魔優子が胸元を押さえて顔をそらした。

「あっ！ 眉っ娘…… その……」

「さあ、五條光助くん！ そのプレゼント。 苅田英里奈に届けにいきましよう！」

「——ッ」

その言葉に魔優子の胸がまた痛む。 魔優子は痛む胸に手をやり思わず光助を見上げた。

相手を見ていたのは光助もだった。

その光助の目に飛び込んでくる相手の不安気な顔。

「——ッ！ 違う！ このプレゼントは——」

光助が叫ぶとマドカの手の中で突然黒煙が舞い上がった。

マドカの手の中で手形が突然煙を上げる。だが一瞬火の手で手形が包まれたかと思うとすぐに鎮火した。手形の表面が真っ黒になっている。焦げた匂いが辺り一面に漂う。

「何だ？」

光助は目の前で突然上がった黒煙に目をしばたかせた。

「あら焦げついちゃった。困ったわね。でも、振出人から取り立てられないのなら、やるべきことは一つね。業務連絡しなくっちゃ」

マドカがさして困ったようには思えない口調で言った

「えっ、何？ 何が起こったの、蓮華？」

魔優子がマドカの手元と、蓮華を慌てて交互に見る。何が起こったのか分からないようだ。蓮華なら説明してくれると思ったのだろう。

「不良債券化したのよ。魔優子ちゃん。英里奈さんの手形が焦げついたの」

「どういうこと？」

「英里奈さんの思いに、光助くんは応えないってことよ」

「そ、それじゃあ！」

魔優子は驚きと期待に眉を上げて光助を見る。光助も魔優子を見ていた。

「ななな、何だよ！」

「そ、そっちこそ！ ななな、何よ！」

耳まで真っ赤な光助に、期待のこもった眼差しの魔優子。二人し言葉に詰まり合った。

「魔優子ちゃん！ 皆！ 飛ぶよ！」

魔優子に元気が戻ってきた。それを好機と見たのか蓮華が叫ぶ。

蓮華が先頭を切って宙に浮き始めた。少し遅れて千佳の体が浮く。魔優子と柚希菜が続いた。通行人がその様子にどよめいた。

先に宙に浮き始めた千佳をあつという間に追い越し、魔優子は蓮華の高さに追いついた。

「お先ッス！」

反応こそは早かった千佳。だがその飛び方は何処から見ても力ない。なかなか高度の上がない千佳の横を、柚希菜がニヤニヤしながら追い越した。

「後で、殴ってやる……」

千佳は空中でじたばたしながら拳を握る。

「ホント、千佳ッチはキューピッドの力が苦手ッスね」

「うるさい！」

「恥ずかしいからって、暴力的になるのはどうかと思うッスよ！」

「黙れ！」

「さて。振出人からは回収不能と…… 割引依頼人—— 苅田英里奈から回収しないとね」

マド力が不敵に笑う。それはそれで楽しそうだった。キューピッドがマド力達と同じ高さまで上がってくる。

「な、何よ！ もとより間違いなんでしょ？ 無効よ！ あきらめなさいよ！」

魔優子が叫ぶ。少し調子が戻ってきたようだ。

「何言ってんの眉毛ちゃん？ 私達は間違いで発行されたなんて知らない『善意の第三者』なのよ。こういう時の為にちゃんと『裏書き』してもらってるんだから。『焦げついた場合は買い戻します』っていう定約書もあるしね。『買戻しの義務』を履行してもらっわ」

「『善意の第三者』？ 『裏書き』？ 『買戻しの義務』？ て、言うか…… さっきから『眉毛ちゃん』って何よ！」

「私達はこれが間違いで発行されたなんて知らなかった。あくまで正当なものとして譲り受けた。悪意のない『善意の第三者』ってことよ。手形の形式が整っていれば、それはどんなに間に不正があっても有効なの。不正を知らずに手に入れた第三者には、正当なものとして扱う権利があるのよ。手形を振り出した人に、義務を履行し

てもらふようにする権利があるの。そうしとかないと、手形というシステムが成り立たないもの！ 善意の第三者が損するもの！」

マド力は『眉毛ちゃん』への抗議をあっさり無視し、はしゃぐように説明を続ける。

「悪意がないというだけで『善意の第三者』。それも私達魔族に適用されるのよ！ 皮肉よね！ 楽しいわ！」

「蓮華……」

魔優子は困ったように眉を寄せ蓮華を見た。

「……」

蓮華が黙っている。否定できないのだろう。

「そして手形が焦げついたら、裏書きをしている割引依頼人に買い戻してもらふのよ。裏書きはこの場合、保証の为一筆みたいなものね。保証の为一筆を入れて約束しているから、買い戻しの義務があるのよ。だから割引依頼人の苅田英里奈に買い戻してもらえさえすれば、私達は困らないわ。まあ、先に手に入れた幸せを使っていなければね——」

マド力は得意げにキューピッドを見回す。そして一度言葉を区切った。

「少しでも使っていて買い戻し切れないなら…… 楽しみだわ……」  
マド力は一転して邪悪な笑顔を浮かべて言った。

「私達魔族は経験上知っているわ。実現まで待ち切れなくて、多少損をしてでも幸せを手に入れるのが手形割引よ。依頼人は切羽詰まっていたり、自分の欲に負けた人間。手に入れた幸せを味わっていないはずがない。だから買い戻しできる人間は少ないの」

マド力はその経験上のことを思い出しているのか嗜虐的な笑みを隠しもせず続ける。

「取り立てって楽しいのよ。泣いて許しを請う時の顔ったらありやしないのよ。どんなに日頃いい娘ちゃんぶっててもダメ。人間の弱さが出るの。醜いのよ。汚いのよ。浅ましいのよ……」

マド力は身震いした。歓喜の身震いだ。

「悲壮。絶望。負の感情…… ああ、魔族稼業様々だわ。ゾクゾクしてきちゃった。ねえキューピッドなんか辞めて、私達と一緒に追いつみにいかない？ はまること請け合いよ。人間の壊れるところ見てみたくない？」

マド力は恍惚として続ける。

「ななな……」

その様を間近で見ている光助は、そのあまりに邪悪な笑みに身震いを禁じ得ない。

「黙れ！」

千佳が不快感も露に叫んだ。

「何で？ 人間の弱さこそ魔族の喜びよ。その喜びに浸って何が悪いの？ まあ、もう別働隊が彼女の下にいつてるんだけどね。残念だわ。女の子からの取り立てって格別なのよね。ああ、思念送つとなくなつちゃ。回収よろしく！」

「そんな。苅田さんが……」

「人のこと心配している余裕があるの？ 眉毛ちゃん？」

「そんなことさせないわ！」

魔優子が力を込めて弓を握る。

女魔族は蔑んだ笑みでそんな魔優子を見た。

「人間が憎悪を私達に向ける。それ自体が私達魔族にとっては喜びよ。憎しみて世を覆うのが魔族の使命だもの。憎しみの対象自体が、私達魔族でもまるで構わないわ。むしろ嬉しい程よ。ありがとう眉毛ちゃん」

「な……」

「大丈夫。落ち着いて、魔優子ちゃん。あの魔族が話しているのは、支払えなつた時の話よ。英里奈さんはまだまだ若いわ。いくらでも幸せを掴むことができるわ」

熱くなりかけた魔優子に、蓮華が諭すように言った。

「それに向こうには加奈子と唯がいるわ。大丈夫よ」

蓮華が力強く続ける。

「蓮華？ あたしよ。加奈子よ。苅田英里奈さんは無事保護したわ」  
その加奈子の思念が魔優子達の脳裏に届く。

「間に合った？」

魔優子が訊いた。自分の脳裏で思い浮かべるだけで、那奈が中継してくれて相手に届くと聞いていたが、慣れないので思わず声にも出してしまつようだ。

「間一髪よ…… あたしのムチの方が速かつたわ…… たまには女の子を縛るのも、いいものね……」

思念の中だというのに加奈子の声は息が荒いようだ。それだけ余裕がなかったのだろう。

「歡喜！ 魔族は撤退した！ 歡喜！」

唯が思念に割り込んでくる。普段からは想像もつかない、嬉しそうな思念だった。

「男の魔族が一人そっちにいったわ。あたし達はもう少しこつちで様子を見るから」

加奈子の思念が落ち着いた。当面の危機は去ったと、やっと安堵できたのだろう。

「英里奈さんはどう？ 状況を説明してあげてね。魔族の追い込みを追い払っても、債務そのものは消えていないわ。英里奈さん自身の環境はまだ予断を許さないからね」

蓮華が思念だけで加奈子に呼びかける。目の前の女魔族に情報を渡さない為にか、思念の中だけで話し口には出さなかった。

「……」

マド力は魔優子の『間に合った？』の言葉の意味を考えているようだ。

「確信！ この人モテモテ！ 取り立てられても問題ない！ 確信！」

唯の思念から喜びが漏れて伝わってくる。日頃は出てこないだけで、込めているはずの『！』『？』が溢れ出る。それは思いを直接つなぐ思念が直に感情を伝えるからだ。

唯は本当は日頃から全力で感情を込めて話している。それでも顔や仕草に出ないのだ。そのことが、唯の内面の感情が、不器用と言うタガが外された思念ではよく分かった。

「債務分は持つていかれちゃったけど、本人は大丈夫よ。安心して」  
「そう…… 気をつけてね」

蓮華がマド力を見た。後はこちらの問題だけだ。

「チツ……」

マド力が舌打ちをした。魔優子の言葉と蓮華の視線。別動部隊は失敗した——それを悟ったのだろう。

「キヤーツ！」

思念を終わらせようとする蓮華と魔優子の頭の中で、加奈子の悲鳴が響いた。

「何？」

魔優子はやっぱり声に出して問いかけてしまう。

「ゴメン驚かして…… この娘…… 英里奈さがん急に抱きついてきて」

「へっ？ 何で？ 何で苅田さんが抱きつくの？」

魔優子がこれでもかと眉をひそめた。

「興奮！ 『お姉様』とか言ってる！ 懐かれた！ 興奮！」

「そう…… 気をつけてね。まあ、色々な意味で……」

蓮華が最後にもう一度思念でそう伝えた。

「情けないわね。これだから男つてのは信用ならないのよ」

マド力が毒づいた。苛つきが顔に表れていた。しきりに舌を鳴らしている。

「あきらめろ」

千佳が感情を押し殺した声で言った。半目がいつもの眠たげなものから、覚悟のそれに変わったようにすら見える。

「あら、もつと感情を表に出したら？ 半目ちゃん？」

「お前らは人の感情につけ込む。これぐらいがちょうどいい……」

「ふん。本当は、感情をむき出しにして、傷つくのが怖いんじゃないの？」

「な……」

千佳がギリリと奥歯を噛んだ。

「やればできるじゃない」

「く……」

「そうよ！ あきらめなさいよ！」

千佳の言葉に触発されたのか、魔優子が魔族に向かって叫んだ。

「あきらめる？ ダメよ！ 人間、簡単にあきらめちゃ！ 私、魔族だけど！」

「何を！ あきらめるツスよ！」

千佳のすぐ隣りで柚希菜で叫ぶ。

「——ッ！」

叫ぶや否や柚希菜は殴られる為にか目をつむって身構えた。それでいて殴られやすいように、脇腹のガードをわざと開いていた。

むしろ『さあ、ここだ』と言わんばかりに、その脇腹は千佳に向けられていた。顔は少し嬉しげだ。

「何してる？」

千佳は柚希菜のわざとらしい姿勢に、内心ため息を吐いた。

「あれ？ 殴らないツスか？ 魔族にあんまり話しかけると、いつもなら鉄拳制裁ツスよ？」

「別に……」

千佳はそう呟くと隣りで尚も魔族に文句を言っている魔優子を見た。魔優子は感情も露に魔族に食ってかかっている。

「……」

千佳は複雑な顔でその様子を見つめる。

「うらやましいツスか？」

「黙れ」

「ほら。前に集中する」

蓮華のその声を合図にしたかのように、遠くの方から風を切る音がした。

それは不快な振動をはらむ音だった。

マドカの横に男の魔族が降り立った。新しい魔族もビジネススーツに身を包んでいる。

装いはすべて闇——そう思わせる黒づくめだった。上下のスーツから始まり、シャツ、ネクタイ、靴下、靴すべてが黒一色だ。髪も黒い。こちら闇を思わせる黒だ。

肌は逆に白かった。まるで黒と白を互いに際出せる為の配色にも見えた。

そして目だけが異常に赤かった。白目も黒目もない。すべてが赤だ。血の色だった。

「失敗したんだって？ 情けないわね」

マドカが小馬鹿にした笑みを浮かべて言った。

「うるさい。身柄の拘束に失敗しただけだ。債権そのものは回収している」

男の魔族は掌を広げた。光の固まりがその中で輝いている。

「まぶしいわ。鬱陶しいから早く処分してよ」

それは人間の正の感情の固まりとも言つべき光だった。

「ふん」

魔族は鼻を鳴らすと同時に光を握りつぶした。

「何？」

魔優子には何があったのか分からない。

「ああやって人間の愛情やら隣人愛やらを形に変えて、回収して処分してしまうのよ」

蓮華が憎々しげに言う。

「人々の間に出回る愛情を少なくしてしまうの。デビレを狙っているのよ」

「デビレ…… 確かに人間のいい感情を握り潰されるのは、いい気がしないわ……」

魔優子が呟く。

「じゃあ。撤収ね」

「いや…… 借りがある……」

男の魔族がマドカに伝えると魔優子を見た。魔優子と目が合った。

「魔優子ちゃん…… 服装は変わってるけど、チームブライトと一緒に一度は退けたあの魔族よ」

「ええ、分かってるわ」

「あのうつとうしいのは俺がやる……」

「血走った目をしてると思ったら、何？ 因縁の相手なの？ ま、いつか。勝手にすれば——それ！」

女の魔族が光助を後ろに放り投げた。

「げっ！」

光助の体が宙に浮く。近くのビルの屋上より高く舞い上がった。

そのまま落ちれば無事では済まない高さだ。

「光助！」

魔優子が叫ぶ。思わず久しぶりに光助と呼んだ。だがこの距離では叫ぶことしかできない。

「柚希菜！ 輪！」

「ウィッス！」

千佳の指示を、柚希菜が本能で理解した。天使の輪を宙に浮く光助に投げつける。

輪は弧を描いて飛び見る見る大きくなっていく。ビルに届く頃には巨大な天使の輪になっていた。

輪の一端が近くのビルの屋上の鉄さくに引っかかる。そしてちょうど上への減速が始まった光助の目の前で、輪の反対側が光っていた。

「掴まって！」

千佳は柚希菜が出した巨大な天使の輪が、光助の間近をかすめるのを見て叫んだ。

「この！」

光助は右手で先ず巨大な天使の輪を掴み、己の体を引き寄せて両手で掴み直した。

「掴んだ！」

両手で天使の輪を掴んだ光助が叫ぶ。だが出現した位置でほぼ水平を保っていた巨大な天使の輪は、光助の重量に負けて直ぐに斜めになり始めた。

「柚希菜！ 次！」

「分かってるッて！」

千佳の指示に柚希菜が応える。天使の輪は見る見る小さくなった。「と、この……」

勢いよく縮む天使の輪に、光助は必死で食らいつく。

一方を鉄さくに固定された輪は、ビルに向かって瞬く間に縮んでいった。天使の輪が元の大きさに戻り、光助は鉄さくに背中をぶつけながらも屋上に打ち上げられた。ビルはオフィスビルらしく、屋上に人はいなかった。

「痛てて……」

光助は背中をさすりながら上体を起こした。鉄さくから外れた柚希菜の天使の輪を、右手に掴んでいる。左手には手提げの紙袋を離さず持っていた。紙袋の底が破れている。

光助は慌てて上着のポケットに中身を移し替えた。

「光助！ 大丈夫なの？」

「お、おう！」

「あら残念ね。お持ち帰りしようと思ったんだけど……」

「お、お持ち帰り！」

魔優子が驚いて振り向く。

「地獄までついてきて欲しかったんだけどね」

マドカが楽しそうに言う。つまり殺すつもりだったのだ。

「この！」

「お前の相手は俺だ！」

男の魔族が笑みを浮かべる。魔優子に向かって飛んだ。

邪悪な復讐心にとらわれた笑みが、魔優子に向かって飛んできた。

「魔優子ちゃん！ 避けて！」

蓮華が叫ぶ。男の魔族は魔優子の天使の輪を気にする様子もなく、不用意に飛びかかってくる。他のキューピッドに目もくれず魔優子に肉弾戦を挑んできた。

「この！」

魔優子は叫ぶや否や体ごと右に避けた。

魔族は飛んでくる勢いそのままに拳を繰り出してくる。魔優子の体を紙一重でかすめて魔族がその横をすり抜けた。

「ははっ！」

攻撃を避けられたにもかかわらず、魔族は嬉しげに身を翻して更に拳を繰り出してくる。

「私は大丈夫！ 光助を！」

魔優子は次々と繰り出されてくる魔族の拳と蹴りを、空中で体を入れ替えてかわす。

光助はビルの屋上、鉄さくの外側に投げ出されていた。今まさに、自力で鉄さくを乗り越えようとしている。手でも滑らせたなら危ない。「分かったわ！」

蓮華が光助に向かって飛ぶ。

「人の心配…… 思いやりの心！ 反吐が出る！」

魔族が攻撃の手を止め、魔優子を睨みつけた。

その邪悪な視線に魔優子は思わず背筋が凍る。人の世を恨む憎悪の目だ。

「何が悪いのよ！」

魔優子は自分の中の恐怖を押し殺す為にか、魔族に向かって気丈に言い返した。

「人間など一皮むけば自分のことばかりしか考えない存在だ。ちょっと不安をあおってやれば、すぐ正体を現す。切羽詰まればどんな

ことでもする。感情の取り立てをする俺は知っているぞ！」

「あなたが悪い風にしむけるからでしょ？ 自分のひがみ根性をまず直したらどう！」

魔優子は弓を相手に向けて構えた。力強い光を発する矢が出現する。

「それだ！ 相手の気持ちを確認することのできる天使の矢。直接確かめればいいものを！ そんな力に頼る人間。弱い人間」

「そ、それは……」

「弱い！ 弱い！ 食い物にして何が悪い！」

「く……弱くって、何が悪いのよ！」

「ほざけ！」

魔族が空を蹴った。一気に距離を詰めてくる。

「この……」

魔優子はその勢いと距離に矢を放つことができなかった。

「じゃあ。私はあなた。私の楽しみを奪ったお仕置きよ」

マド力が空中で舌なめずりをしながら千佳を見た。

「あなた愛想ないわね。半目ちゃん。モテないわよ。男の子が振り向いてくれないわよ。まあでも恋愛関係はもとより疎そうね。もしかして好きな人もいないんじゃない？」

マド力が心底楽しそうな笑みを浮かべて殊更千佳を決めつける。

人間をからかうのは気分がいいのだろう。思う存分小馬鹿にしながらマド力は千佳の心の隙を探っているようだ。

「な……」

「あ、そうそう、いてもいなくても一緒か？ 愛想悪いものね。望みないものね。いつそ最初から、いない方がいいよね！」

「ぐ……」

マド力の挑発に千佳はつい感情的になって言い返しそうになったのか、耐えるように歯を食いしばった。

「ふん。お前ら魔族の言葉に耳を貸すものか。人の心を揺さぶるの

が魔族の手。耳を貸せば心の隙や、不安をついてくる……」

千佳は何処までも冷静に応える。

「あら、ご立派ね。感情を押し殺すのが得意のようね？　けどそんな人生で幸せ？」

「黙れ。負の言葉を投げかける魔族に、応じようなキューピッドなどいな——」

「何を！　千佳ツチにだって好きな人ぐらい、いるッスよ！」

そんな千佳本人の代わりに柚希菜が感情剥き出しで応えた。

「なっ！　柚希菜！」

「聞いて驚け！　隣りのクラスの男子——グワッ！」

千佳の天使の輪が、主の秘密を暴露しかけた柚希菜の顔面を襲う。今までにない会心の一撃だった。

使い方が間違っているのと、使う相手が違うのと、魔力ではなく腕力で放たれたのが、悔やまれる一撃だった。

「黙れ……」

千佳が顔を真っ赤にして唸る。息が荒い。目が血走っている。感情丸出しだった。

「その話聞きたいわ！　ガサツちゃん！　続きを！」

「黙れ！」

千佳が剥きだしの感情そのままに、魔族に向かって矢を放った。

「何？　狙ったの今の？　あなたひよつとしてダメな娘？」

明後日の方向に飛んでいく千佳の矢を見て、マド力があきれ顔で言った。

「そう言えば、半目ちゃん。さっきから飛び方がぎこちないわね。矢もダメなの？」

「何を！　千佳ツチにだっていいところはあるッて！　例の男子の前での不器用なアピール！　あの可愛らしさったら……　ああ！　皆様にお見せしたいッス！」

柚希菜が空中で立ち上がって叫んだ。友達を擁護する頼もしいその顔に、天使の輪の跡がくつきりつついている。

「うるさい！」

千佳が柚希菜に向かって矢を放った。次々と放つが、一本もまともに飛ばない。当たらない。

「あはは。可愛いわね！」

マド力が千佳に向かって飛んだ。

「とりあえず、もてあそんだんで瞬殺しようかな。悪く思わないでね」

「この！ しまった…… 天使の輪が……」

千佳が身構える。そう千佳は天使の輪を手放してしまっていた。よりによって味方にぶつける為に。

魔族の苦手な天使の輪を頭に戴いておけば、魔族もつかつに手を出せないはずだった。これでは身を守るだけで精一杯。失態だった。

「甘い！」

千佳がバランスを苦勞してとりながら、手を前で重ねて防御する

——その隙だらけの様子を見てマド力は笑った。

「千佳ツチ！」

柚希菜が千佳に向かって飛んだ。女魔族の手が千佳に襲いかかる

一瞬——

「おりやつ！」

その寸前に柚希菜が千佳の手を掴んででかつさう。

「速いじゃない！ それっ！」

マド力の手は空を切った。マド力は柚希菜の反応とその移動速度に嬉しそくに舌を巻く。そして気合とともに空を蹴り、逃げた獲物へと急旋回する。

「任せるツスよ」

柚希菜が千佳をつかまえながら急上昇する。千佳を安心させる為にか、柚希菜はとっておきの笑顔を友人に向けた。

千佳がその柚希菜の首にしがみつく。

「このまま飛んで！ 柚希菜！」

「オツケーツス！ どうするツスカ？」

「頼りにするわ。でも柚希菜の力なら、障害物の多い地上付近は避けないと。空の高いところがいいわ。魔族同士を引き離しみたいし……」

「了解ッス！」

柚希菜が千佳の体ぐらいはちょうどいいハンデと言わんばかりに、力強く天を目指した。

「それと……」

千佳が感情を押し殺した声で言った。それでも少し怒気のようなものが漏れている。

「何ッスか？ 千佳ツチ！」

柚希菜は千佳のその怒りに気がつかないようだ。暢気に返事を返した。おそらく気がついても多分同じような反応だっただろう。

柚希菜はデリカシーが少し足りない。失礼なことが多い。被害に遭うのはいつも千佳だ。

「何で——知ってる？」

『隣のクラスの——』のことだ。

「隠せてる——とでも？」

柚希菜が呆れて聞き返した。

「あの男子に対してだけは、千佳っちはいつも変ッスよ！」

「なっ！」

「いつも一緒にいるアタシには分かるッスよ。学校での千佳ツチは、魔優子ツチのことを笑える立場ではないッスね」

「ななな…… 黙れ……」

「バレてないと思ってるとは！ 流石のアタシも呆れて——」

「黙れ！」

千佳がしがみついていた手に更なる力を込めた。

「ダメッスよ！ 落ちるッスよ！ 暴れたらダメッス！ 首締めたら死ぬッス！」

力の限り暴れ出しあまつさえ自分の首まで締め出した友人と、柚希菜は空中でもみ合いになる。もみくちゃの軌道は、それでもマド

力を容易に近づけさせない速度を保っていた。

千佳と柚希菜はマド力を引き連れて、天高く舞い上がった。

「魔優子！」

光助が叫ぶ。宙に浮かぶ蓮華の手を借りながら、鉄さくの内側に降りたところだった。

魔優子は明らかに押されている。避けるだけで攻撃に転じられていない。

「光助くん。大丈夫ね。私はいくわ」

蓮華が身を翻す。一刻も早く魔優子の加勢にいかうとする。

「待ってくれ、吉祥院！俺にできることは？ 何かないか！」

「その気持ちだけで十分よ」

蓮華は光助を見る。本心からそう言っているのが、真っ直ぐな視線から感じられる目の光だ。

「あなたはよくやったわ。ありがとう」

蓮華は魔優子達を見た。チームブライドはマド力を引きつけて、空に舞い上がっている。

魔優子は魔族の攻撃をかううじて避けている。だが距離が取れないと弓が使えない。防戦一方だ。

「魔優子ちゃん！ 輪よ！ 輪も使って盾にして！」

蓮華は屋上の床を蹴って飛び上がった。

「こう？」

魔優子は右手に天使の輪を移動させた。魔族の動きが一瞬止まる。魔優子と蓮華が互いに距離をとったのが幸いした。

魔族は一瞬躊躇したようだ。どちらかの相手に気をとられればもう一方から矢で狙われるからだ。

蓮華は魔族のその隙を見逃さない。蓮華が空中で弓を構えた。

「くらいなさい」

蓮華が光の矢を射った。鋭い弾道を描いて魔族に向かって飛ぶ。魔族は体をそらして襲いかかる矢をかわした。かすつてもいない

のに、魔族のスーツから焦げた匂いがする。

蓮華は矢を連射した。魔族は次々とかわす。だが魔優子の側から離れない。

「この…… 魔優子ちゃんの近くから離れないつもりね。狙いにくいわ」

蓮華が表情を曇らせた。わざと魔優子の近くにいることで魔族は蓮華の狙いを狂わせているのだ。

「……」

だが魔族が蓮華の矢をかわしながら、横目で魔優子を見た。  
「？」

魔優子はその視線と意味に気がつかないようだ。

激しく位置を変える魔族が、魔優子の横で一瞬止まった。

魔優子は右手を上げて身を守ろうとする。蓮華の矢が動きを止めた魔族に襲いかかる。

「避けないの？」

魔優子はその疑問に目を細める。油断なく相手を見つめる。魔優子の目の前の魔族は、動き回るのを止めたまま両手を目の前で交差した。

蓮華の矢は魔族の腕に当たると、激しい光を発して消滅した。

魔優子はそのまぶしさに思わず目をつむる。

「しまった！ 捨て身ね！」

蓮華が自分の失敗を悟り叫ぶ。そう、魔族は捨て身で魔優子の隙を作ったのだ。

蓮華の悪い予感的中する。

閃光が収まると、魔族の左足が魔優子の脇腹にめり込んでいた。

魔族の両手からは煙が上がっている。肘から先がくすぶっていた。蓮華の矢のダメージだ。自分が傷ついても、魔族は魔優子への攻撃を優先させたのだ。

「魔優子！」

光助が声の限り叫ぶ。

魔優子は蹴りを入れられた勢いで、後ろに吹き飛んでいた。

「魔優子ちゃん！」

蓮華が宙を蹴った。

魔優子は痛みに気を失っている。力が入っていない四肢を空に向かって投げ出しながら、

「……」

魔優子は地上に落下していった。

千佳が空を飛ぶ柚希菜の上に馬乗りになった。直ぐに後ろを振り返り相手の様子を確認する。女魔族マド力が遙か後ろに見えた。豆粒のような大きさだ。

「速度落として」

柚希菜は二人分の体重の負担に耐えながらも、マド力以上のスピードを出している。

頼もしい限りだ。だが引き離し過ぎて、このまま追いかけるのを諦めさせては意味がない。諦めてとって帰られては、チームキューピッドが危ない。

「オツケーッス！」

柚希菜が威勢よく返事をした。空を思う存分に飛んでいる。上機嫌なのだろう。

「スピードを落としてって……」

千佳が返事の割には速度が落ちない柚希菜に、もう一度言い換えて言ってみた。

「落としてるッスよ！」

微調整はやはり苦手らしい。本人としては力を制御しているようだが、速度は変わったようには見えなかった。

「分かった。旋回して……細かいことを頼んだ私がバカだったわ……」

「何を！ ひどい言い様ッスね、千佳ッチ！」

「文句は後よ。回り込んで迎え撃つわ」

「任せるッスよ！」

柚希菜が体を上にそらせた。大きな弧を描いて上昇していく。長いツインテールが揺れた。その度に千佳の顔を柚希菜の髪が打ちつける。

「わざとやってんの？」

「何がツスか？」

柚希菜の体が完全に反転する。マドカの体が見る見る大きくなつて近づいてくる。

「柚希菜…… 飛びながら矢を射れる？」

「誰にものを言ってるツスか？」

柚希菜が体の上下を戻しながら弓を構えた。バランスを崩して左右に揺れる。

千佳が落ちそうになった。慌ててツインテールを掴む。

「柚希菜。ちょっといじるわよ」

「？」

千佳が柚希菜のツインテールを根元で結び始めた。

マドカはもう全身がはつきり分かるぐらいに近づいている。

千佳は幾つかの束に分けて固く結んだ柚希菜のツインテールに、左足を引っかけて立ち上がった。

「ひどいツス！」

自慢の髪を固く結ばれてしまい、後頭部に足を乗せられた柚希菜が抗議の声を上げる。

「柚希菜。合図したら矢を放つて」

千佳は柚希菜の抗議を無視した。

「体が傾くツスよ！」

「なるべく水平を保つて。矢は全力で。狙いは二の次。ありったけの威力で放つて。矢を放ったら、真っ直ぐ魔族に向かって飛んで。ギリギリをかすめて」

「注文が多いツスよ！」

「できない？」

「できるツスよ！」

二人は女魔族と目が合った。

「射つて！」

千佳が叫び、

「おりゃ！」

柚希菜が有りつ丈の力で矢を放った。

地面に激突する寸前——魔優子の体を蓮華が掴んだ。一気に上昇する。

「魔優子ちゃん！ 大丈夫？」

光助のいるビルの向かいのビルに二人は着地した。

「……」

魔優子は返事ができない。意識は蓮華に掴まれた時に取り戻したようだ。だが痛そうに脇腹を押さえるだけで、声が出せていない。息も苦しげだ。

「怖い？」

蓮華が訊いた。

「怖いわ」

魔優子が答える。『怖い』と言う割には、力強い声だった。

「でも…… 守らなくっちゃ……」

魔優子は光助を見た。真っ直ぐな視線だった。光助も魔優子を見ている。

「魔優子ちゃん……」

「チッ……」

魔優子のひたむきな感情が蓮華を喜ばせ、人間の前向きな感情が魔族を苛つかせた。蓮華が嬉しそうに呟き、魔族が不快感をあらわにして舌打ちする。

「不愉快だぞ、人間！」

魔族が左手の掌を魔優子達に向けた。蓮華がとつさに天使の輪を右手に移し前に突き出す。魔優子はその後ろで輪を頭に戻して弓を構えた。

「フンッ！」

魔族は唐突に狙いを変えた。向かいのビルでこちらの様子をうかがっていた光助に、魔族の左手から放たれた雷が襲いかかる。  
「がっ！」

光助は文字通り電流に打たれたように、身をのけぞらせその場で倒れ込んだ。手に持った天使の輪が明滅する。

「光助！」

魔優子が声を上げた。思わず光助の倒れ込んだ先に目を移す。向こうのビルの方が少し高い。倒れ込んだ光助の姿が見えなくなった。魔族が光助のいるビルに降り立つ。鉄さくの上に器用に着地した。「チツ、一撃のはずが…… 天使の輪の力か？」

光助はうずくまっっているが、死ぬようなことはなさそうに見えた。天使の輪は力をなくしたのか、弱々しく点滅すると光らなくなった。

天使の輪の加護はもうない。いつでも殺せる。

魔族はそう判断したのか、光助から興味を失ったように顔を前に戻す。

「光助！」

魔優子がたまらず駆け出した。姿が見えない。まずはと飛び上がるうとする。

「ダメよ！ 魔優子ちゃん！」

蓮華が慌てて止めようとしてか右手を上げる。だが掴み損ねた。蓮華の右手がむなしく宙を泳ぐ。

「ほらよ」

魔族が薄く笑って、左手を払った。我を忘れて向かってくるキューピッドは隙だらけだ。

「キャツ！」

飛び上がりかけた魔優子の足下に魔族の左手から黒い物体が放たれた。粘液質なその物体は魔優子の足に絡みつく、足首から下全体を覆ってビルの屋上に魔優子を縛りつける。

「魔優子ちゃん！ この！」

地面に釘づけになった魔優子を守るべく蓮華が駆け出した。魔族が更に左手を振り上げる。

「く！」

蓮華は次の一撃に備える為に、相手の左手に全神経を集中させた。

「足下がお留守だぞ」

「何？」

蓮華は魔族のその一言の意味が理解できなくなった。

だが足下を襲った衝撃に、直ぐに己の不注意を悟らされる。

「——ッ！　しまった！」

魔優子の足を覆っていた物体の一部が千切れ、蓮華の足首に覆いかぶさっていた。

「動けない！」

魔優子が叫ぶ。蓮華も同じ状態だ。二人して身を振るがビクともしない。

魔優子と蓮華はビルの屋上で足を取られ、向かい合って動けなくなった。

「射って！」

「おりゃ！」

千佳が叫び、柚希菜が矢を放つ。

「——ッ！」

マドカはその巨大な光に目を見張った。弓を離れた光は矢というよりは一本の槍のようだった。しかも近づくにつれその大きさを増した。丸太のような光の矢がマドカの目の前に迫る。

「やる……でも近過ぎ！」

マドカは距離が近過ぎてスピードに乗り切れない光の矢を、僅かに身をそらしてかわした。

「それに正確さに欠けるわね。さすがガサツちゃん。それとも、ヤケになった一撃？」

巨大な光が突風すら巻き起こして脇をすり抜ける。一瞬マドカの視界の半分が光に覆われた。

「だあっ！」

マドカの視界が戻ると、光の矢に続いてキューピッドがその脇をすり抜けた。

「ふん！」

マドカはとつさに体を反転させる。

「もらったわ！」

自分に背中を見せて遠ざかって行くキューピッド。その背中に向かってマドカが左の手の平を見せつけながら叫んだ。

「ありったけの魔力を込めてあげる。天使の輪のないキューピッドなんて、ひとたまりもないわ」

マドカは黒こげになったキューピッドを想像してか、舌なめずりをした。

「背中ががら空きよ！ ガサツちゃん！」

がら空きの背中を曝すキューピッドの背中に狙いを定め、マドカの左手が妖しい閃光を発した。

「どうなつて……」

光助が痛む体をさすつて呟く。ビルの屋上で体を起こし、とつさに辺りを見回す。

魔族が光助に背中を見せていた。光助など眼中にないようだった。鉄さくの上に乗し、魔優子達を見下ろしている。

電流の影響か光助の視界は少しぼやけていた。

「さて終わりだ」

魔族が左手を天に掲げた。魔力を左手に集中する。

「随分とコケにされた。仕事の邪魔をした報いを受けてもらおう。いたぶつて殺すもよし。一息に殺すもよし。ふふん、気分がいいよ」

魔族の顔が満足げに歪んだ。

「終わり？」

光助は向こうのビルを見た。魔優子と蓮華がもがいている。足下には黒い粘液質な物体が絡みついていた。魔族の左手には、同じく黒い気のようなものが集まっている。

光助は身震いする。直感が危険を知らせる。生命の危機を感じさせる力が、魔族の左手に宿っているように見えた。

「させるか！」

三人ともやられる。いや魔優子がやられる。そう思った瞬間、光助は跳ね起きた。

自分でも意識せずにだろう、光助は叫ぶや否や魔族に飛びかかっていた。二メートルはある鉄さくに掴まり、無我夢中でよじ上った。  
「ん？」

魔族は光助の叫び声に直ぐに気がついたのだろう。だが慌てもせずに振り向いた。

光助の天使の輪はもう力を失っている。天使の力を借りずに、人間程度がどうこうできる訳がないからだ。

「——ッ！ 何？」

だが魔族は目を剥いた。一度光を失った天使の輪が光輝いている。

「まさか！ 貴様！ 自分で！」

「食らえ！」

光助が魔族の足を天使の輪で払った。

「光助！」

魔優子が光助の無事な姿を見て歓喜の声を上げる。

「きさま！」

魔族は自分の足を襲う衝撃にバランスを崩した。鉄さくの中へ、光助の上へ落ちてくる。

光助は屋上に背中から落ちた。魔族が光助の上に落ちそのまま馬乗りになる。服越しても分かる、魔族の冷たい体。その命を感じさせない冷気が光助の全身に冷や汗をかかせる。

「人間。調子に乗り過ぎだぞ」

魔族の顔が光助に迫る。光助はとつさに天使の輪を突き出した。魔族の胸に押し当てる。

「グッ！」

魔族が上体をそらせた。胸から軽く煙が上がっている。

「魔優子ちゃん！」

蓮華が魔族を指差す。

「蓮華！ どうしたら？」

「私は無理！ 逆向いちゃってるもの！ でも魔優子ちゃんなら！」

魔優子は蓮華の言わんとするところを直ぐに理解したようだ。魔優子が弓を慌てて構えると光の矢が現れた。

「くらいなさい！」

向こうのビルの方がやはり少し高い。わずかに上半身が見える魔族に魔優子が狙いを定めた。狙いが定まるや否や魔優子は矢を放つ。

「おのれ！」

魔族がとつさに身をかがめて矢を避けようとした。再度光助が突き出している天使の輪に、我が身を押しつけることになった。

魔族の胸に光助の天使の輪が押しつけられ、魔族の背中を魔優子の天使の矢がかすめた。

「——ッ！」

魔族が声にならない悲鳴を上げて床に転げた。

「今だ！」

光助は飛び上がった。魔族に馬乗りになる。形勢逆転だ。両手で掴んだ天使の輪で、渾身の力を込めて光助は魔族の体を押さえつける。

「ガッ！」

魔族が悲鳴を上げた。天使の輪の力が効いている。

「魔優子！ 今だ！」

「光助！ ダメ！ 相手が見えない！」

弓を構えた魔優子が叫ぶ。魔優子の位置からでは上体を上げた光助の上半身は見えても、魔族の体は完全に見えなくなっていた。

「くそ！」

光助は魔族を見た。苦痛に顔を歪めている。しかしゆっくりとその手を天使の輪に伸ばそうとしている。

一応動けるようだ。天使の輪で押さえつけているだけでは完全ではないらしい。

「どうやったら締めつけられるんだ？」

光助が叫んだ。魔優子と蓮華を交互に見る。

「天使の輪って、さっきみたいに伸縮自在なんだよな！ この輪でつかまえばいいのか？ どうやったらいい！」

「光助くん！ 残念だけどあなたには無理よ！ 天使の輪とか矢とかは特別な物なのよ！ あなたには物理的には扱えても、魔優子ちゃん達のように扱えないわ！」

蓮華がさすがに焦ったように歯がみをしながら言う。

「でも、さっきは！ 光が戻ったぞ！ 俺じゃ、ダメなのか？」

「力が再度注入されたのは奇跡よ！ 光助くんの思いが起こした奇跡よ！ だけどそれ以上はさすがに——」

「この！」

魔族がついに天使の輪を掴んだ。力ないが押し返そうする。

「人間め！」

魔族が牙を剥いた。

天使の輪の光が弱くなる。一度は取り戻した天使の輪の光が、明滅を繰り返す。

「ヤバイ！ もたないぞ！」

光助は天使の輪の光が弱くなる度に、かなり押し返される。完全に輪が光を失えば跳ね返されるのは目に見えていた。

「光助！」

魔優子が叫ぶ。悲痛な叫び声だった。

「この！」

光助が両手で掴んだ天使の輪で魔族を押し返す。魔族との力比べの様相を呈してきた。

だが光助の腕が小刻みに震えている。関節が軋んでいる。筋肉が強ばり出している。

「やべ…… もたないか……」

自信の腕の限界が近いという現実が、否が応でも光助に突きつけられる。

天使の輪の光が時折弱くなり、相手の力が一瞬上回る。魔族に度々押し返される。

「光助！」

魔優子の声が光助に聞こえる。聞いたことのないような叫びだ。泣いているのかもしれない。

「魔優子！」

光助が顔だけ上げた。否が応でも魔優子の姿が目に入る。キューピッドのコスチュームを着た魔優子だ。

「何よ……」

「何だ、その…… 似合ってるぞ！」

「何よ！ こんな時に何を言ってるのよ？」

「え、その…… ずっと言い損ねてたし…… 最後に……」

「最後って何よ！ バカ！」

「バカって何だよ？ 本当に思ってるって、その天使の姿も、羽も矢も——そうか！」

光助は思ったように勢いよく顔を上げた。油断なく右手を上げて魔優子に振った。

「魔優子！ 矢だ！」

「えっ……」

「矢をくれ！」

「——ッ！ 殺す！」

魔族が体をよじって暴れた。光助の機転に危険を察したのだろう。光助が右手を天使の輪に戻した。もう一度両手で押さえにかかる。魔族が更に暴れた。もう両手でないと押さえられない。

「魔優子！ 早く！ 矢だ！」

「でも…… それって——」

魔優子は自分の弓を見た。そして光助を見る。光助の上半身しか見えない。

「それって、何処を狙えって言っのよ！」

上半身しか見えない光助の姿。その胸元に目を吸い寄せながらも魔優子は困惑気味に叫び上げた。

「背中ががら空きよ、ガサツちゃん！ ん？ 背中？ ガラ空き？——ッ！ しまった！ もう一人は？」

マド力が空中でとつさに顔を上げる。いたはずの人間を探してめまぐるしく首を廻らす。

「背中をがら空きにしているのはむしろ——」

マド力がとつさに空中で身を翻した。

「——ッ！」

マド力はもう一人のキューピッドが、己の目の前で弓を構えているのを見て驚きに顔を歪めた。

誰がどう見ても自分の力で飛んでいるようには見えない。自由落下の途中のような動きで、身を翻したマド力の頭の上からそのキューピッドは現れた。

「私の方だったって訳ね……」

キューピッドと目が合ったマド力が苦々しげに呟く。

一点しか見ていない半目がマド力の瞳を貫いた。

「この距離なら、外さないわ……」

「——ッ！」

同時にマド力の左胸に激痛が走った。

「やるわね……」

マド力は落ちていくキューピッドを見てうめく。

「あーあ。このままじゃ、地面に激突ね。あの半目ちゃん。ま、知ったこっちゃないけど」

半目のキューピッドはどんどん小さくなっていく。

飛ぶ力も矢に回したのだろう。そして全力を矢に回した為、飛ぶ力が回復していない。もとより上手く飛べていた訳でもない。

「あの速度で空に身を投げ出すなんて、大した思い切りと度胸だね。あんな微力な魔力のくせに。無防備で魔族の前に体を投げ出して、

たいした勇気だわ……」

そこまで呟いてマド力は不快げに顔を歪めた。

「ふん…… 度胸や勇気だなんて、正の感情よ。何を感じているのよ、私ったら」

マド力はそのまま自分の左胸に刺さった矢に目を落とす。煙を上げてくすぶっていた。力がそこから抜けていく。

「致命傷ではなさそうね。やっぱりあの半目ちゃんの魔力は弱いからね。でもこれ以上の戦闘は無理ね。私の負けか……」

マド力はため息を一つついて顔を伏せた。

「そうね。今日のところは私…… 身を引くわ……」

マド力が芝居がかったしおらしいセリフを吐く。目も伏せ、涙腺まで潤ませてみせた。まるで恋人でも失ったかのように、悲しみに身をうち震わす。

そしてもう一度矢が刺さった己の体を見下ろした。

それはあるとすれば心臓の位置だ。その位置を確かめたマド力は涙を振りまきながら顔を上げると、一転して満面の笑みで叫んだ。

「何と言っても、ブローケンハートだしね！」

マド力が楽しげに宙を蹴る。そのまま瞬間に上昇し姿が見えなくなった。

「……」

魔力の限りを放った千佳は吸い込まれるように地面に落ちていた。

「そうね！ 矢なら使い方は単純。物理的に突き刺せば効果があるはずよ」

蓮華が光助の意見に賛同する。魔優子に振り返った。

光助に矢を届ける役目は、もちろん魔優子のものだ。蓮華は力強く魔優子にうなずく。

「どうしたらいいの？ どうやったら光助に届けられるの？ 光助の両手、塞がっているじゃない！」

「何を言ってるの、魔優子ちゃん？ 手はあるでしょ？ あなたも気づいているでしょ？」

「……」

「矢を届けるには…… 決まってるよ。射抜くんだよ」

蓮華は少し余裕を取り戻した。いやむしろこの状況が蓮華を喜ばし力づけたようだ。

いつもの笑顔が蓮華の顔に見る間に広がっていく。

「射抜く？ 射抜くの？ 私が？ 光助を…… て、何処を……」

「何を言ってるの？ 天使の矢で狙う場所の一つだよ、魔優子ちゃん」

「えっと……」

「大丈夫！ 光助くんなら受け止めてくれるよ！ 魔優子ちゃんの光の矢！」

会心の笑みを浮かべて蓮華は続ける。

「思いつき矢に思いを乗せて！ そうしないとすぐ見えちゃうからね！」

「ええっ！」

「乗せるのよ！ 魔優子ちゃん！ あなたの思い！」

「えっ？ そんな！ できないって！」

「魔優子ちゃん！」

「——ッ！」

「……分かってるでしょ？」

「……」

魔優子がうなずいた。弓を構え、弦を引く。今までにない力強い

光の矢が弓に現れた。

「こいつ！」

光助が魔族を押さえつけながら、力の限り上半身を上に伸ばした。魔優子の位置からかろうじて光助の胸から上が見える。魔族を押さえながらの光助の左胸は、途切れることなく揺れていた。

だが魔優子は動じた様子も見せずに狙いを定める。

「さあ、魔優子ちゃん！ 彼のハートを射抜いちゃいなさい！」

「——ッ！ 光助！」

魔優子が光の矢を放つ。光の矢は乗せられた思いのままに、光助に向かって真つすぐ飛んだ。

「——ッ！」

光助の胸に光の矢が突き刺さった。

その衝撃と閃光に一瞬目をつむりそうになるのを、光助は必死でこらえよとしてか目に力を入れた。

「うおっ！」

光助が耐えた。目をつむらない。うちに秘めた思いのままに、光助は真つ直ぐ前を向く。

「魔優子！ あの時は悪かった！」

「何よ？」

「カフエだよ！ 真つ直ぐ見れなかったんだよ！ 珍しくしおらしい顔なんてするから！ 急に意識しちまってよ！」

「なっ！」

「あの時の俺の態度が、今回の事態を招いた！ もう間違わない！ 天使の矢云々以前に、俺が見つめたいのは——」

光助が胸元の光に耐えながら、それでも真つ直ぐ魔優子の方を見つめる。

「ちよっと、光助！ 人前で何を言い出すのよ！」

「ふざける！ 人間！」

「うお！」

魔族が一際大きく身じろぎをした。その動きに光助は途中で言葉が詰まってしまう。

「いいところで邪魔すんな！」

最後に激しい閃光が矢から放たれ辺りが光で包まれた。光が収まると光の矢が光助の胸元に突き刺さっていた。

「届いた…… ありがとな！ 魔優子！」

「光助……」

魔優子が小さくうなずいた。

同時に光助の手元の天使の輪が完全に光らなくなった。

「人間め！」

魔族が光助の腕ごと光を失った天使の輪を払いのける。

「うわっ！」

光助には抵抗する間もなかった。天使の輪が弾き飛ばされるやいなや、光助は光の矢を自分の胸から引き抜いた。

魔族が光助をはねのけるように立ち上がる。光助は弾き飛ばされ、後ろに倒れそうになるのをかろうじて耐えた。

魔族が両膝を曲げて飛び上がるうとしている。

「だっ！」

光助が光の矢を必死で前に突き出した。魔族は跳躍を止め、体を反転して避けた。

光助は魔族を追い越してしまい思わずたたらを踏む。魔族と光助の位置が入れ替わった。一瞬、魔優子の姿が見える。

「この！」

光助は反転して矢を払った。あらためて飛び上がりかけた魔族の膝に矢がかすめる。

「グッ！」

魔族が地面に落ちた。片膝をつく。

「かすっただけでこのダメージ。いける！」

その魔族の様子に光助は勢いづく。

その背中で遠く魔優子が見守っていた。

「食らえ！」

その視線を感じ取ったのか、光助が魔族の胸に矢をもう一度勢いよく突き出す。

「舐めるな！」

魔族は先端が胸に刺さる寸前——己の右手で矢を掴んだ。魔族の右手から肉の焦げる煙と匂いが立ちこめる。鼻を突く匂いを上げて、煙が辺りに漂い出す。不快な匂いだ。

「観念しやがれ……」

光助が矢を持つ両手に力を込める。

「生意気だぞ！ 人間！」

魔族は空いている左手を上げようとした。光の矢の力か、その動きはまたぎこちなくゆっくりとだった。それでも確実に光助のノドに向かって伸ばされてくる。

「光助！」

魔優子が魔族の意図を察し悲鳴を上げる。首を狙っているのだ。

「思い知れ……」

魔族の指先が光助のノドに触れた。ぞつとするような寒気が光助を襲う。

「——ッ」

殺される――

本能がそう告げたのか、どつと冷や汗が光助の額を流れ落ちた。

だが光助はそれでも矢を手放さない。

「悲鳴ぐらいあげたらどうだ？ 人間」

「俺が逃げたら次は魔優子達だろ？ 舐めんなよ」

光助が必死に矢を前に押し出した。

魔族の左手が完全に光助のノドを覆った。冷たい感触が光助の背筋を凍らせる。

「ダメ…… ダメよ……」

魔優子が必死に体を擦らせた。足に貼り着いた物体はビクともしない。助けにいけない。

「このっ！ 仕方がないわ…… 私の全力を――」

蓮華が何やら呟いた。

それより一瞬早く――

「光助！」

魔優子の背中が光輝いた。

「ひどいツスよ！　これ絶対ほどけないツスよ！」

柚希菜が後頭部に手を回して言った。自慢のツインテールが力づくで結ばれている。

「大丈夫。柚希菜ならショートも似合うわ」

千佳がすました顔で言った。

「えっ……　そ、そう……　てっ！　切るの前提ツスカ？」

柚希菜は一瞬本気で照れてから公園で声を荒らげる。

この少し前。地面に激突する寸前、千佳は柚希菜に拾われた。間一髪だった。

地面をかすめた二人の肩は、擦り傷からにじみ出る血と、ついた砂で汚れていた。

千佳をキャッチした柚希菜は近くの公園に降り立った。無茶をした友人を降ろしてやる。その友人はせっかく助けてやったのに、素知らぬ顔で人の意見を無視したことを言った。

「後、飛び降りるとは聞いてなかったツスよ。地面に激突する前に拾えとも……」

柚希菜が珍しく語尾を濁らせた。無謀な賭けに出た友人を叱ってやりたいが、いつもと立場が逆なのでどうしたらいいのか分からないのだろう。

「ちなみに、『背中を見せ続けて相手の注意を引きつける』とも言っていないわ。お互い様よ……」

千佳が反論する。

「そうツスカ」

柚希菜がふてくされて言う。

「そうツスよ……」

珍しく千佳が笑顔を浮かべて言った。滅多に見られない満面の笑みだった。

閃光が辺りを一瞬にして覆う。眩い光が全てを覆い屋上一面に一片の影すらなくなる。

「魔優子ちゃん？」

蓮華は驚いて魔優子を見る。その眩しさに目も開けられない。かろうじて目を開けてみると、光に埋もれて魔優子の姿すら見えない。魔優子が光の中から、背中の巨大な光の翼とともに現れる。飾りの翼とは比べ物にならない大きさだ。両手を伸ばしてもその先端には届かないだろう。まるで本物のキューピッドの羽だ。

「すごいわ…… 魔優子ちゃん……」

蓮華が呟く。

魔優子が翼を羽ばたかせた。しかし魔優子の体は浮かない。魔優子が必死に翼を羽ばたかせた。その度に周りの空気が巻き上げられていく。

「いけるわ。魔優子ちゃん。そのまま！」

蓮華は魔優子の足下を見た。何度も羽ばたくうちに、魔優子の体は少し浮き出していた。魔優子達の足を絡めとっていた粘液質の物体が、上昇する力に負けて伸び始める。

「何……」

魔族が魔優子を見て愕然と呟く。想像以上の力だったのか呆然とそちらを振り向いていた。そして思わず注意が逸れたのかその手から力が抜けた。

「これで！」

その隙に光助が更に力を込めた。一気に前に光の矢を押し出す。ノドにあてられた左手の恐怖を押し殺して前に出る。

「貴様！」

魔族が光助のノドから左手を放し、両手で矢を持ち直す。左手からも煙と匂いが立ちこめた。

魔優子が一気に上昇する。魔族が自分の力を全て矢に集中したのか、粘液質の物体が急速に力を失い引きちぎられた。

「光助！」

魔優子は背中の中の羽で一直線に光助に向かって飛んだ。光助の背中が瞬く間に大きくなる。

「魔優子！」

光助は風を切る音を背中に感じた。魔優子が飛び込んでくるのを肌で感じた。

魔優子が鉄さくを飛び越え、光助の隣りに降り立った。

光の矢を持つ光助の両手に、魔優子が自分の両手を重ねた。

「人間め！」

魔族が怨嗟の声を上げた。

魔優子と光助は、お互いを支え合うように肩を触れ合わせた。

光の矢が今まで以上の輝きを放つ。二人分の思いを乗せた矢が、更に明るく輝く。

「ガッ！」

魔族がのけぞり悲鳴を上げた。光の矢が魔族の胸に完全に刺さっていた。

「人間め……」

魔族がもう一度毒づく。そして光の矢が刺さった胸から黒煙が上がる。

その黒煙と一緒に力が漏れるかのように、見る間に魔族の体がしぼんでいく。

魔族の体から水分という水分が、蒸発しているかのようだ。

「そうよ。人間よ」

「何か悪いかよ？」

「くくく……」

魔族は笑いながらひからびてしまうと、

「カハ……」

そのまま灰になって崩れていった。

## エピローグ

「蓮華？ こっちはなんとかなった。そっちは？」

千佳が思念で蓮華に訊いてきた。思念でも感情を抑えようとして  
いるようだ。

「終わったところよ。ううん。始まったところかな？」

蓮華は隣のビルで座り込んでしまい、頭しか見えなくなった二人  
に目を向けて言った。

「？ 何？ 何の話？」

状況が分からない千佳は返答に困ったようだ。

「何でもない。大丈夫よ。後は若い二人に任せて私達は退散よ」

蓮華は二人に背を向け、屋上の出口に向かった。

「若い？ だから何の話、蓮華？」

「それも何でもない。終わったわ。皆ありがとう。事務所に戻って」

「ういッス！ 任務終了ッス！ 残ったシュークリームを——グワ  
ッ！」

「お前の分はもうない！」

「……はい……」

加奈子のげっそりとした返事が返ってきた。

「興奮！ この人！ 離れない！ 興奮！」

「えっ？ 何？ カナちゃん！ ついに禁断の花園へ？ あっちゃー  
っ！ 前から少女歌劇団ぽいっと思っていたら——やっぱりか！

まあいいいわ！ オッケーよ！ むしろ愛由美ちゃんは、スキャン  
ダルは大歓迎よ！ あ、でも！ 私は巻き込まないでね！ 私はノ  
ーマルよ！」

「うるさい！」

加奈子がありったけの思念を、拒否の意志とともに辺りにまき散  
らす。

「歡喜！ あはは！ 加奈子怒ってる！ 歡喜！」

「ああカナちゃん、今どんな感じ？ 見たいわ！ 聞きたいわ！ 知りたいわ！ ハチ！ 思念だけじゃもどかしいわ！ 生温いわ！ しっかり映像も送って！ ライブよ！ 生よ！ 中継よ！ 愛由美ちゃんがリポートしてあげる！ ピューリッツア賞だって狙うわ！」

「無理です……」

那奈の弱々しい思念が届けられた。愛由美に体ごと揺さぶられてもしているのだろう。

「でも、蓮華。これで終わりでいいの……」

「千佳？ そうよ。一段落よ。まあ、魔族は追っ払ったけど、残念ながらCDSとしては破綻として処理だよね。このCDSを参照しているシンセティックCDOも清算。週明けの月曜日には、キューピッドデリバティブ市場を激震が襲うかもね。怒号が飛び交うわよ。結局魔族にとつても、望む結果になっちゃったわね。だけど、まあ、しばらく退屈しなくて済みそうだよ」

「あんまり慌ててないわね…… むしろ楽しそう……」

「あはは。仕方がないよ。他人の為に誰かが思いをねじ曲げる必要なんてないもの。CDSの補償もあるし、苅田英里奈さんは大丈夫だと思うわ。シンセティックCDOの方は、こつちも仕方がないよ。リスクはリスク。契約は契約。正しく機能しただけよ」

「何？ 最初から期待してなかったの……」

「期待はしていたわよ。ちゃんと正しく恋が実るようにね」  
「なるほど……」

「まあいいじゃない。英里奈さんは新しい恋も始めたみたいだし大丈夫よ。やっぱ実際に恋をする現場が一番強いわ。問題ありと言えば問題ありなんだろうけど、それこそ仕方がないわ。愛情の形は人それぞれだものね。加奈子は大変だろうけどね」

加奈子にしがみついている英里奈。それを想像してか蓮華が苦笑いをしながら呟いた。

「じゃあね……」

思念を終わらすと、蓮華は隣のビルに振り返った。

魔優子と光助の二人は肩を寄せ合うのを止め、何やら話してはうつむいていた。

もう二人でいることに何の不自然も感じない。

「ふふん」

蓮華が満面の笑みを浮かべる。そのまま蓮華は思いつきり背伸びをした。

そしておもむろに微笑むと、

「やっぱりこれだから、キューピッドはやめられないわ」

左手の指を一つ鳴らした。

魔優子と光助はお互いの肩をもたれ合わせて座り、それぞれ息を整えていた。肩を通じてお互いの温もりを伝え合っているかのようだ。

「あっ？」

魔優子が突然何かを思い出したのか、驚いたように一声発すると光助に向き直った。

「何だよ。突然」

支えを失った光助が一瞬倒れかける。

「あ、アクセサリー屋さんに、何の…… よ、用だったのよ？」

魔優子はわざとらしくヒザをきちんと揃えて正座した。そここのころをはつきりさせたいのだろう。

「何改まってんだよ？」

「真剣な話だからよ。何の買い物だったのよ？」

「な、何でもいいだろ……」

「何でもって……」

「……」

「……」

「ももも、物欲しそうな顔してた…… から、だぞ……」

光助はアクセサリーの化粧箱を、ぎこちなくポケットから取り出した。手の平に余らない程の大きさの、小さな四角い箱が小刻みに

震えている。

「——ッ！ それって！」

光助が買ったプレゼント。その箱。その中身。その化粧箱の形と大きさ。

「もしかしてそれって……」

「……」

「も、もしかしてそれ、指輪？ わ、私に！ ゆゆゆ、指輪！」

「お、おう……」

光助は震える手で蓋を開けた。

シンプルだが材質の良さそうな指輪が一つ、小さく輝いていた。

「な、何で？」

「何でって…… その…… 日頃世話になってるし……」

「でも指輪って！」

「べ、別に、ふふ、深い意味はないって！ その、俺だって最初は違うものにするつもりだったんだって！ それが、あの、その、魔族とかいう美しすぎるカリスマ女性店員さんにそそのかされて……

その、おだてられて、のせられて…… かつがれて、はやされて

…… 気がついたら、指輪を買わされてたんだよ…… さ、流石だよな…… 魔族……」

「ダメね…… だまされるタイプね…… 光助は……」

魔優子が自然と『光助』と呼んだ。

「別にいいだろ…… 魔優子……」

光助も『魔優子』と呼んだ。これからも照れた時は、『眉っ娘』と呼ぶのかもしれない。それでも魔優子は満足げに頷いた。

「でも、その、サ、サイズは？ 私だって測ったことないのに」

「えっ？ えっと…… サ、サイズは適当に…… その、どっかの

指には一つぐらい合うだろうと思って……」

「もう！」

「そんな…… 何で怒られるんだよ？」

「何処の指につけるかも重要なの！ バカね！」

「そんな！ 一生懸命バイトして、自分の買いたい物もあきらめたんだぞ！ 一人でアクセ屋さんに入るといって、罰ゲームみたいことにまで耐えたのに。あんまりだ」

「まあ、いいわ。つけて……」

魔優子はそつと右手の甲を差し出した。手の指を伸ばし薬指の両サイドだけは大きく広げる。

「ええ！ そこまで！」

「サイズは適当とか、言っただんだもの！ それぐらいフォローしてもらおうよ！」

魔優子は更に右手を突き出す。

「何だよ。これじゃまるで……」

「——ッ！ わ、私だって、そこまでの意味に取ってないわよ！ ほら、もらってあげるから、早くつけなさいよ！」

「何だよ……」

光助は照れくさそうに、魔優子の右手の薬指に指輪をはめようとした。二人してかなり震えている。光助はおぼつかない様子でなんとか指輪をはめてくれた。

魔優子は直ぐにぎゅっと胸元で指輪を腕ごと抱きしめた。ひとしきり抱きしめた後、目の前にかざして見てみる。

特に派手な飾りはないが、シンプルな曲線が優雅に描かれているリングだった。

「嬉しい……」

「……」

光助が息を呑む。魔優子が己がプレゼントした指輪に見入っている。目を輝かせている。その光景に光助はいつまでも視線を外せない。

「こ、光助のは？」

「えっ？ 俺の？ 指輪？ 何で？」

「何でって…… その…… も、もしかしたら…… ペペペ、ペア…… リングかなって？」

魔優子は思わずうつむいてしまう。言ってから真っ赤になっていた。

「な、何だよ、ペアリングって！ そんな訳ないだろ！ 自分向けの『ご褒美用』とかいうやつを、一個だけだって！」

「もう！ そこまで力一杯否定することはないじゃない！」

「もうって何だよ…… 恥ずかしいのをかなり我慢して、買ったんだぞ……」

「だって……」

「……」

「……」

二人はまた黙ってうつむいてしまう。ケンカをしたい訳ではないのに上手くいかない。

「……」

「……」

二人は何から始めていいのか分からないのだろう。

その時――

「――ッ！」

その時何処か遠くで指を鳴らす音がした。

「？」

魔優子の頭上で輝いていた天使の輪が力をなくして落ちてくる。

『ちゃんとつかまえていたい』って、思わないとダメよ――

魔優子の心の中で、蓮華の声がしたような気がした。

魔優子の頭に落ちた天使の輪は、そのまま音もなく目の前に落ちてくる。

魔優子と光助が、二人して天使の輪に目を奪われた。

天使の輪は輝きながら小さくなる。

魔優子と光助はそのまぶしさに思わず目をつむった。

「――ッ！」

輝き終わって目に入っただのは、魔優子のリングと瓜二つのリング。

光助の右手の薬指に、魔優子の天使の輪が光輝いていた。

#### 参考文献

『サブプライム問題の教訓証券化と格付けの精神』江川由紀雄（商事法務）

『はじめて学ぶ金融のしくみ第2版』家森信善（中央経済社）

『サブプライム逆流する世界マネー経済危機が投資チャンスに変わるとき』中井裕幸（実業之日本社）

『よくわかる格付けの実際知識』山澤光太郎（東洋経済新報社）

『デリバティブキーワード300』住友信託銀行マーケット資金事業部門（財団法人金融財政事情研究会）

『スタンダード&プアーズ金融用語集』ヴァージニア・B・モリス、ケネス・M・モリス共著、アイ・エス・エス・インスティテュート訳

『デリバティブのすべて増補版』藤井睦久、中村恭二共著（財団法人金融財政事情研究会）

『サブプライム危機はこうして始まった決定版アメリカからの最新レポート』ブルース・E・ヘンダーソン&ジョージア・ガイス共著 橋本碩也訳（株式会社ランダムハイズ講談社）

『スーパードットコム入門手形・小切手の知識』多比羅誠（日本実業出版社）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1324u/>

---

恋愛大量破綻兵器？ CDSキューピッド・デフォルト・スワップ！

2011年8月12日03時14分発行